

深町

—— 深町遺跡緊急発掘調査概報 ——

1979

小県郡丸子町教育委員会

序

丸子町依田地区は、埋蔵文化財を含む文化的遺産が数多く残っている地域として知られています。この依田地区で長野県東信土地改良事務所の手によって大規模な圃場整備事業が実施されることになり、丸子町教育委員会では、文化庁、県教委の援助を得て条里的遺構調査を事前に実施しました。その後、事業主体である東信土地改良事務所より事業区域内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査、立会調査の委託を受けた町教育委員会では、調査団を組織し、発掘調査を委託しました。今回の深町・竹の花遺跡発掘調査は、中城南遺跡発掘調査、四丁目遺跡立会調査に続く第三番目の調査として実施し、この報告書作成のはこびとなりました。

この「依田地区埋蔵文化財発掘調査団」は、一志茂樹博士を顧問とし、高野豊文・小穴喜一・黒坂周平先生を参与、五十嵐幹雄先生を調査団長とし、調査の中心は塙入秀敏調査主任、児玉卓文調査副主任が当り、その他多くの調査員、調査補助員、作業員の皆様方の御協力を得て実施されました。

この度の発掘調査は、報告書にみられるとおり大きな成果をあげ、数多くの遺構、大量にしかも貴重な遺物が出土しています。しかも県教委、丸山・関両先生の骨折りもあり、事業主体の協力もあって遺跡の大部分は盛土をして保存することができました。

最後に、長期の発掘調査ならびに龐大な遺物の整理にあたられ、この報告書作成にご尽力をいただいた調査団の先生方・ならびに補助員のみなさまがたに敬意と感謝を申し上げます。

1979年3月

丸子町教育長 齋藤 博

例　　言

- 1 本書は、依田地区ほ場整備事業による工事に先立ち、昭和54年4月から8月にかけて調査された長野県小県郡丸子町大字生田字深町に所在する深町遺跡の発掘調査概報である。
- 2 遺跡範囲が10000m²を上まわる広大な面積にわたる上、出土遺物が土器・石器その他合せて大型トラック1台分にもものぼる龐大な量なので、本書では、図・表及び写真による事実の紹介に主たる眼目をおき、記述は最少限にとどめることにした。遺構・遺物に関する詳細な記述や考察は、更に一層の検討を加えて、後日改めて報告したい。
- 3 各章の執筆分担は凡そ以下の通りである。

- 第1章 発掘調査の経緯と概要……………西沢吉次郎・事務局
第2章 環境……………塩入秀敏
第3章 遺構と遺物
　　第1節 検出された遺構……………林 和男
　　第2節 出土した遺物……………塩入秀敏・児玉卓文・西沢 浩
　　　　小林真寿・坂井美嗣
第4章 深町遺跡出土の骨類について……………西沢寿晃
第5章 まとめ……………塩入秀敏
4 出土遺物の整理は、五十嵐幹雄・塩入秀敏・児玉卓文・林和男の指導により、西沢浩・小林真寿・坂井美嗣・金井寿子・桜井泉・滝沢邦次・有賀隆が中心に行なった。実測図は執筆者がそれぞれ作成し、写真は、遺構写真を塩入秀敏・倉沢克彦・小林真寿が、遺物写真を塩入秀敏が撮影した。遺物・実測図・写真は丸子町教育委員会が全て保管している。
5 深町遺跡は、その重要性を理解された東信土地改良事務所及び地元工事委員会のご協力と県教委文化課のご指導により、現場調査終了後設計変更され埋設保存された。埋蔵文化財保護の面では特筆されるべきことである。関係各位に敬意を表したい。
6 本書が上梓されるまでには、非常に多くの方々や機関のご理解とご協力・ご指導があった。以下ご芳名を記して感謝申し上げる。八幡一郎・永峯光一・西沢寿晃・森嶋 稔(ほか千曲川水系古代文化研究所所員の方々)・岩佐今朝人・笹沢 浩(ほか長野県中央道遺跡調査団の方々)・関 孝一・丸山敏一郎・東信土地改良事務所・地元工事委員会・丸子北中学校
以上のはかに、事務局を担当され、非常な熱意をもって調査を推進された丸子町教育委員会と、まだ寒い時期から炎暑の季節まで熱心に調査に参加された作業員の皆さんに、深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

目 次

序

例 言

第1章	環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第2章	発掘調査の経過	6
第1節	発掘調査に至る経過	6
第2節	調査団の構成	7
第3節	発掘調査の経過	8
第3章	遺構の遺物	9
第1節	検出された遺構	9
第2節	出土した遺物	23
I	縄文時代の遺物	23
II	平安時代の遺物	110
第4章	深町遺跡出土骨類について	121
第5章	まとめ	127

あ と が き

挿 図 目 次

第 1 図 丸子町依田地区遺跡分布図	3
第 2 図 敷石住居址実測図	9
第 3 図 竪穴住居址実測図①	10
第 4 図 竪穴住居址実測図②	11
第 5 図 竪穴住居址実測図③	12
第 6 図 配石遺構実測図①	14
第 7 図 配石遺構実測図②	15
第 8 図 土壌実測図①	17
第 9 図 土壌実測図②	19
第 10 図 埋甕実測図①	21
第 11 図 埋甕実測図②	22
第 12 図 I 群土器	32
第 13 図 I・II 群土器	33
第 14 図 I・II 群土器	34
第 15 図 II 群土器	35
第 16 図 II 群土器	36
第 17 図 II 群土器	37
第 18 図 III 群土器	38
第 19 図 III 群土器	39
第 20 図 III 群土器	40
第 21 図 III 群土器	41
第 22 図 III 群土器	42
第 23 図 III 群土器	43
第 24 図 III 群土器	44
第 25 図 III・IV 群土器	45
第 26 図 IV 群土器	46
第 27 図 IV 群土器	47
第 28 図 IV 群土器	48
第 29 図 IV 群土器	49
第 30 図 IV 群土器	50
第 31 図 IV 群土器	51
第 32 図 IV 群土器	52
第 33 図 IV 群土器	53
第 34 図 II・III 群土器	54

第 35 図	II・III・IV群土器	55
第 36 図	V群土器	56
第 37 図	V群土器	57
第 38 図	VI群土器	58
第 39 図	VI群土器	59
第 40 図	VI群土器	60
第 41 図	VI群土器	61
第 42 図	VI群土器	62
第 43 図	II・III群土器	63
第 44 図	VII群土器	64
第 45 図	VII群土器	65
第 46 図	磨製石斧実測図(1)	68
第 47 図	磨製石斧実測図(2)	69
第 48 図	横刃部を有する石器・石匙形石器	70
第 49 図	石鎌形態分類模式図	73
第 50 図	石錐及び土版	83
第 51 図	三角墻土製品及び石劍	84
第 52 図	石冠・玉ベラ	85
第 53 図	土製耳飾	88
第 54 図	土製耳飾	89
第 55 図	土製耳飾	90
第 56 図	土製耳飾	91
第 57 図	土製円板	101
第 58 図	表身具	108
第 59 図	土偶	109
第 60 図	土師器	113
第 61 図	土師器	114
第 62 図	土師器	115
第 63 図	土師器	116
第 64 図	須恵器	117
第 65 図	灰釉陶器	118
第 66 図	灰釉陶器・瓦	119
第 67 図	土錐	120
第 68 図	人骨・鹿角	123

第1章 環 境

第1節 地理的環境

依田川は、最も広い沿岸地帯を最下流の丸子町地区にもつ。ほぼ紡錘形をなすこの平らな地帯の中央を依田川が北流し、最高所の腰越橋付近で標高約550メートル、最低所の千曲川合流点で約470メートルをはかり、南北長さ約5キロメートル、東西最大幅約2キロメートルである。右岸左岸ともに立派な河岸段丘が発達しており、第Ⅰ段丘、第Ⅱ段丘、第Ⅲ段丘とされている。

依田地町はこの左岸一帯に当り、南は独鉛山塊（または、独鉛山脈の東端尾野山山塊）の東端岩屋堂あたりから始まって、北は小牧山塊（または、小牧山脈の東端尾野山山塊）の東端白欠で集約されるまで、南北約4キロメートルの間に平らな地帯が広がっている。南と北の二つの山塊の間には日向山の山塊がある。ガラス質安山岩の堅い岩よりなる独鉛山塊は、壯年的でやや急峻であるが、小牧山塊、日向山塊は、第三紀の青木層、小川層の頁岩層や砂岩層によって形成されており、老年的な低い丘陵相を呈している。これらの山塊を開析して流れ出した小河川が平らなところを何れも東流しており、南から、唐沢川、中沢川、原沢川、堀田沢川、山王沢川と呼ばれている。

平らな部分は三段の河岸段丘よりなっているが、第Ⅰ段丘は五つの小河川によって形成された扇状地によって殆んど覆われ、僅かに中山と南原の間に段丘面が残存するにすぎず、ほかは、最も広い第Ⅱ段丘と、沖積氾濫原である第Ⅲ段丘によって占められている。各段丘上は、先の五つの小河川や、依田川からの灌漑用水によって大部分が水田化されており、また、扇状地は、小牧山塊からの沢水利用の開田が僅かにみられる外は、殆んどが畠地となっている。

集落の存在をみてみると、上組、中山・南原・北原・飯沼の各集落が平野部の辺縁部、すなわち山麓に位置している。また、尾野山・茂沢の三集落が小牧山塊中の山腹平坦部に立地するのに対し、三角集落は第Ⅱ段丘上の平野部の一部を占めている。

第2節 歴史的環境

依田地区には、遺物包蔵地、古墳・窯跡・条里水田址・城跡など、すでに圃場整備事業などにより破壊されてしまったものまで含め合計33の遺跡が存在する（存在した）ことが知られている。今後何かの拍子に偶然発見される可能性が皆無とは言えないが、一概に急増することはまずないだろうから、現時点で知られているこの数字に今後とも大きな異動はなかろう。

今日までに知られている遺跡の出土遺物をみると、縄文時代前期以前の時期まで遡れるもの

はないようである。現在のところ、最も古い時期に属する遺跡は、縄文時代中期初頭型式の土器を出土する井戸田遺跡及び上川原遺跡である。このほかに、縄文時代中期の遺跡としては、深町遺跡・高築地遺跡・芹田遺跡があり、このうち高築地遺跡出土の土器は加曾利E式土器とされている。

また縄文時代後期の遺跡には、深町遺跡・井戸田遺跡・芹田遺跡があげられる。深町遺跡出土土器については後述するが、縄文時代晚期の遺物とともに、非常な多種多量さが耳目を驚かし、全国でも有数のものである。芹田遺跡の遺物は、最近になってその内容が知られてきたが、後期中葉の加曾利B式土器が含まれていることが分っている外は不明である。しかし先日多くの遺物が採集されたので、近いうちに内容の詳細な検討が行なわれるはずである。おた、井戸田遺跡の後期土器は、後期前葉の掘之内式土器と考えられている。

縄文時代最後の晩期の遺跡は、わずかに深町遺跡がその存在を知られているだけであるが、芹田遺跡出土遺物にも晩期土器が含まれている可能性がある。このほかに、竹の花遺跡が縄文時代後晩期の遺物を出土する遺跡として学界に名高く、また昭和26年には、たまたま土地所有者によって発見された炉跡を、五十嵐幹雄氏が調査され、住居跡が一軒確認されている。しかし、今回の深町遺跡の発掘調査に先立って行なわれた試掘調査の結果、従来竹の花遺跡と称されてきた所の大部分が深町遺跡の範囲に含まれ、深町遺跡の周縁部のごく一部が竹の花地籍にかかっていることがわかった。竹の花遺跡として知名度があまりにも高いが、これからは徐々に訂正してゆく必要があろう。

これ以外に、明賀遺跡・神社下遺跡が、それぞれ打製石斧・石皿の単独出土地として知られており、縄文時代遺跡とされているが、ほかに出土遺物がないので、遺跡と言えるか否かはにわかに決めかねるところである。

弥生時代の遺跡は非常に少ない、現在、井戸田遺跡・上川原遺跡が、ともに後期の箱清水式土器を出土している。両遺跡とも出土遺物の内容がつまびらかでないので、その性格を推し測るのさえ困難であるが、井戸田遺跡は縄文時代中期・後期の遺跡でもあり、古くから居住適地として選ばれていた場所であったのであろう。

古墳時代になども、弥生時代と同様に遺跡の数は少ない。社軍神遺跡・大洞遺跡が前期の土師式土器を出土すること、調査された中条南遺跡が古墳時代後期の土師式土器を出土することが挙げられるにすぎない。このうち中条南遺跡は該期の遺構が存在せず、遺物出土量も僅少で、しかも調査後完全に破壊されて水田となってしまった。

一方、同じ古墳時代遺跡ではあるが、前述の遺跡とは性格を異にするものに古墳がある。大沢古墳・荒谷古墳・山の神古墳・岩谷堂古墳が存在する。このうち岩谷堂古墳は岩窟古墳で一般的な高塚古墳とは様相が異なるが、他は何れも横穴式石室をもつ土盛りの高塚式円墳である。しかし三墳とも破壊の進行が著しく、半壊或いは湮滅に近い状態である。出土遺物についても、岩谷堂古墳は乳文鏡・直刀・鉄鎌・紡錘車・土師式土器・須恵器の出土が知られているが、他



第1図 九子町依田地区遺跡分布図

第1表 丸子町依田地区遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	所在地	遺構・遺物	備考
1	大久保遺跡	包蔵地	縄	字大久保	(付)後期・高古墳・未切頭 錐打製石斧	単独出土
2	明賀	"	縄	明賀		
3	竹の花	"	"	竹の花		
4	深町	集落址	"(中・後・晚)・歷(付)	深町	縄文後晩期の遺構遺物 多數、平安時代の住居址 5、遺物多數	昭54調査・埋設 保存・本文
5	土塁	包蔵地	"・歷(付)	土塁	錐土器・磨製石斧・(付)後期 古墳時代後期の土師器、 平安時代の住居址2、土 ・須・灰彩	立合調査・破壊・ 本文53調査・破壊
6	中城南	集落址	古跡・歷(付)	中城		
7	上川原	包蔵地	縄・弥	上川原		
8	大沢古墳	古墳	古(後)	大沢		全壇に近い
9	荒谷	"	"	荒谷	"	"
10	鐵井戸遺跡	包蔵地	歷	鐵井戸		立合調査・破壊
11	四丁町	"	"	四丁町		
12	山の神遺跡	露址	"	山の神		
13	山の神古墳	古墳	古(後)	的場		半壇
14	田の入原址	露址	歷	田の入		
15	原沢遺跡	包蔵地	古(前)	原沢	古墳時代前期のS字状口 縁甃・有段口縁甃・器古 円面鏡	新発見・破壊
16	大洞遺跡	露址	縄	字大洞		
17	新原田新聞	"	"	新原田新聞		
18	三角遺跡	包蔵地	古・歷(奈・平)	三角	奈良・平安時代の土師器・ 須恵器、グリーンタフ原石、 土作工房址存在の可能性 有	
19	的場	"	古・歷	的場		
20	社軍神	集落址	古(前・後)	社軍神	土師器・須恵器	
21	源訪田	"	歷(奈・平)	源訪田	土師器・須魚器	
22	芹田	包蔵地	縄(中・後)・歷	芹田	縄文中期・後期土器・石 器・須恵器	新発見
23	井戸田	"	縄・弥・古・歷	井戸田	縄中期初頭型式土器・縄 之内式土器・石皿・石錐、 後期後期清水式土器(付)・ 鐵土・須	
24	恋恋	"	"	恋恋	錐土器・多孔石	
25	大洞	"	"	大洞	(付)前期土器	
26	日影	"	歷	日影	後期の土師器・須恵器・ 内耳	
27	神社下	"	"	神社下	鐵石皿	単独出土
28	高野地	"	"	高野地	縄中期加曾利E式土器	
29	砂原峰	"	"	砂原峰	錐石盤・打製石斧・石皿	
30	岩屋堂古墳	古墳		岩屋堂	乳文鏡・直刀・鐵錐・筋 輪車・土師器・須恵器	
31	依田条里水田址	"	歷	大字御嶽堂		
32	依田城跡	城跡	"	大学生		
33	尾野山	"				

(注)一連番号は分布図の遺跡番号と一致する。

の三墳については全く不明である。

歴史時代に入ると遺跡数は急増する。凡そ十数遺跡ほどが数えられ、これまでの時代には遺跡の存在が認められなかった尾野山も、この時期には居住地とされるなど、遺跡は依田地区全体に拡がって存在する。諏訪田遺跡は奈良・平安時代にわたる遺跡であり、その外にも多くの該期遺跡が挙げられるが、内容がはっきりせず不明な点が多い。そのような中で、三角遺跡は、現在の三角集落に重なって存在するが、広い範囲にわたって遺物が採集でき、相当大規模な遺跡の存在が予想される。

依田地区に存在する遺跡として忘れてはならないのが、須恵器及び瓦の窯跡である。小牧山塊の南山麓に、山の神窯跡・田の入窯跡・大洞窯跡・新原田新開窯跡が知られており、現在合せて十基にも満たないが、今後の新発見が期待されている。かつて、五十嵐幹雄・吉田章一郎・倉田芳郎・大川清・宮下真澄氏により、いくつかの窯跡の発掘調査が行なわれており、9世紀を中心操業されたものと考えられている。

最後に、条里水田跡と城跡を挙げておこう。条里水田跡は、依田地区水田地帯のうちの多くを占める部分に遺構の痕跡を残していたが、近年の圃場整備事業により、地下に埋れている遺構の調査を経ないまま、昭和の条里水田に姿を変えつつある。また、城跡としては、依田城跡と尾野山城跡がよく知られているが、依田城跡については不明な点が多い。小さな砦的城跡は、今後新たに発見される可能性が残されている。



見学に訪れた、依田地区
埋蔵文化財調査団一行

第2章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

長野県丸子町依田地区は、深町竹の花遺跡を始めとする約33の埋蔵文化財包蔵地をかかえ、歴史的にも文治2年(1186)『吾妻鏡』に「前斎院依田庄」としてみえ、また下っては依田城に關し、『平家物語』に、寿永2年(1183)3月「木曾は依田城に有けるが云々」とみえるなど、丸子町における歴史的一大中心地であるが、農業の近代化をはからうとする地元農家の熱望により、県営による圃場整備事業が実施されることになった。この計画は、昭和52年度から55年度までの3ヶ年で延134haを総工費約5億4,200万円で実施するものであるが、この圃場整備事業により依田地区に残る条里的遺構が破壊されるので、丸子町教育委員会では、事業に先がけて文化庁、長野県教育委員会の援助を得て、一志茂樹博士・高野豊文・小穴喜一・黒坂周平先生らを中心とする丸子町条里遺構調査専門委員会に委託してその調査・記録保存を実施した。

さて、この事業の実施主体である東信土地改良事務所では、事業を実施するに当り県教委文化課と協議したところ、区域内遺跡の保護については記録保存をすること、記録保存に伴う経費は実施者負担とするが、農家負担分については文化財保護側が負担すること等がとりきめられた。その後、地元丸子町教育委員会を含めた3者で協議の結果、中城南遺跡・深町遺跡・竹の花遺跡・社軍神遺跡・諫訪田遺跡については発掘調査を実施、四丁町遺跡・土堂遺跡については立会調査を実施することが決められ、事業主体・東信土地改良事務所・県教委より依頼を受けた町教育委員会では、町内の貴重な文化財を保護する立場からこの依頼を受け、丸子町依田地区埋蔵文化財発掘調査団を組織して発掘調査事業を委託した。

この深町・竹の花遺跡発掘調査は、前年度実施の中城南遺跡発掘調査、四丁町立会調査に続く第三番目の調査として、54年4月1日より実施された。長期にわたる調査であり、縄文時代から平安時代に至る複合遺跡であること、遺物の出土量が多いことなどから発掘調査は困難を極めたが、多くの配石遺構・集石遺構・土壙・石棺や住居址、13にものぼる埋葬等の遺構・玉べらや石冠・三角墳土製品などを含む多種多様、しかも大量の遺物などの貴重な成果を得られた。その後、すぐ遺物の整理、出土品の調査、検討がすすめられ、この報告書にまとめられて記録保存が図られることになった。ここに至るまでの調査員諸氏の熱意と努力は大変なものであった。ここに記して謝意を表したい。

第2節 調査団の構成

(1)発掘調査の主体（委託者）	丸子町教育委員会
(2)発掘調査の主管（受託者）	丸子町依田地区埋蔵文化財発掘調査団
顧問	一志 茂樹 信濃史学会々長・文学博士
参与	高野 豊文 長野大学教授
同	小穴 喜一 信濃史学会評議員
同	黒坂 周平 長野県史主任編纂員
調査團長	五十嵐幹雄 日本考古学協会員
調査主任	塙入 秀敏 日本考古学協会員・上田女子短大講師
調査副主任	児玉 卓文 長野県考古学会会員・上田染谷丘高校教諭
調査員	林 和男 " " 上田市教育委員会主事
同	百瀬 新治 " " 依田雍南部中学校教諭
同	西沢吉次郎 東信史学会員
同	川上 元 日本考古学協会員・上田市立博物館学芸員
同	小原 等 長野県考古学会会員・菅平小学校教諭
同	坂口 益次 長門町教育委員会派遣社会教育主事
調査補助員	金井 寿子 長野県考古学会会員・立正大学生
同	西沢 浩 " " 明治大学学生
同	坂井 美嗣 " " 長野大学学生
同	小林 真寿 " " 長野大学学生
同	有賀 隆 長野大学学生
同	桜井 泉 長野県考古学会会員
同	滝沢 邦次 明治大学学生
同	坂口 直樹 長野県考古学会会員・独協大学学生
同	倉沢 克彦 " " 信州大学学生
同	瀬田 晃 二松学舎大学学生
特別調査員	西沢 寿晃 信州大学医学部第2解剖学教室助手
事務局長	竹花源太郎 丸子町教育委員会社会教育課長
事務局	中村 司 " 係長
同	竹内 一徳 " 主事
同	山越 香子

第3節 発掘調査の経過

調査日誌は非常に長大なものになるので、まとめて整理し表化して、調査の進行状況がわかるようにした。

昭和54年 3月	4月	5月	6月	7月	8月
中旬			上旬		
法橋調査		グリット松強 東側確認 機械による表土剥離	遺構発出作業 北側確認 西側確認 南側確認	中旬 遺構復り上げ・実測作業 中旬	中旬 追加調査



調査風景



実測風景

第3章 遺構と遺物

第1節 検出された遺構

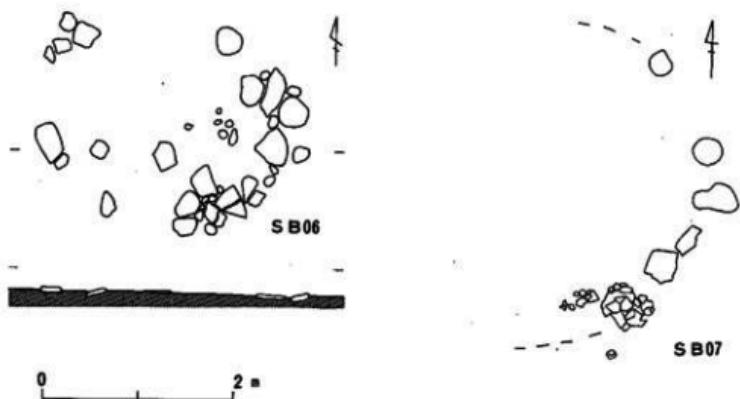
予備調査により、遺物の出土の多い箇所を調査対象地区とし、南北 87 m・東西 84 m の区域内は約 10,000 m² を発掘調査した。その調査から、本遺跡は縄文時代と平安時代を中心とした遺跡であることが判明した。また、調査区の周辺を試掘調査して遺跡の分布を調べたが、南側と北側に若干広がっている程度で、今回の調査では深町遺跡の全城を調査し得たといえる。なお、今回の調査では、遺跡を現状のまま埋めもどして保存することにしたため、下層の調査は行なわず、上層面の遺構を検出したにすぎない。遺跡内における試掘溝によると下層にも遺構が存在していることがわかったが調査は行っていない。

深町遺跡より検出された遺構は、縄文時代後・晚期と平安時代のものとがある。

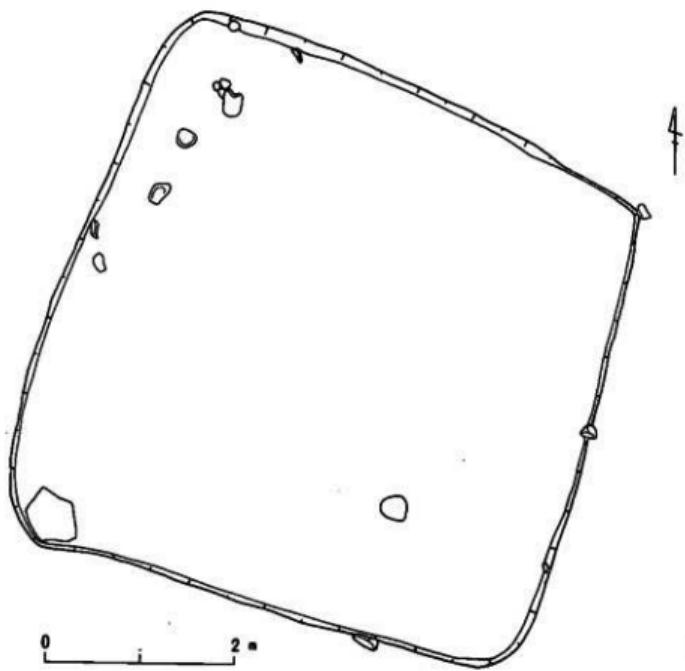
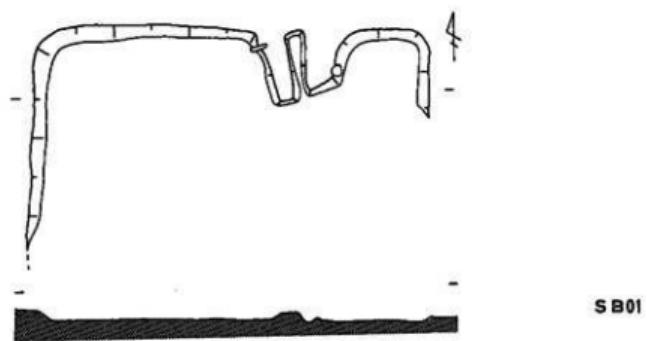
縄文時代の遺構は、敷石住居址 2 軒に土壙と配石土壙、配石（集石）遺構それに埋甕がある。ほかに遺構としては確認し得なかったが、骨片や黒曜石片、それに土器が多量に出土する礫群がみられた。

平安時代の遺構は竪穴住居址 5 軒に土壙、および、焼土に鉄さい・羽口などを伴なう小鎌冶址が検出されている。

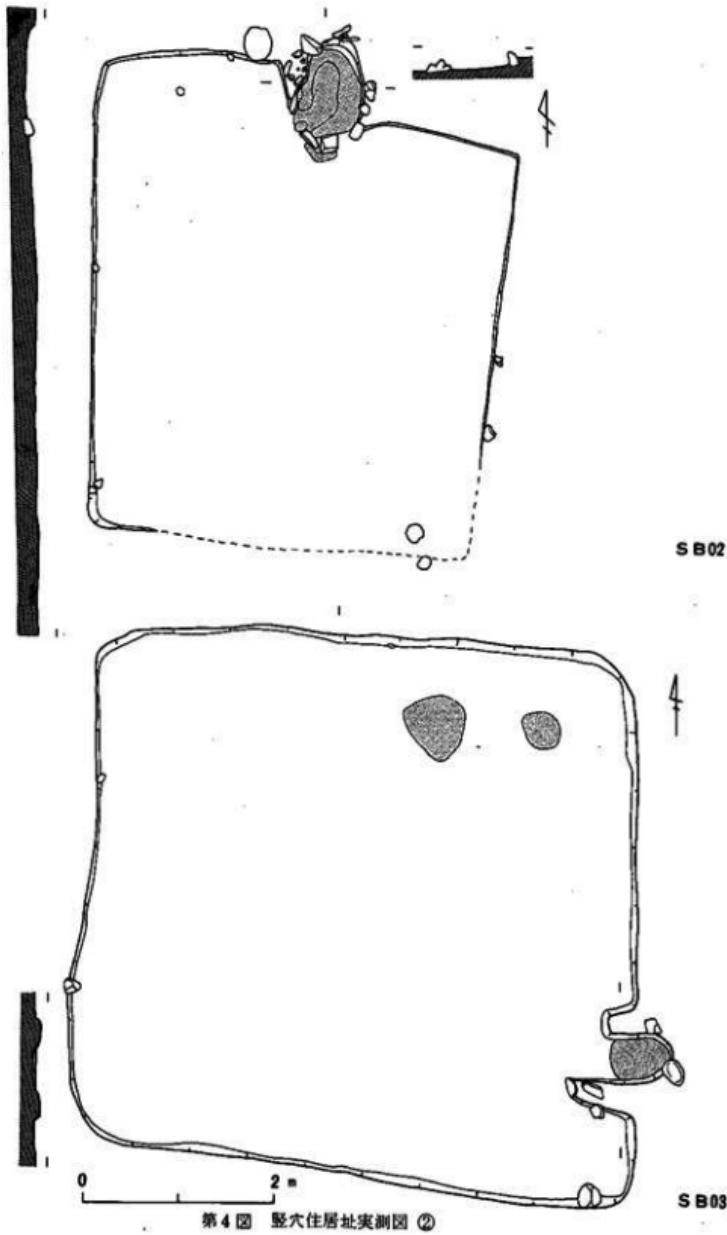
以下これらの遺構を概観してみたい。



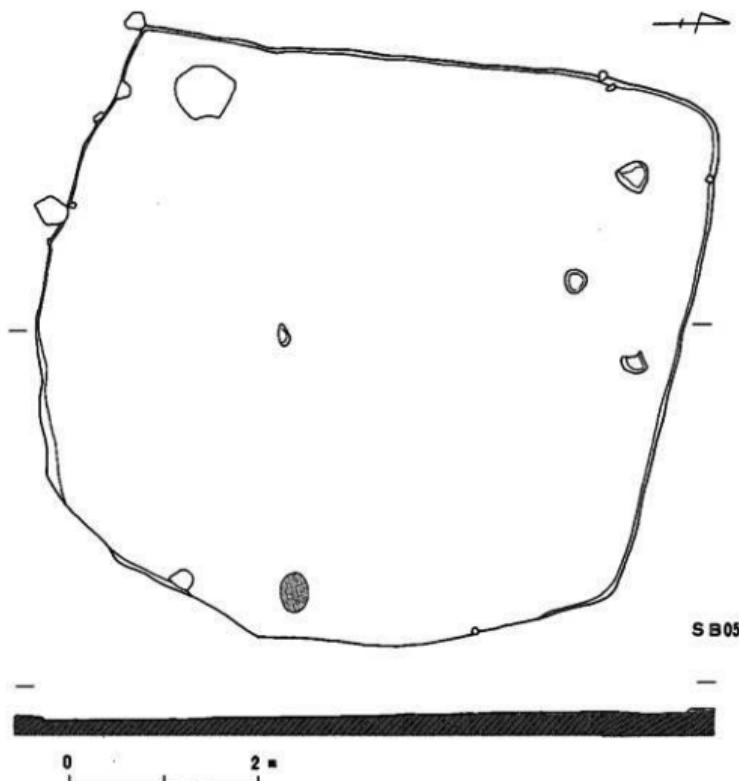
第2図 敷石住居址実測図



第3図 積穴住居址実測図 ①



第4図 橫穴住居址実測図 ②



第5図 整穴住居址実測図 ③

1. 住居址 SB

1) 敷石住居（第2図）

敷石住居址は S 3 E 6 グリットと N 39 W 36 グリットの2ヶ所で検出された。2軒とも耕作による擾乱を受けており、敷石の一部を残すにすぎなかった。

S B 0 6 は 280 cm × 240 cm のだ円形のプランをもつ。敷石には偏平な河原石と鉄平石とを用いている。住居中央部から北西側の敷石は移動しており、敷石以外の施設を検出することはできなかった。

S B 0 7 は東側の敷石の一部を残すだけであるが、円形のプランをもつものと思われる。敷石には鉄平石と偏平な河原石を用いており、住居東壁近くに完形土器がつぶれて残っていたほかは、他の施設を検出することができなかった。

2) 穫穴住居址（第3・4・5図）

検出された5軒の住居址は、いずれも床面近くまで耕作がおよんでおり、壁面をわずかに残しているだけである。このうち3軒はカマドをもつが2軒はカマドをもっていない。

SB01は調査区南東隅で検出され、住居北側4分の1ほどを残すにすぎなかった。カマドを北壁中央東よりに置き、北壁4.2mを計る。カマドは、長さ75cm、巾90cmほどで粘土により造られている。

SB02はSB01の西側にある。南北5m、東西4.2mの方形の住居址である。カマドを北壁中央部にもつかは他の施設は検出されず、南東隅の壁の一部は攪乱のため消えている。カマドは長さ120cm、巾80cmほどで壁外に張り出して造られている。

SB03はSB02の北側約6mの地点に検出された。南北5.8メートル、東西5.6メートルの方形のプランをもつ。カマドを東壁南寄りに設け、住居北側に2ヶ所の焼土面をもつほかは他の施設はみつからない。カマドは長さ110cm、巾140cmほどで一部壁外へ張り出して造られている。

SB04はSB03の北側約6mの地点にある。南北5.6m、東西5.7mのほぼ正方形のプランをもつ。主軸方向はやや東を向く。住居址西側コーナーに大きな偏平な石をもつか何ら施設はみられない。

SB05はSB04の北側13mほどにある。南北6.8m、東西6mの大型プランをもつが、形は南東隅が丸くなっている、扇状を呈する。住居址南側南、北の隅に偏平な石を置いており、東側壁近くに焼土面がみられる。

縄文時代の住居址は、敷石が残されていた2軒を検出することができたが、遺物の分布状態から他にも存在していた可能性もあり、大型の配石遺構の一部なども住居址と考えることもできるのかも知れない。

平安時代の住居址はカマドをもつもの3軒で、このうち2軒が北壁に、1軒が東壁にもつ。また、カマドを持たない2軒は大型のプランをもち、住居址のコーナーに偏平の石を置くのが特徴的である。

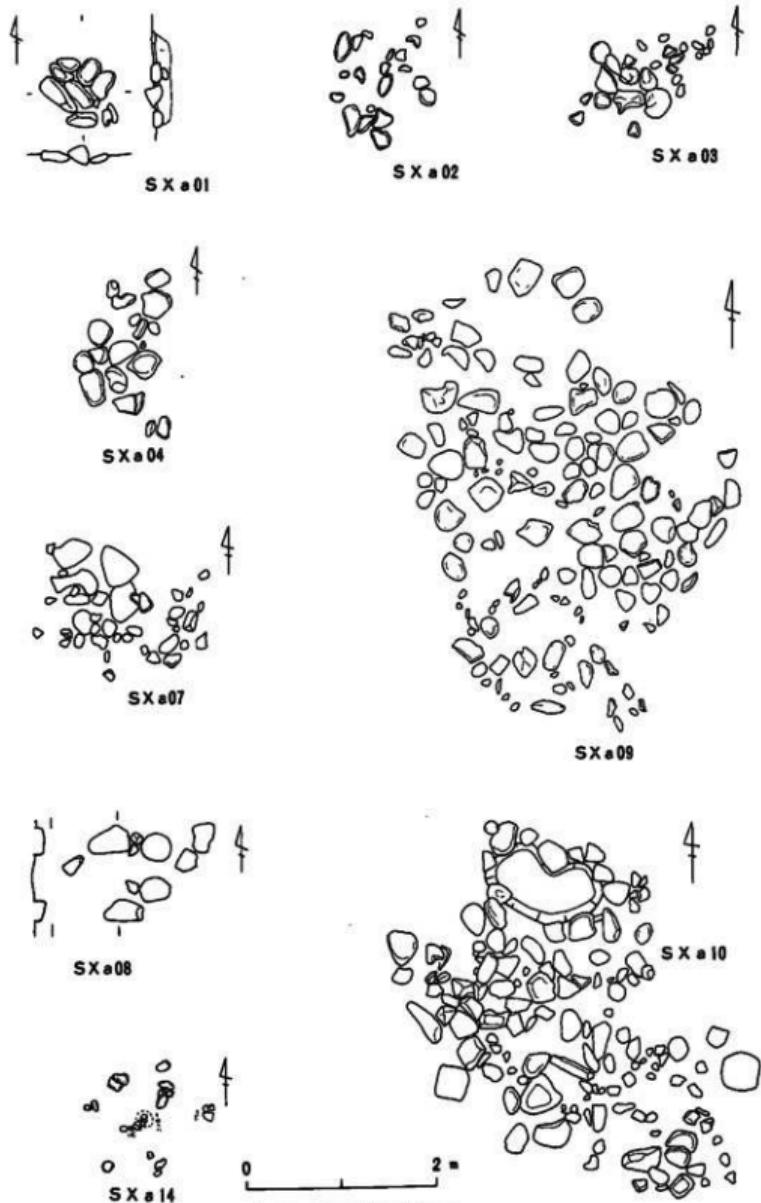
2. 配石遺構 SXa (第6・7図)

人為的に石を並べた遺構を配石遺構とした。

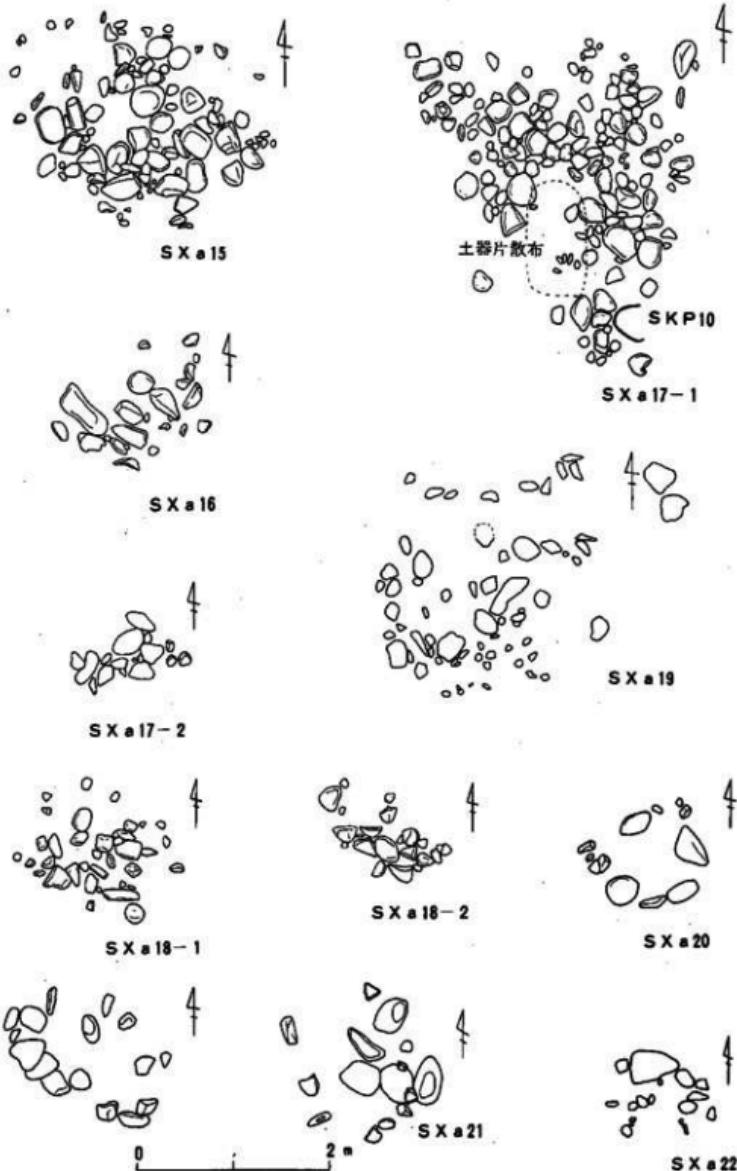
遺構全体が礫群よりもなりたっており、自然礫群を除くすべてが人為的に動かされ、並べられたものではあるが、ここでは、近世に造られた暗渠・畦畔・水路の石を除いたもので、明らかにひとつの遺構を形づくっているものに限って遺構番号を付した。

配石遺構は調査区の南東地区に小型のものが多く、西側および北側に大型のものが集まっている。

小型の配石遺構はいずれも大きさが1m~1.4mの範囲のもので、河原石を一層、ところによ



第6図 配石遺構実測図①



第7図 配石遺構実測図 ②

っては二層を並べている (SXa01. 02. 03. 04. 07. 08. 14. 16. 17-2. 18-1. 18-2. 19. 20. 21. 23)。 SXa01は配石の下に土壌が掘られており、その上に石を置いたもので、配石遺構とするよりも土壌に含めたほうが良いのかもしれない。 SXa08. 19. 20. 23は配石の中央部には石が置かれておらず、閉むように配置されているが、その中央部には何の施設もみられず、また遺物の出土もない。

SXa 14は、中央部に黒曜石の石核を数点置き、その周囲に大きさ20cmほどの石を並べてあり、石器製作に関連する遺構かと思われる。

大型の配石遺構は4基検出された。(SXa 09. 10. 15. 17-1)

SXa 09は調査区西側に位置する。南北4.4m、東西3mほどの台形を呈する。いずれもひとかかえほどの大きな河原石を並べ、下層にも配石がみられる。礫中に土器片が多く含まれている。

SXa 10はSXa 09の北側に位置し、南北3.4m、東西3.6mの不整台形をなす。北側隅には配石土壌SXaSK07が造られており、配石と土壌でこの遺構となりたっている。土壌は深さ40cmで東西130cm、南北54cmほどの隅丸の不整方形を呈する。

SXa 15は調査区北側隅にて検出された。径2mほどのほぼ円形の配石で、中央部に石の置かれていないところがあるが、他の施設は形づくっていない。配石中に土器を多く含んでいる。

SXa17-1はSXa15の南側約5mのところに位置する。北側に底辺をもつ、底部3m、高さ3.2mほどの二等辺三角形状をなし、その先端部にあたる南側に埋窓SKP 10を設けている。埋窓は径40cmほどの大型の甕を埋設し、その西側に石を配している。配石中央部には石の置かれていないところがあり、そこには多量の土器片が散布していた。

配石遺構で大型のものは出土遺物から縄文時代のものと判断できるが、小型のものは伴出遺物がなく時代の判定が困難ではあるが、おおむね縄文時代のものと考えてよさそうである。

3. 土 壤 SK (第8図)

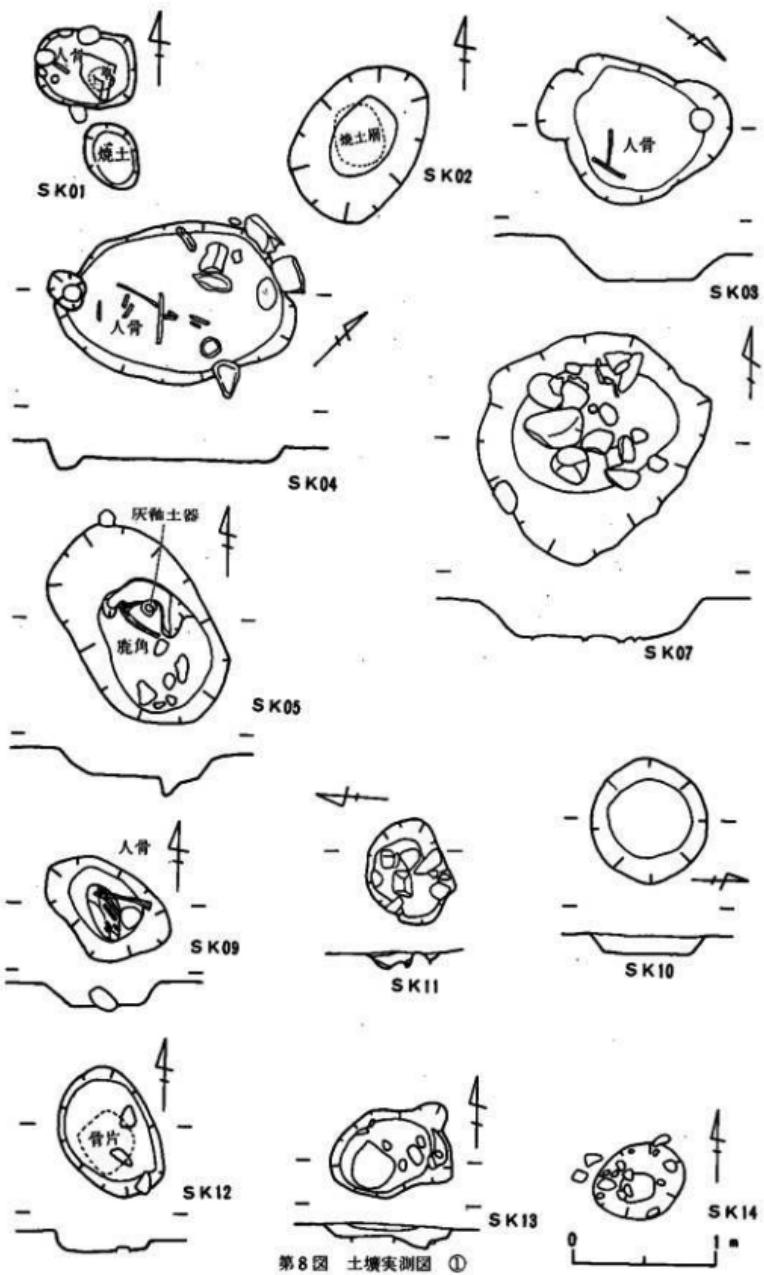
土中に掘りくぼめた円形ないしは方形の小さなものをすべて土壌に分類した。これらはそれぞれ「土壌墓」・「石器工房址」・「小鍛冶址」・「配石土壌」・「その他の土壌」に分けることができ、時代も縄文時代のものと平安時代のものとがある。これらは、遺構ごとのまとまりもみられ、調査区の南側に比較的多く集まっている。

1) 土壌墓 (第8図SK01. 03. 04. 09. 12)

土壌中より人骨が発見され、明らかに墓と考えられるものが5基検出された。

SK01は敷石住居址S B 06の西北2mほどに位置する。70cm×50cmの隅丸方形のプランをもち、深さ40cmほどである。遺構中から人骨が検出され、頭骨上には偏平な削石が乗せられていた。また、本遺構の南側に径30cmほどの焼土面があり何らかの関連性をもつと思われる。

SK03は、SK01の北側7mほどで検出された。径130cm×100cmの不整円形の土壌で、深さ40cmほどの底部に人骨が残っている。頭骨は土壌北隅に置かれている。



SK 04 は敷石住居 S B 06 の東北 10 m ほどにあり、170 cm × 110 cm の楕円形を呈し、深さ 10 cm と浅い。西隅に径 25 cm ほどのピットがある。この土壤で検出された人骨は、土壤東隅に頭骨があり、西側に骨がつづいていることから、横臥位で埋葬されたものと思われる。

SK 09 は調査区中央部に検出された。100 cm × 60 cm の不整円形を呈し、底部中央に 40 cm ほどの細長い石を置き、その上に人骨を埋葬している。土壤の東隅に頭骨を置き、その脇に他の骨を並べている。この土壤は人骨の埋葬状態から再葬墓と考えられるものである。

SK 12 は SK 09 の北側 3 m ほどにあり、径 90 cm × 60 cm の楕円形を呈する。底部近くに骨片がちらばっている。

2) 石器工房址（第 8 図 SK 13・14）

黒曜石片を多量に含む遺構である。竪穴住居址 S B 03 の西側に SK 13・14 ともに並んで検出された。この遺構周辺一帯には黒曜石片と獸骨の破片が多量に散布している。

SK 13 は径 90 cm × 60 cm の東側が方形で、西側が円形のプランを呈する。深さ 15 cm ほどで、層位は 2 層に分かれる。上層は黒曜石片を多量に含む層で、下層は全く遺物を含まない黒色土である。

SK 14 は径 64 cm × 53 cm の楕円形を呈し、極めて浅い遺構である。覆土中に多量の黒曜石片を含んでいる。

3) 小鐵冶遺構（第 8 図 SK 02・第 9 図 SK 06, 08）

いずれも比較的浅い遺構で中から鉄滓および羽口が検出されている。

SK 02 は竪穴住居址 S B 04 の西側に検出された、径 110 cm × 80 cm の焼土のつまつた遺構で、中央部に鉄滓がかたまっている。

SK 06 は径 1 m ほどの不整形を呈し、羽口および鉄滓、土器が検出された。

4) 配石土壤 SXaSK(第 9 図 SXaSK02, 03, 08, 09, 10, 11 第 10 図 SXaSK12)

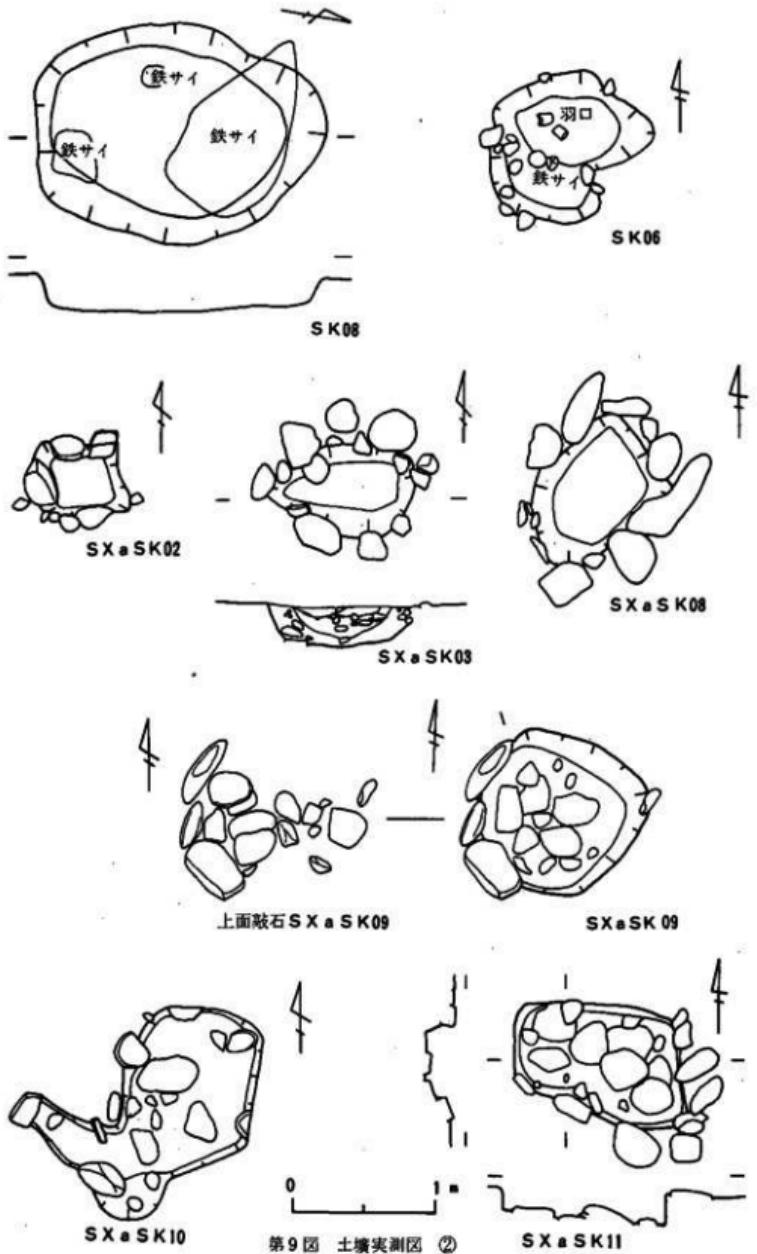
配石土壤は、土壤の周囲に石を配置しているものである。土壤の壁に石を立てたものと周囲上面に平らに並べたものとがある。

SXaSK 02 は 70 cm × 50 cm の方形で、北・西・南壁に立石を置いている。土壤内には黒色土がつまつておらず遺物の出土はない。

SXaSK 03 は調査区南西の隅に検出されたもので、土壤上面の周囲に石を並べている。100



埋甌をともなう配石遺構



cm × 65 cm の西側の尖った細長い五角形状を呈する。覆土中に土器が含まれている。

SXaSK 08 は敷石住居址 S B 06 の北側 6 m ほどに位置する。100 cm × 70 cm の方形を呈するが、南側は丸く外側に広がっている。これは、南側にだけ石がないことから、後に石を抜かれた跡とも考えられるが明確にはその痕跡は知り得なかった。遺物の出土はない。

SXaSK 09 は S B 06 の西側 4 m ほどに位置する。土壤上面に石を並べている。土壤は、一辺 110 cm の隅丸のはば正方形を呈し、西側壁面と南側壁面の一部に石を立てている。底面にも石を並べている。遺物は土器片が若干出土したにすぎない。

SXaSK 10 は S B 06 の西北隅と切り合っており、S B 06 を若干切り込んで作られている。120 cm × 90 cm の方形を呈するが、西南隅が外側へ細長くのびている。底面には石が敷かれており、鹿角の破片と土製品が出土している。

SXaSK 12 は調査区のはば中央で検出された。埋甕 SKP 04 によって東側を切られている。短辺が約 70 cm の長方形を呈していたと思われる。北壁と南壁に各 1 ケの河原石を立てかけている。覆土中より人骨が検出されたことから土壤墓であったことがわかる。

検出された配石土壤は人骨を伴なう SXaSK 12 を除き、その性格は不明であるが、土壤墓の可能性もある。

5) その他の土壤 (第8図 SK 05・07・10・11)

このなかには、径 60 cm ほどの円形のプランをもち、底部に甕を敷いてあるもの (SK 07)、焼土がつまっているもの (SK 11)、覆土に多量の獸骨の破片を含んでいるもの (SK 10)、椭円形の大きな土壤から鹿角と灰釉陶器皿が検出されたもの (SK 05) がある。

4. 埋甕 SKP

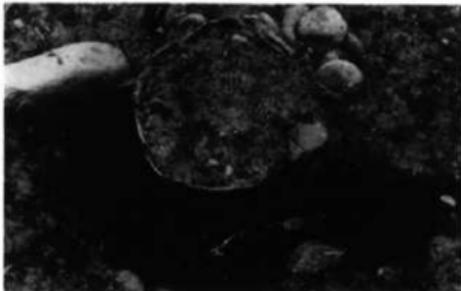
土中に埋設された深鉢型土器を埋甕として分類した。

調査区域内から 13 基 (第10図 SKP 01~07 第11図 SKP 08~10・12・15・16) 検出されたが、遺跡中央付近に 5 基 (SKP 03~07) が円形に集まっているほかは、全体にちらばっている。このうち、他の遺構に伴なうものは、配石遺構 SXa 17-1 の南に設けられている SKP 10 がある。SKP 04 は土壤 SXaSK 12 の東側を切って造られている。

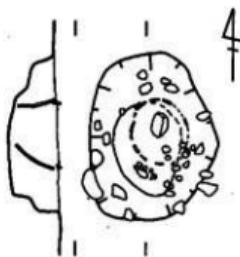
縄文中期の土器をもつ SK 08 を除くほかは、すべて縄文後・晚期の大型の深鉢型土器の埋甕である。

埋甕の底部をもつものは SKP 09 ・ 10 ・ 16 の 3 基だけで、ほかは底部を欠く。

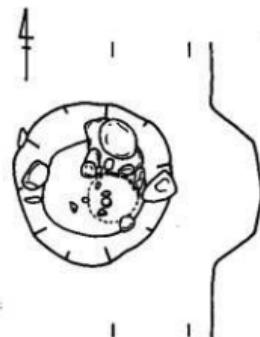
SKP 07 は大型の埋甕の内側にさらに小型の土器を重ねており、二重の



埋甕と土壤墓の人骨



SKP01



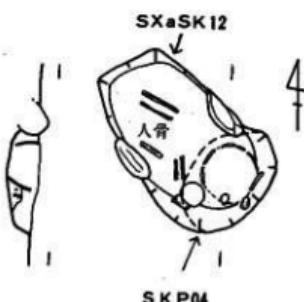
SKP03



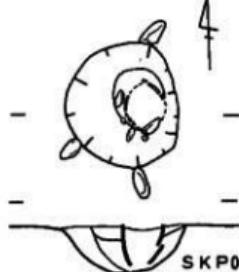
SKP02



SKP05

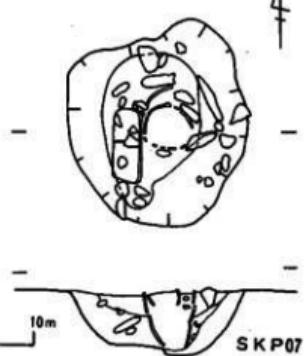


SXaSK12

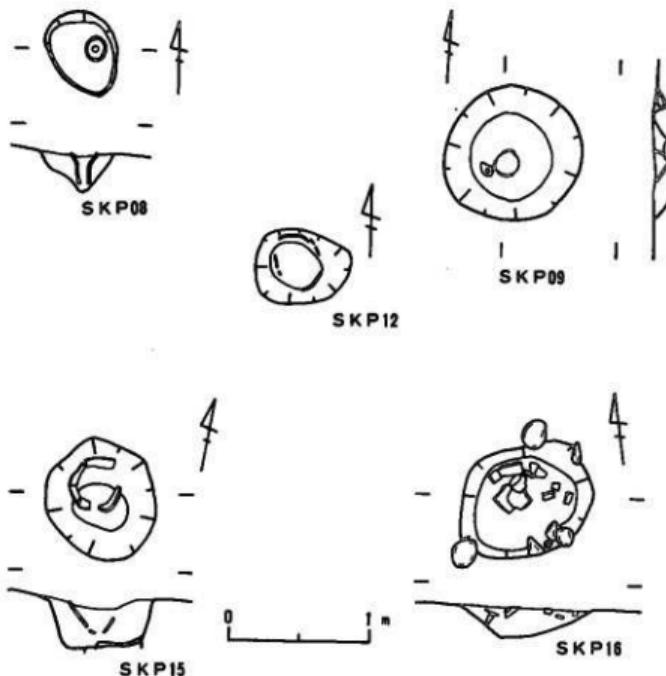


SKP06

第10図 埋藏実測図 ①



SKP07



第11図 埋葬実測図 ②

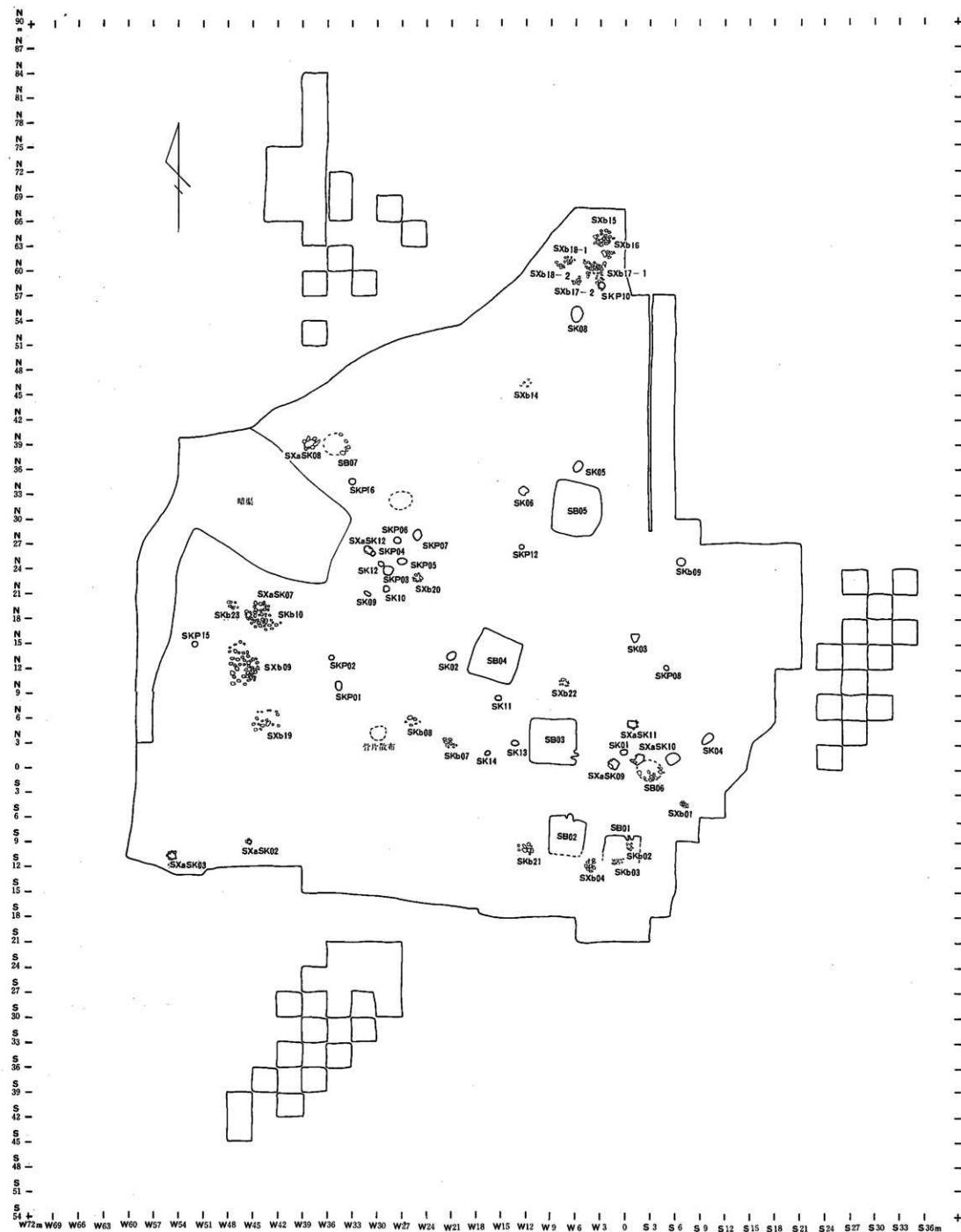
埋葬である。

埋葬はいずれも大きな堀り方をもち、埋葬の周囲に砂礫を詰めて固定しているが、SKP 05のように堀り方の部分に人骨がみられる例もある。SKP 16は土壤中に深鉢型土器の底部を上にした状態で検出されており、他のものとは性格の異なるものようであるが、埋葬の可能性が強い造構である。

埋葬の多くから人骨片や歯が検出されていることから、これらの埋葬は窓棺墓の性格をもっているものと思われる。

窓棺について

窓棺に使用されたものとしては、図示した4点が復原できた。(第66頁参照)



別図 深町遺跡・遺構全体図（400分の1）

第2節 出土した遺物

I. 縄文時代の遺物

1. 縄文式土器 (第12図～第48図)

縄文式土器は、中期・後期・晩期のものが出土し、主体は後晩期にある。中期土器の出土量は比較的少ない。分類にあたってはまず時期的に区分し、更に文様構成、器形等に着目をして行なっていきたい。また後晩期特有の無文粗製土器については整理が進んでおらず、今回とり上げたものは、専ら文様構成等によって時期の知れる土器であることを予め断っておきたい。分類方法としては、I～VII群に大きく分け、I群中期土器、II群後期前葉の土器、III群後期中葉の土器、IV群主として後期後葉の土器、V群晩期前葉の土器、VI群晩期中葉の土器、VII群、土器底部、ミニチュア土器、及び注口土器とし、更に細分を行なっていきたい。

I群 中期に含まれる土器

(第12図1～13、第13図1～5)

中期土器は後晩期土器に比して量的には少ない。時期的には大方中期後葉期のものが出土している。大きく分けて曾利様式のものと加曾利E様式のものとがみられる。また1図1～5は器壁もかなり薄く、また胎土も良くすでに後期的要素もわずかながら認められる。また1点窓櫛格として使用されたものもある。

II群 後期前葉に含まれる土器

1類 後期の最も古い段階に位置すると思われるもの (第13図6～19、第14図1～12)

本類には縄文の施されるもの(第13図6～16、第14図2～12)と施されないもの(第13図17～19、第14図1)がある。縄文の施されるものについては、縄文を区画する沈線の多くが曲線的に施される。縄文の施されないものはそれ程多くはない。第13図17、18には列点がみられる、器形はほとんどが深鉢と思われるが、第13図15は浅鉢と考えられる。

2類 握之内式期に含まれるもの (第14図13～30、第15・16・17図、第18図1～12)

a種 磨消縄文を特徴とするもの(第14図13～30、第15図1～3) b種 沈線を特徴とするもの(第15図4～12) c種 口縁部に沈線施文されるもの(第15図13～22、第16図1～6) d種 紐縄文の施されるもの(第16図7～19、第18図1～6) e種 条縄紋の施されるもの(第18図7～12)とがある。

a種は縄文を区画する沈線が直線的に施される点に特徴がみられる。器形は多くが深鉢と思われ、若干浅鉢もある。2図26は注口土器とも思われる。b種は量的には多くない。沈線は曲線的なもの、直線的なもの、蛇行しながら垂下するもの、菱形状区画されるものなどがある。器

形は深鉢と思われる。c種は弧線、曲線、渦巻、刺突等が複合されてひとつの文様構成をとる。また施文部は口縁の外面、内面、内外面とがあり、特に内面のみに施される場合、外面はかなりていねいに削られている。また第15図13~22は関東的と言うよりはむしろ西日本的な要素が認められる。d種は口縁部施文と併用されるものや縄文の施されるものがある。また「8」字状の貼付文もみられるが、この貼付文自体多種にわたっており、単純な貼付文、3段の刺突を加えた貼付文、円形の貼付文等がみられる。器形はその多くが深鉢と思われるが、第17図6~8は胴部が球形に近い膨らみをもっており、壺ないし注口土器とも考えられる。e種は条線の施文手法によって2種類に分かれる。幅の狭い工具によって曲線的に施されるものと、器面全体に施され、1部交錯する部分がみられるものとがある。共に深鉢を呈するであろう。

3類 三十稻場式土器（第18図13~21）

全て深鉢と思われる。基本的には円形刺突であるが、18は「ハ」字形に施される。また16は刺突された部分の粘土が隆起して残されている。また21は沈線による区画がなされており、むしろ関東的なものとも考えられる。胎土は全て砂粒が多く含まれており不良である。

III群 後期中葉に含まれる土器

1類 加曾利B I式に含まれるもの（第19・20・21図、第22図1~3）本類は施文手法により種分けし、さらに注口土器も1種として区分した。

a種 縄文帯の施文されるもの。このうち単純に縄文帯のみのもの（第19図1~21）と縄文帯にアクセントの加わるもの（第20図1~12、14~16）とがある。b種 口縁部に刺突の配されるもの（第20図13、17~22、第21図1） c種 沈線文の施されるもの（第21図2~16） d種 注口土器（第21図17~26、第22図1~3）a種について、器形は多くは深鉢と思われるが、19~21は浅鉢を呈するであろう。また口唇部に刻目あるいは刺突の施されるものや、内面にも数条の沈線をもつものが多くみられる。黒褐色を呈する胎土の非常に良好な精製土器が多くみられる。アクセントをもつものについては、多くが深鉢、9が壺、10~12が浅鉢と思われる。器形、胎土、色調、内面沈線や口唇部刻目の有無等は前述のものと何ら変わらぬ所は多い。b種について、器形はおそらく全て深鉢と思われる。器形には規格性がみられ、いずれも口縁部がほぼ直立し、胴部が内傾している。また17、19で見られるが如く、胴部の文様は「8」字状の沈線文と直線的な沈線によって区画された磨消縄文が本種の特徴と考えられる。c種について、縄文帯の施される土器との類似点は多いが、それらと比べると胎土が若干粗い点が指摘できる。また縄文帯を有する土器同様、沈線間にアクセントをもつものもあるが、その出土量は少ない。器形は、14、16が壺、15が浅鉢、その他深鉢と思われる。d種について、胎土には微砂粒が若干含まれている程度のものが多いが、中には多く含まれているものもある。比較的大きな破片の26は蓋を支える部分と、吊手の付け根部分が残されている。

2類 加曾利B II式に含まれるもの (第22図4~13、第23・24図、第25図1~10)

以下の様に細分した。a種 曲線的な繩文帯の施されるもの (第22図4~14、第34図4) b種 所謂「大森式」土器 (第22図15~20、第23図1~3、第34図3,5,6) c種 斜線文の施されるもの (第23図4~22、第24図、第25図1~2、第34図7,8) d種 槌目文、格子目文土器 (第25図3~10) a種について、本種は2つに分かれる。第22図4~9と第34図4と10~14である。前者は弧線あるいは「8」字状沈線を中心左右に曲線的繩文帯が施されるもので、4~7、第34図4が鉢、8、9が深鉢と思われる。後者は曲線的に沈線が施されており、全て鉢と思われる。b種について、器形は深鉢と鉢に分かれる。胎土には砂粒が多く含まれるもののがほとんどである。c種について、斜線文を文様構成の主体とする土器をまとめたが、型式的には加曾利B II式及び加曾利B III式も含んでいる。器形は深鉢、鉢、浅鉢に文かれ、以下斜線文の施文方法、あるいは器形によって細分を行なった。

C₁ 波状口縁を呈する鉢形土器 (第23図4~7) ゆるやかな波状口縁を呈し、口縁直下に羽状斜線文をもつ。

C₂ 胴部に沈線をもち、その下位に斜線文の施される鉢形土器 (第23図8~13)

C₃ 胴部に膨らみをもつ深鉢形土器 (第23図14~17) 器形はおそらく、口縁部から頸部まで内傾し、胴部にかなりの膨らみをもつ變に近い形態と思われる。

C₄ 2条の沈線間に斜線の施される浅鉢形土器 (第23図18、19)

C₅ 平縁口縁を呈する鉢形土器 (第23図20~22、第24図1~6、第35図7) ほとんどが口縁部に1条の沈線が巡り、その下位に斜線文が施される文様構成をとる。

C₆ 刺突の併用された鉢形土器 (第24図7~11、14、15) 刺突は口縁部に施されたものと胴部に施されたものとがある。文様構成は口縁部に無文帯をもち、胴部に斜線文をもつと思われる。しかし14、15は若干様相を異なる。

C₇ 波状口縁を呈する深鉢形土器 (第24図14~20、第25図1~22、第34図2) 形態的には2つに分かれる。口縁に沿って1条の沈線が巡り、その下位に羽状斜線文の施されるもの (第24図16、17、20、第25図1、2、第34図2) と山形口縁を呈し、口縁に羽状斜線文のみが施されるもの (第24図18、19) とがある。後者の19は羽状斜線文が施されないが、口縁部の作り、胎土等は全く同一であり本種に加えた。

C₈ 平縁口縁を呈する深鉢形土器 (第24図12、13、第35図9) 3点とも文様構成上の類似点は認められない。

次にd種について、全て深鉢と思われる。いずれも胎土、成形の良好なものである。

3類 加曾利B III式に含まれるもの (第25図11~17)

本類は2種に分かれる。a種 口縁部が隆起した鉢形土器 (11~14) いずれも口縁部が隆起し、そこに凹線あるいは押圧が加えられ、繩文も残されている。b種 曲線的繩文帯の施されるも

の（15～17）15は壺、他は深鉢と思われる。

IV群 主として後期後葉に含まれる土器

（第25図18～21、第26・27・28・29・30・31・32図、第33図1～19、第35図9～12）

1類 曾谷式期に含まれるもの（第25図18～21、第26図1～7）

18、19が壺、他が深鉢と思われる。18、19は頸部、4は胴部に瘤が配される。本類はいずれも曲線的沈線が施され、曲線内に縄文が残されている。

2類 安行式に含まれるもの（第26図8～18）

器形は18が注口土器、他が深鉢と思われる。深鉢はほとんどが波状を呈し、14のみ平線を呈している。瘤は縦長のもの、刻目を有するもの、「アタ鼻状」のものとがある。また8は縄文の代わりに刺突が施されている。

3類 刻目文土器（第26図19～27）

ほとんどが、平線の深鉢であると思われる。施文手法は沈線間に刻目を整然と施すものが基本的であると考えられる。20、22は同様の瘤が貼付けられ、22は1つ欠損しているが、20同様2個1対の単位を示すと思われる。21、25は刻目を有する瘤である。23は口縁部に山形突起が付されている。

4類 磨消縄文と羽状斜線文の施されるもの（第27図1～24、第35図8、10～12）

器形は口縁部がほぼ直立し、胴部が「く」字形に屈曲する鉢と考えられる。本類は口縁部の磨消縄文、胴部の羽状斜線文及び「く」字形に屈曲する器形により、1つのまとまりある土器群として理解できる。しかし、全てがこの3要素を満たしているとは言えない。例えば第35図8は縄文が施されず、刺突が施され、12は沈線のみである。また10は沈線によって口縁部と頸部との連結を縦に残している。本類は黒褐色ないし淡赤色を呈し、胎土は比較的良好なものが多い。

5類 口縁部に沈線の施されるもの（第28図1～20）

器形は多くが深鉢と思われるが、12、15の如くに鉢形を呈するものも含まれている。沈線は基本的に、4類の第27図5や第35図12とは異なり、幅の狭い沈線が3条ないし4条施されている。また17～20には刺突が加えられている。

6類 瘤付土器（第28図21～36、第29図1～5）

器形は深鉢、浅鉢、壺、注口土器とがある。瘤の形態によって差異が認められる。

a種 ボタン状の瘤が施されるもの（第28図21、22、24、32）

比較的大きめな瘤で、中心が押圧されている。

b種 中心に刺突ある瘤が施されるもの (第28図 23、28、29、第29図 4、5)

瘤はa種と類似するがやや小さくなる。また中心に凹みを持つ点でも類似性がみられる。

c種 先端の尖った瘤の施されるもの (第28図 31、33~36)

34には赤色塗彩が施されている。いずれも数条の沈線が文様の基本と思われる。

d種 小さい瘤の施されるもの (第29図 1~3)

2、3ともに2個1対の瘤が施される。1は壺と思われ、縄文が主文様となる。

e種 縦長の瘤に刻目の施されるもの (第28図 25~27、30)

25は平縁の深鉢、26は鉢、27は壺と思われる。文様は沈線を主体としており、30は縄文と縦位の短かい沈線とが横位の沈線によって区画される。

7類 凸帯文土器 (第29図 6~28、第30 31~32図、第33図 1~19)

凸帯文は基本的には粗製に近い土器に用いられるものである。そのために特徴が乏しく型式的に把握することが難かしい。また使用時期の正確な把握も難かしいと思われる。一応時期的には晩期初頭に含まれるものまでまとめておきたい。細分は主として、凸帯文と他の文様による文様構成の違いによって行なった。また本類の器形のほとんどが深鉢であり、これも大きな特徴ではないかと考えられる。

a種 直線的な凸帯文が施されるもの (第29図 6~8)

本類の中で最も多く、また基本的形態と思われるものである。器形は口縁部からゆるやかに内湾しながら底部に至る深鉢と考えられる。凸帯文上の施文は6、7等の指頭圧痕によって押し潰した様なもののがほとんどで、12、13等の様に刻目的に施されるものもある。22~24は初めに凸帯上を指頭圧によって押し潰し、その上に棒状工具によって刺突の施されたものである。26~28は幅広の凸帯が口縁部に沿って施される。

b種 特異な凸帯文の施されるもの (第30図 1~8)

これらの例はa種の中には積極的に含められないものであり、特別にまとめた。本種は8を除き、全て胎土の非常に良好なもので、a種とは明らかに性格を異にしている。

c種 曲線的な凸帯文が施されるもの (第30図 9~22)

本種は凸帯がa種に比して、より装飾的に用いられていると考えられる。器形は平縁及び波状口縁を呈する深鉢と考えられる。色調、胎土はa種と変るところはない。凸帯の施文手法は口縁部形態に大きく作用され、平縁の場合は、同じ間隔を保って胴部から口縁部に曲線的に施され、波状の場合は、波頂部に凸帯の起点を見ることができる。

d種 瘤及び突起と併用されるもの (第31図 1~13)

色調、胎土はやはりa種とかわらない。1~5の様に口縁部を山形に隆起させ、そこに意図的にくぼみの施されるものと、6~13の様にボタン状の瘤が併用されたものとがある。また、3、

5は両者の要素をもつ。

e種 痘および沈線と併用されるもの (第31図14~25、第32図1~19、第34図13,14)

基本的文様構成は、刺突ある凸帯上に2~3条の沈線をもち、凸帯と口縁部を連結する瘤が配される。瘤はd種のボタン状の瘤と異なり、やや縱長となり瘤の上には沈線あるいはくぼみが施されている。口縁部は平縁を呈するものが多い。器形は「く」の字形に屈曲する鉢とゆるやかに内弯する深鉢があると思われる。また胸部はほとんどが無文であるが、19図14, 23~25の様に斜線文の施されているものもある。

f種 刺突の施されない凸帯をもつもの (第33図1~19)

本種は厳密に言えば、凸帯の付されないものも含んでいる。胎土はやはり、砂粒を多く含み器面のざらついたものである。以下の様に細分した。

f₁: 波状口縁を呈し、口縁に沿って沈線の施されているもの (1~5)

f₂: 波状口縁を底し、口縁の最も低い所に縱長の瘤をもつもの (6, 7)

f₃: 平縁口縁を呈し、口縁部が肥厚するもの (8~10)

いずれも肥厚した口縁には沈線が施され、また最も肥厚する部分の口唇部には三角形状の工具による刺突がみられる。

f₄: 波状口縁を呈し、肥厚する口縁に沈線あるいは凹みの施されるもの (11~14)

f₅: 波状口縁を呈し、肥厚する口縁に、間隔を保って縱位の瘤が付されるもの (15~19)。19の胸部には2条1单位の沈線が施されている。また15は深鉢を呈するものと思われる。

V群 晩期前葉に含まれる土器

1類 三叉文の施されるもの

三叉文自体は非連鎖状三叉文と連鎖状三叉文あるいは三叉状入組文と呼ばれるものに大別される。

a種 非連鎖状三叉文の施されるもの (第36図1~13)

器形は深鉢、鉢ないし浅鉢、壺がみられる。深鉢はその多くが、波状ないし山形口縁を呈している。施文手法は1、2の様に刺突を中心として左右に三叉文が配され、9はボタン状突起を中心として施される。2や13の様な典型的な三叉文は少なく、ほとんどが三叉文の1端が沈線化している。また1は非常に器壁も薄く、内外面ともに赤色塗彩がなされており注意される。

b種 連鎖状三叉文の施されるもの (第36図14~26)

器形はやはり深鉢、鉢ないし浅鉢、壺がみられる。14, 15は沈線がやや入組んだ状態で施されている。16もいわば連続した形で三叉状の陰刻がなされる。17~22も沈線が入組んだ状態で施され、19は沈線の1端に三叉文が残され、20~22は沈線間に縦文が施される。23~26は沈線が文様主体となる。

2類 羊齒状文の施されるもの (第37図1~17)

羊齒状文は、東北的手法を多く残したものと便化が著しく刻目あるいは刺突によってそれを表すものがある。器形は多くが鉢形を呈するものと思われる。1は特に羊齒状文の顕著な例であり、5は非常に大型のそれが施される。7、8は体部の縄文部分に結節を残す。16、17は彫刻的に羊齒状文が付されている。また便化した例としては、8のように陰刻によって羊齒状文を残存させるものと、13のように刺突自体によって羊齒状文を表現するものとの両者の違いが認められる。

3類 口唇部に加飾の施されるもの (第37図16~26)

本類は佐野遺跡によって型式化された一群と同種あるいはそれに近いものである。基本的には無文の浅鉢にみられるものであろうが、24~26は若干形態が異なっている。文様は、陸線、沈線、三叉文状の陰刻、瘤状突起及び縄文のいずれかが併用されて構成されている。

VII群 晩期中葉に含まれる土器

1類 発達した雲形文あるいは2溝間の刻目をもつもの (第38図1~20、第39図1~10)

2溝間の刻目を有するもので顕著な例は38図8~10の3点だけである。いずれも鉢形を呈するであろう。この種の刻目は羊齒状文の変化とみなされ、口縁部の無文帯、頸部の刻目、胴部の縄文が沈線によって区画されている点は全く同一の文様構成をとる。次にやはり羊齒状文の影響が残されるものとして1~7がある。ほとんどが鉢と思われる。口縁部には陰刻あるいは刺突によって羊齒状文が残されるが、胴部にはすでに発達した雲形文がみられる。この雲形文は東北の要素をよく残したものと言えよう。次に雲形文を文様主体とするものであるが、器形は第38図11が深鉢、第38図13、第39図1が壺、第39図5が皿、他は鉢ないし浅鉢であろう。文様は第38図1、2のように東北的な要素をよく残したものも認められるが、他の多くは稚拙な感じを受ける。また第38図6と第39図6は体部の沈線が梢円区画されており共通性がうかがわれる。

2類 刺突列点文をもつもの

刺突列点文は原則的には2溝間に施されるものである。また他の文様と併用されるものとそうでないものがある。

a種 刺突列点文のみ施されるもの (第39図11~17)

器形はおそらく全て鉢形を呈するものと思われる。14は若干沈線が認められるが、他は刺突列点文以外は施されていないであろう。ほとんどが円形刺突であるが、16、17は若干横長の刺突が施されり。15は中心が空洞となる円形刺突によって施されたと思われ、刺突のはば中心に若干粘土が盛り上がって残されている。

b種 縄文と併用されるもの (第39図18~30、第40図1~10, 15)

器形は多くが鉢と思われ、壺も認められる。文様構成は、第39図18の様に口縁部に縄文帯をもち、その下位に刺突をもつもの。第39図25の様に刺点の下位に縄文をもつもの。第40図4の様に2本の沈線が曲線化し、その間に刺点の施されるものなどがある。また第39図27、第40図10, 15

はいずれも壺であろうが、体部に雲形文的手法が認められるものもある。

c種 特異な沈線と併用されるもの（第40図11～14、16）

器形はいずれも鉢と思われる。11～13は体部に非常に特異な沈線が施される。いずれも小型のものである。14、16は施文部位は異なるが共に波形の沈線が施されている。本種はいずれも、胎土、成形とともに良好なものである。

3類 工字文をもつもの（第41図1～19）

器形はほとんどが壺形を呈するものと思われる。本類は東北的規格というよりも、粗大工字文と言われるものと同種の一類である。

文様構成は繩文あるいは刺突列点文と併用されるものが多くみられる。口縁部は外面に縄文をもち、内面に工字文的な太い沈線が施される。おそらくこの種の口縁部に、刺突列点文と併用された工字文をもつ胴部が結合されるのであろう。第41図10はその顕著な例がある。第41図9は口縁部に縄文は施されず、曲線的な沈線のみ施されている。F図17～G図4の様に工字文のみ施される例は量的にあまり多くはない。また第40図5は1点のみ認められたが、いわゆる「鍵の手文」と言われるものであろう。

4類 その他の土器（第41図6～10）

本類は断片的に出土したものであり、時期的にも不明確なものである。6は深鉢と思われ、上下の沈線を結ぶ形で弧線が施される。7は一見工字文的手法であるが、上下2本の沈線を結んで陰刻がなされるものであり、工字文とは全く逆の施分手法と考えられる。

8、9はやや似かよった施文手法である。9は注口土器である。主文様は胴部の曲線的沈線と考えられる。

10は口縁部に2個1対の瘤が付され、体部には磨消縄文が施されている。

本類については断片的資料であり、その系譜、時期については全く不明と言わざるを得ない。

VII群 土器底部、ミニチュア土器及び注口土器（第43図1～11、第44図、第45図1～13）

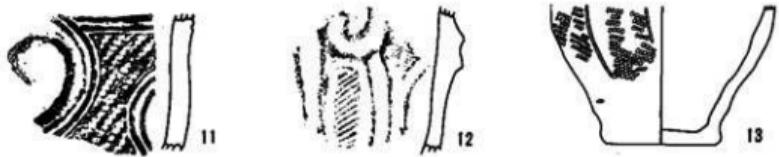
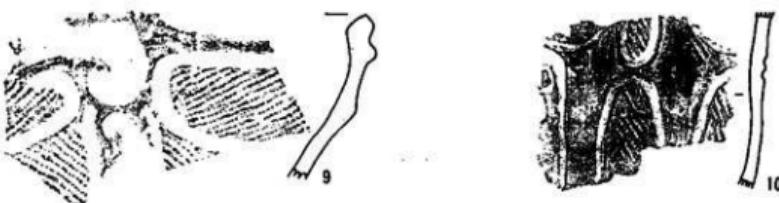
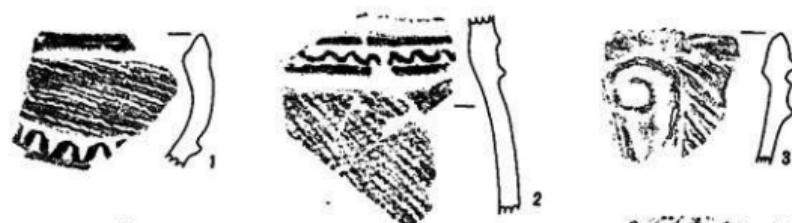
土器底部は当然のことながら、無文のものがほとんどであるが、網代底のあるもの、木葉痕のあるものなどもある。網代底については破片も含め個体数は500個体を越える。

1の様に経線をなす条に対し縦線をなす条が「1本越え2本潜り1本送り」の例が多く、9の様に「2本越え2本潜り1本送り」の例も認められる。また10は非常に成形の悪い浅鉢であるが、底部にはわずかながらも網代痕が残されている。次に第44図1、2、4は木葉痕が残されている。3はやや入組んだ状態の沈線が施されている。これは成形段階に意図的に施されたものと思われ、網代痕や木葉痕とは全く性格を異にしていると考えられる。

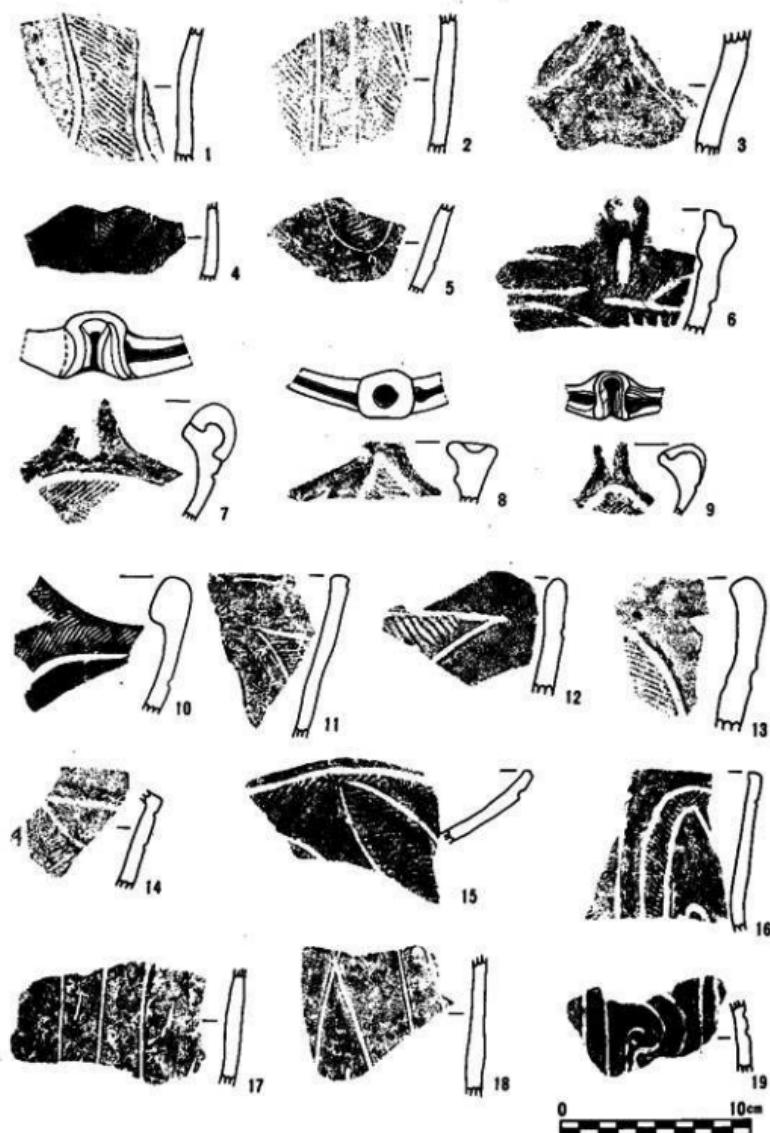
ミニチュア土器は、ほとんど無文のものであるが、第44図10～12は文様が施されている。3点ともに成形は非常に良好なものである。

無文のものは、尖底のもの、丸底のもの、平底のもの、台付のものとがみられる。25は土鈴と思われ、吊手部分には穿孔がなされている。

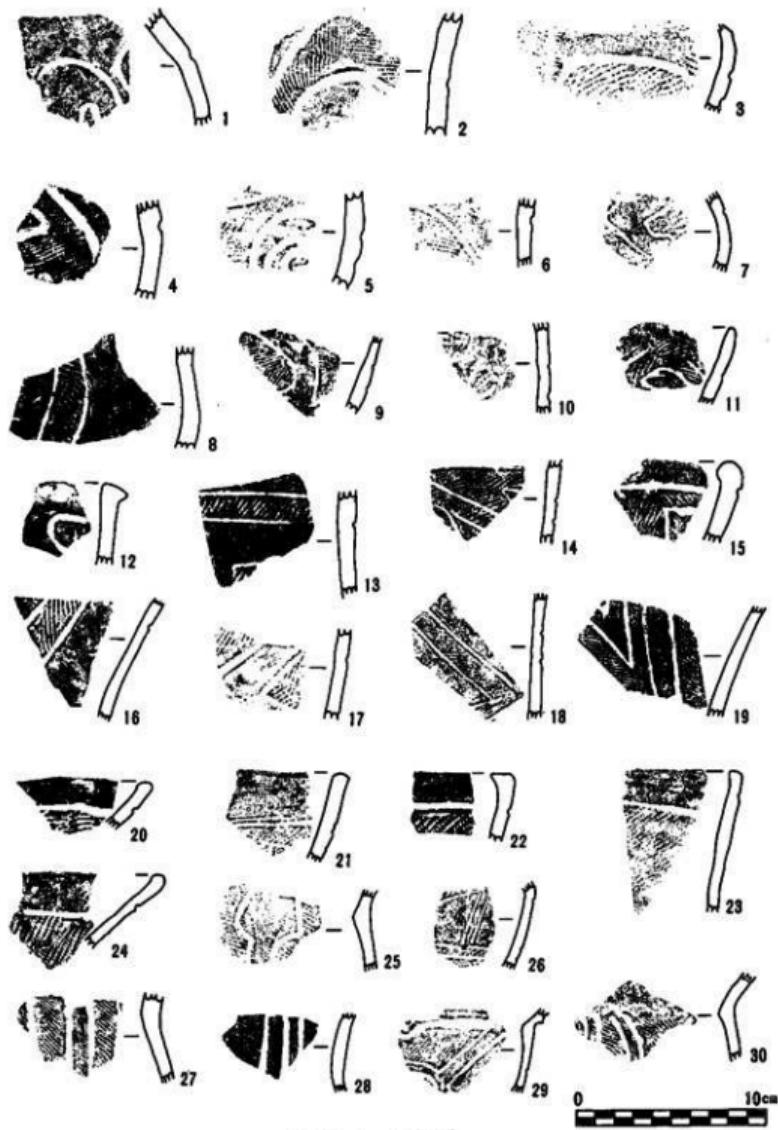
注口土器については、注口部はかなり多いが体部と結合した例は全くなかった。注口部はほとんどが無文であるが、第45図1~6のように瘤あるいは沈線の施された例もわずかに認められた。13は平縁を呈する注口土器の体部であり、注口部の剥落した部分が顯著にみられた。



第12圖 I 群土器



第13図 I・II群土器



第14図 I、II群土器



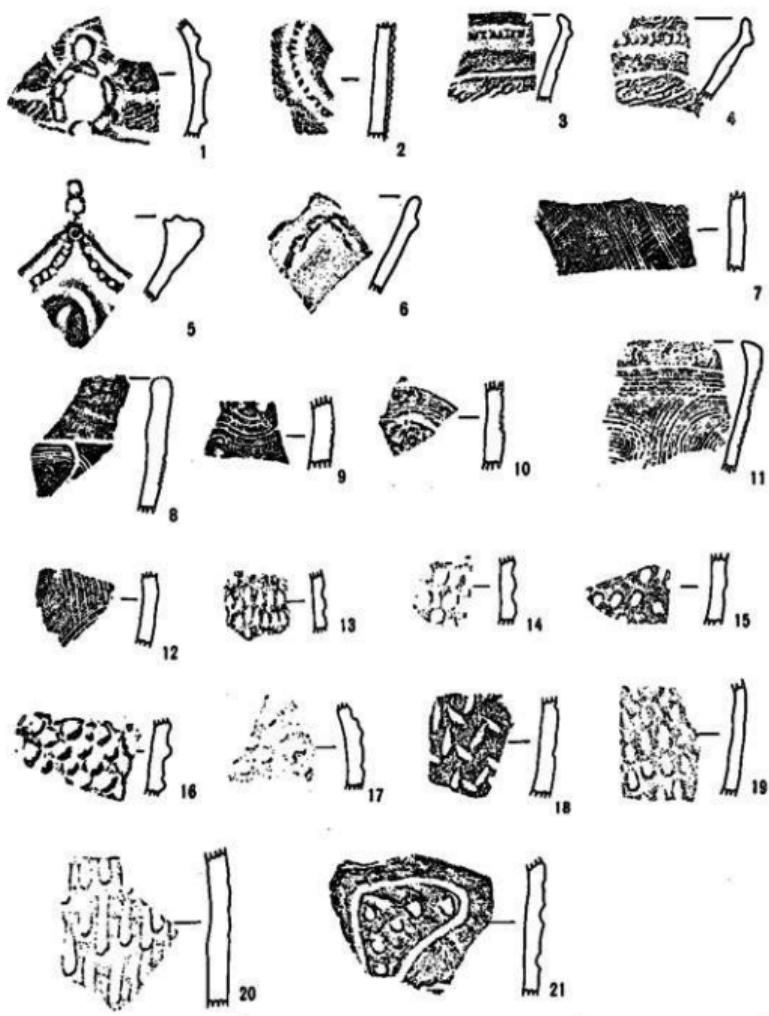
第15図 II 群 土 器



第16図 II群土器



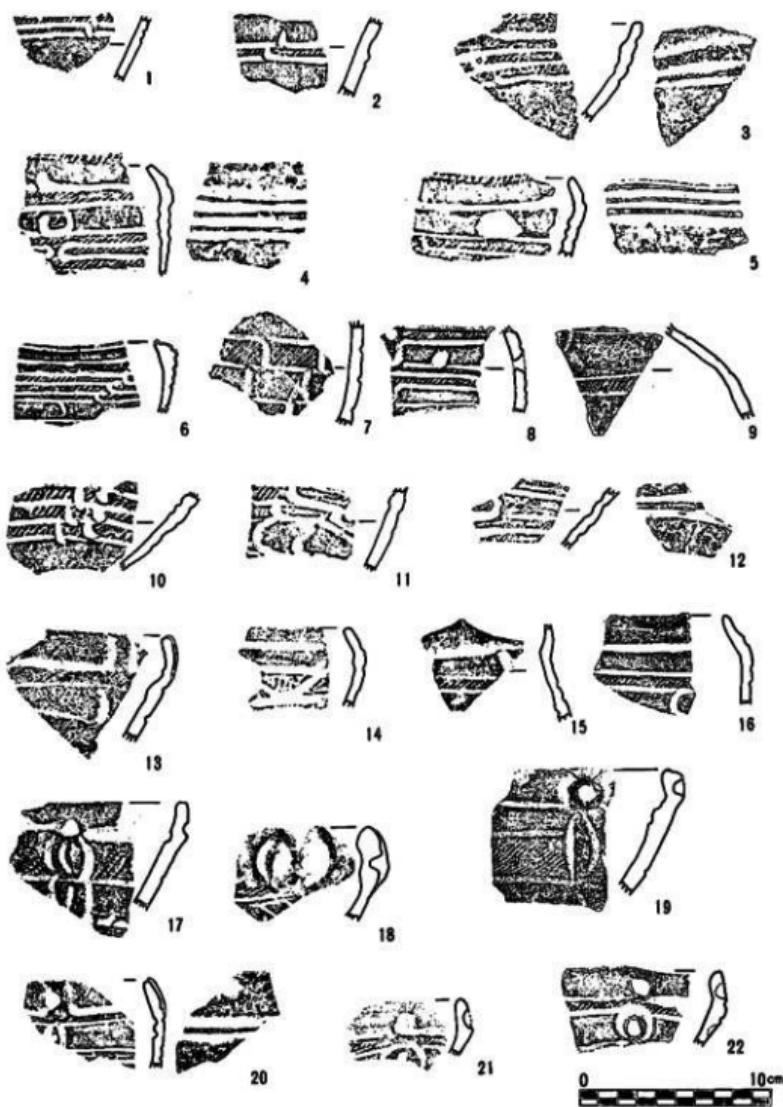
第17図 II群土器



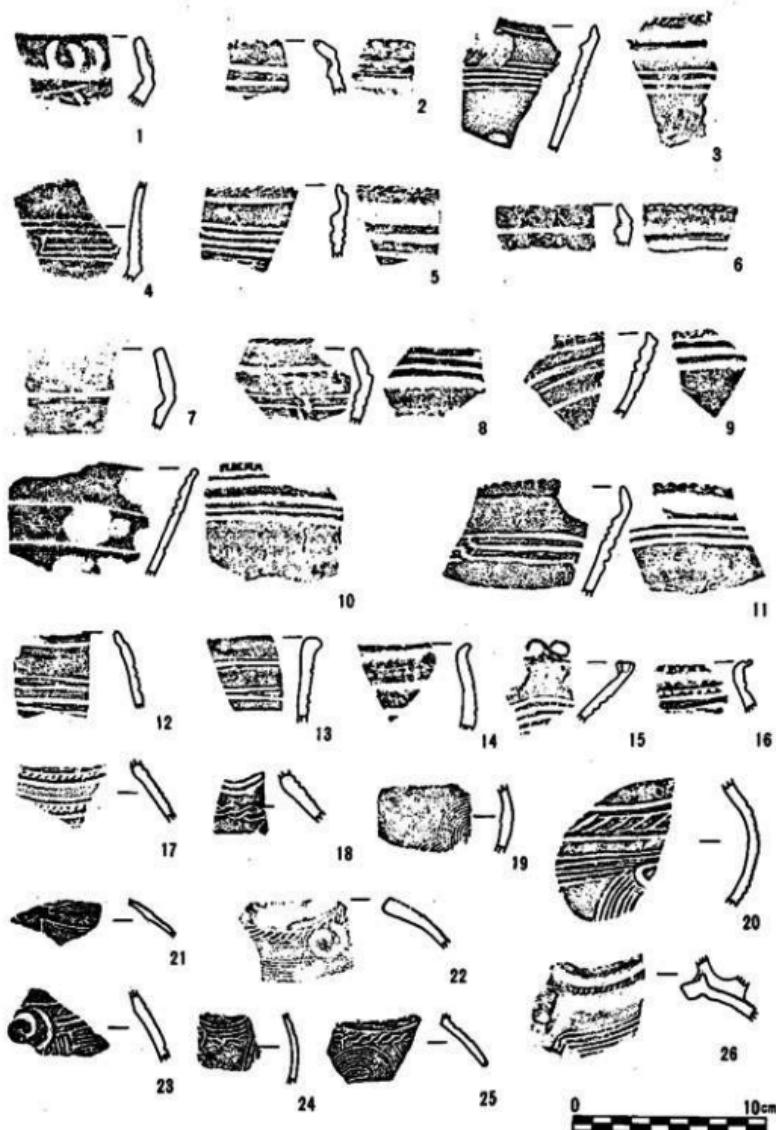
第18図 Ⅲ群 土器



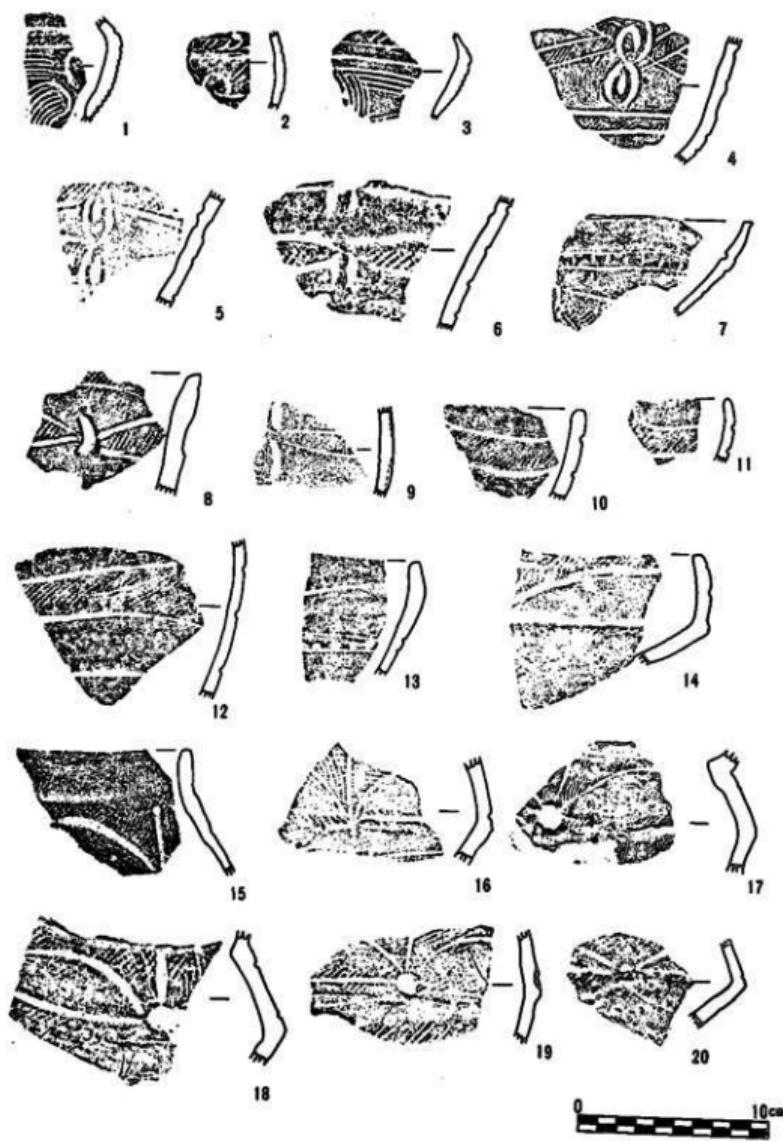
第19図 Ⅲ群土器



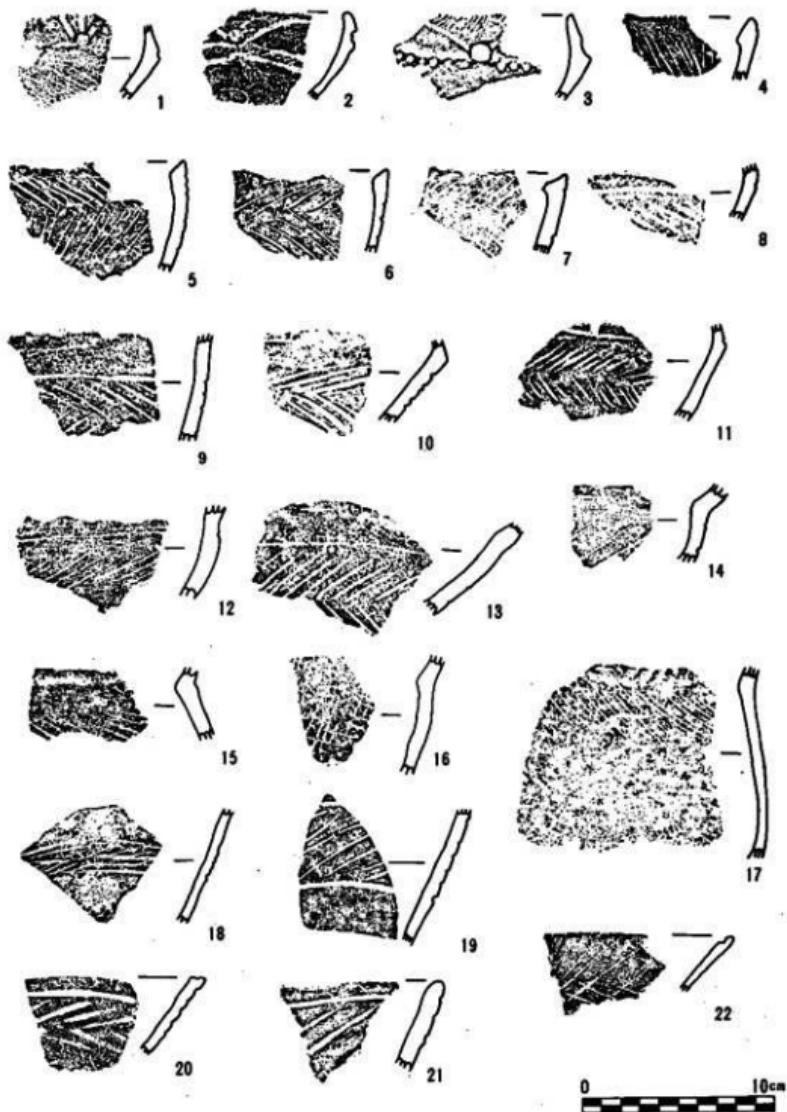
第20図 III 群 土 器



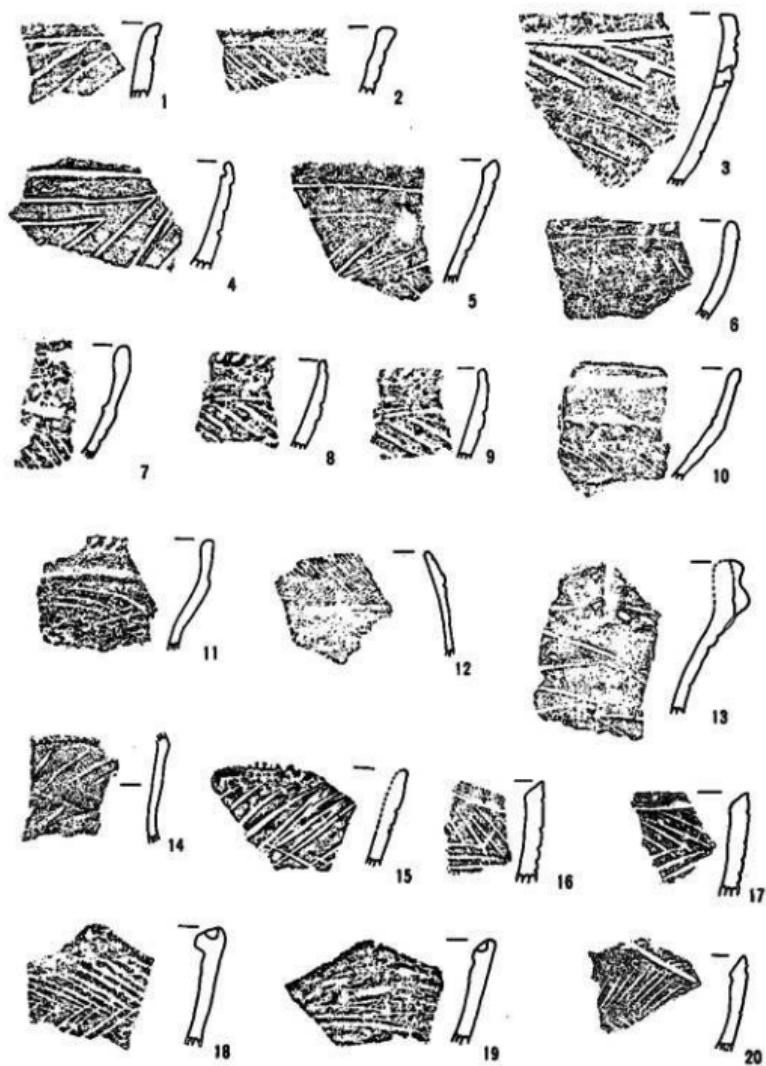
第21図 III 群 土 器



第22図 III 群 土 器

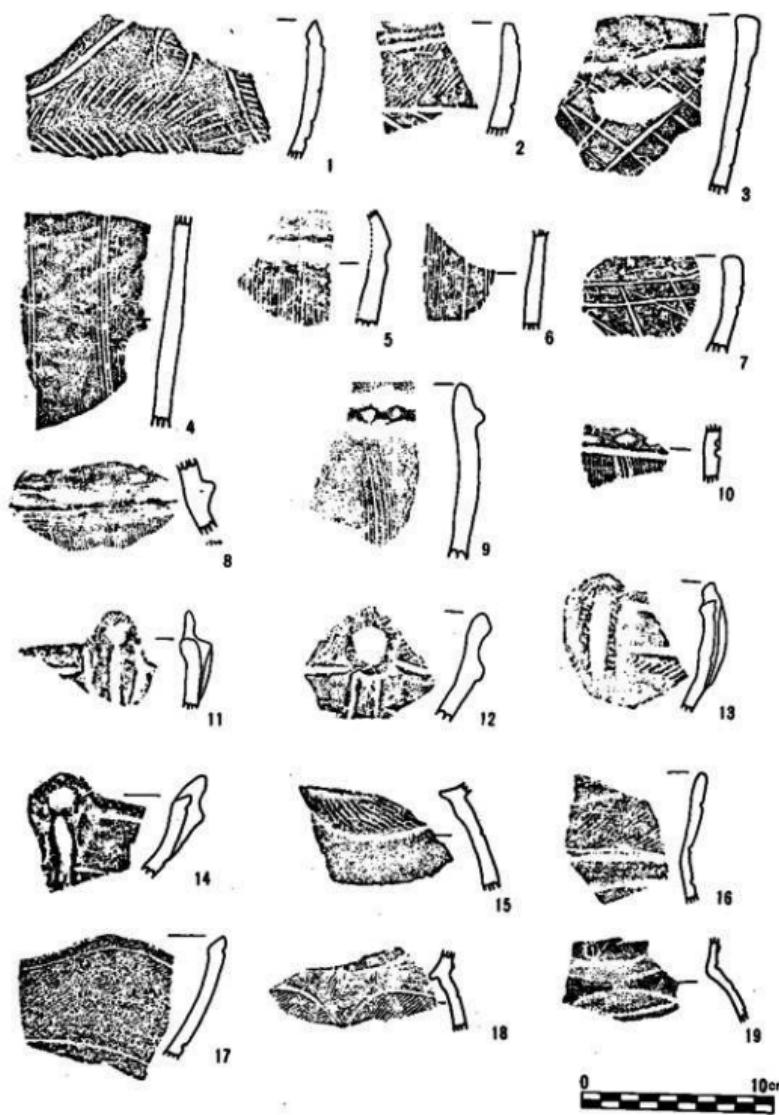


第23図 III 群 土 器



第24図 田群土器





第25図 III・IV群土器



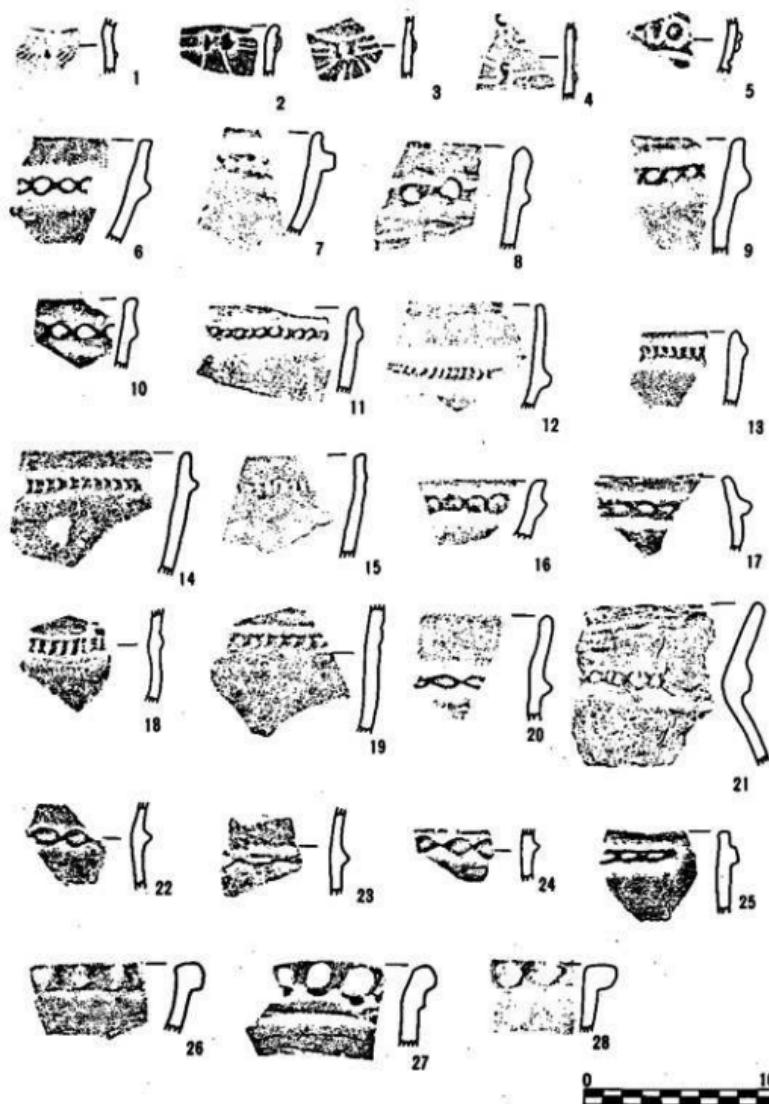
第26図 IV 群 土 器



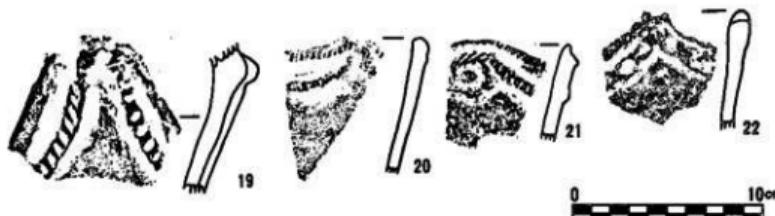
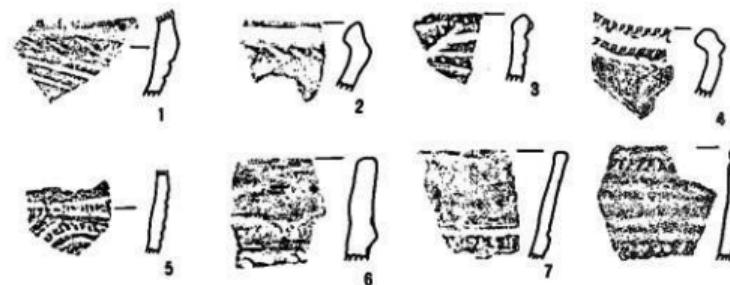
第27図 IV群土器



第28図 IV 群 土 器



第29図 IV 群 土 器

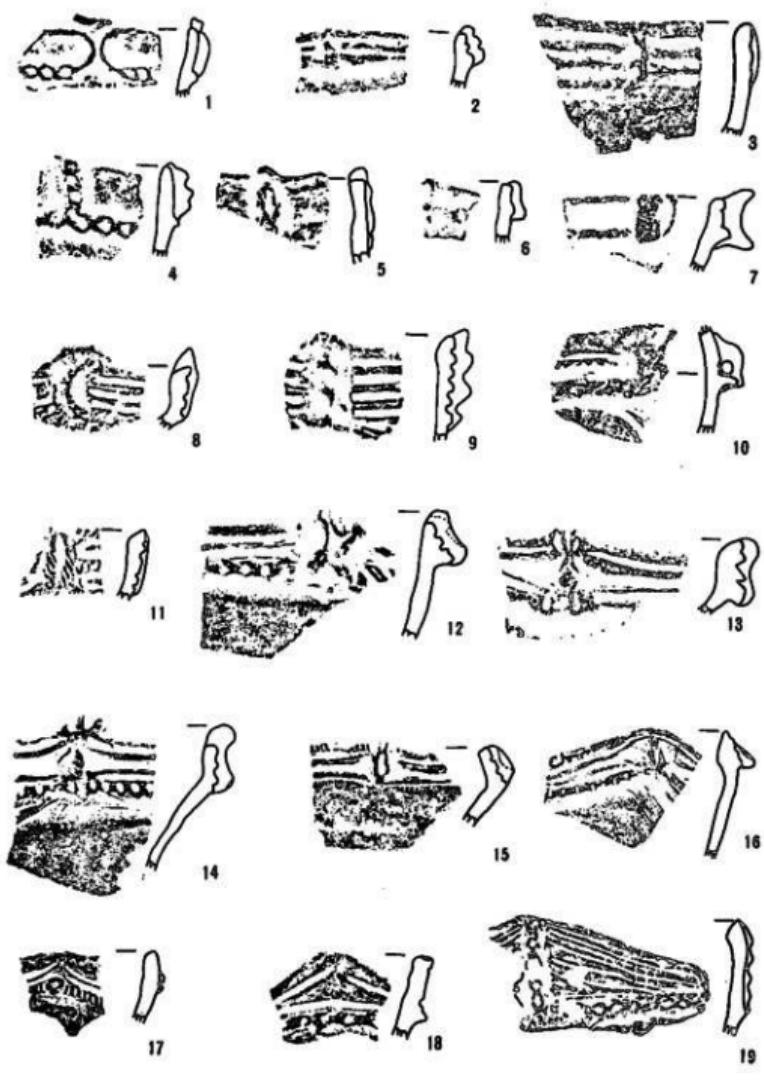


0 10cm

第30図 IV群土器

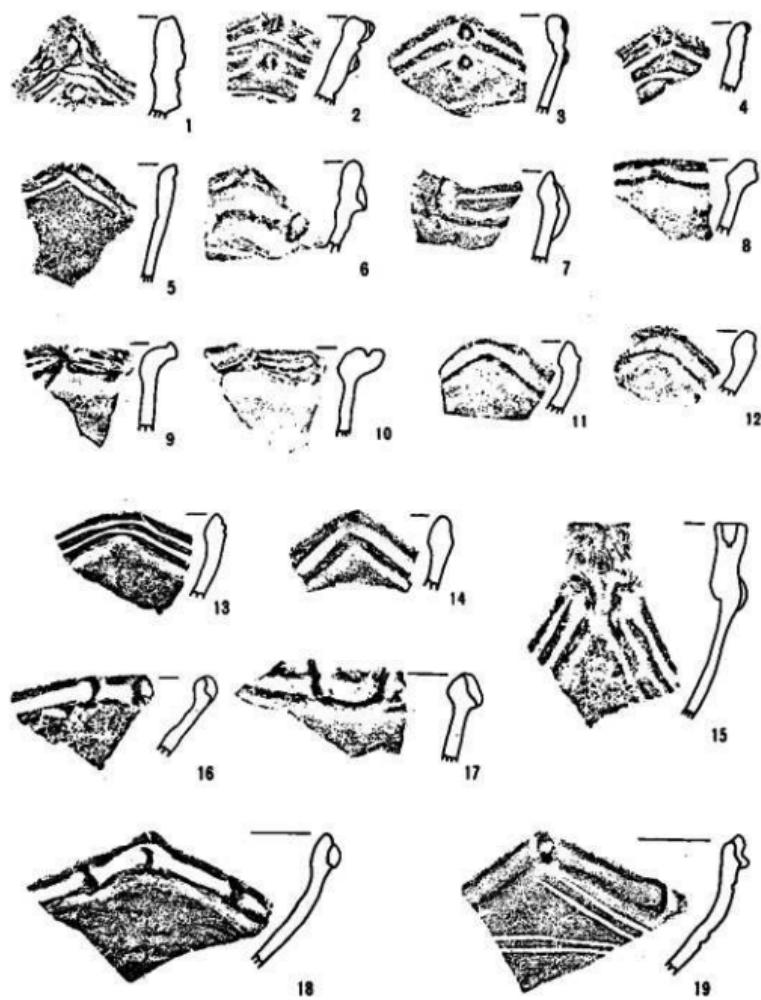


第31図 IV群土器



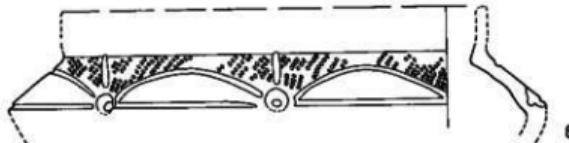
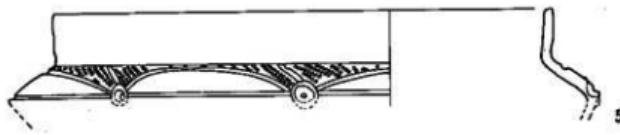
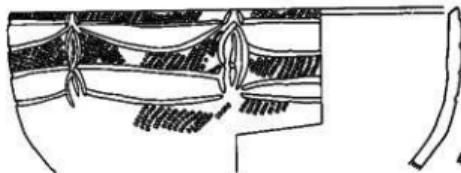
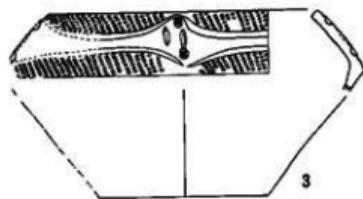
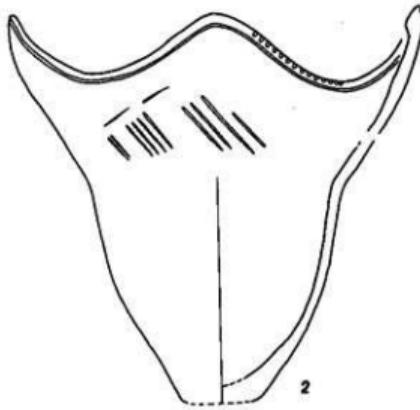
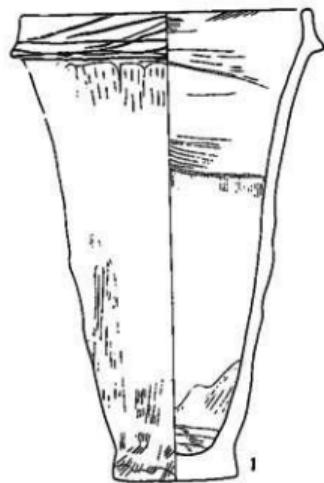
第32図 IV群土器

0 10cm



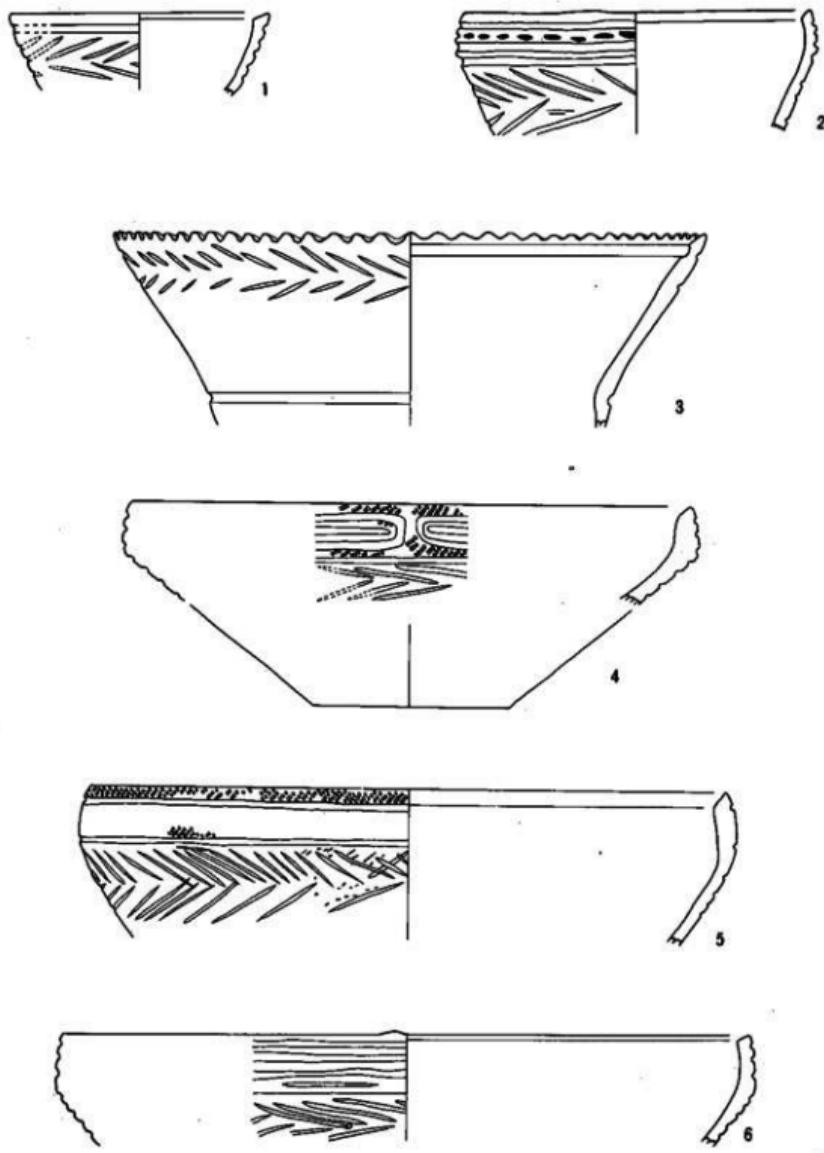
0 10cm

第33図 IV 群 土 器

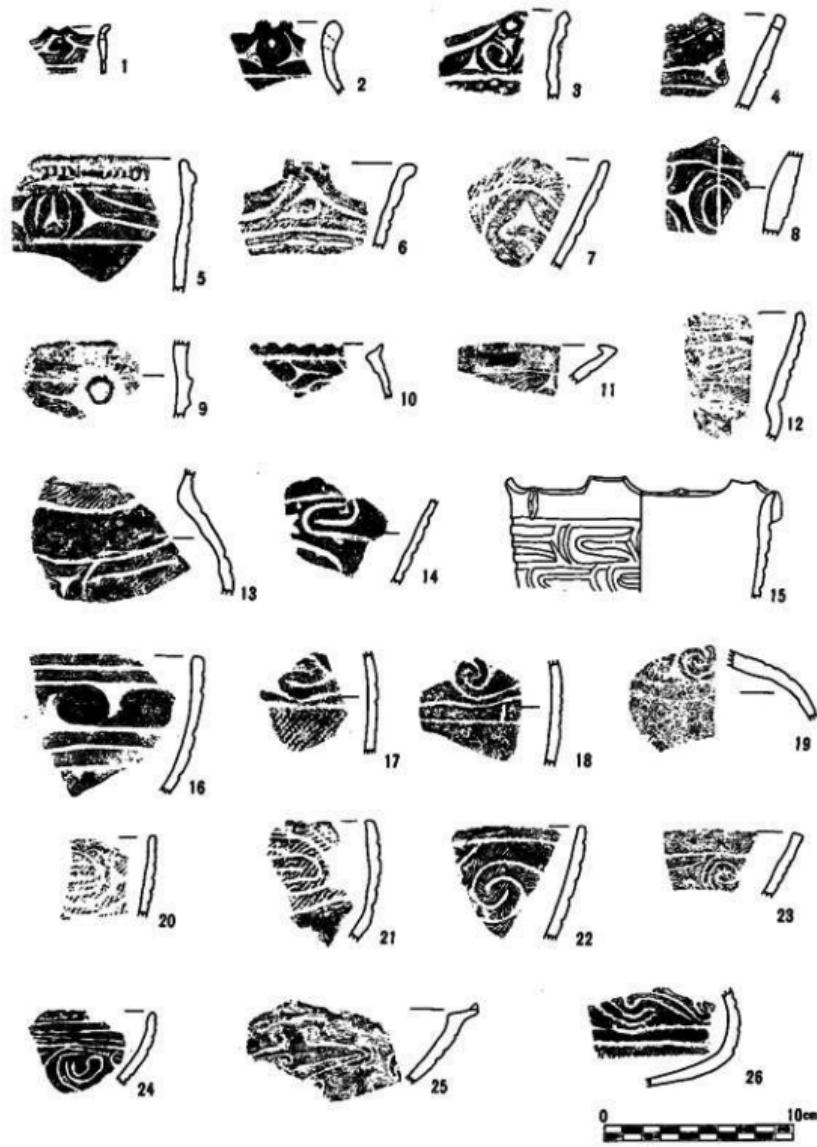


第34図 II・田群土器

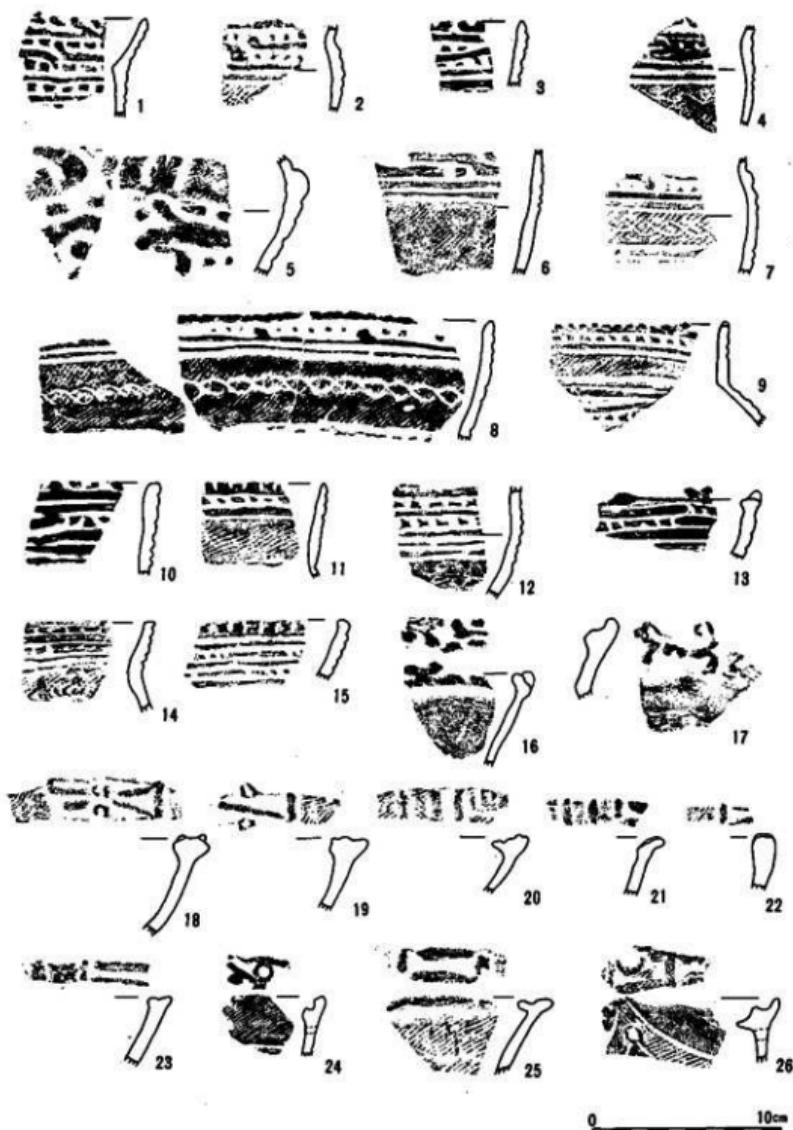
0 10cm



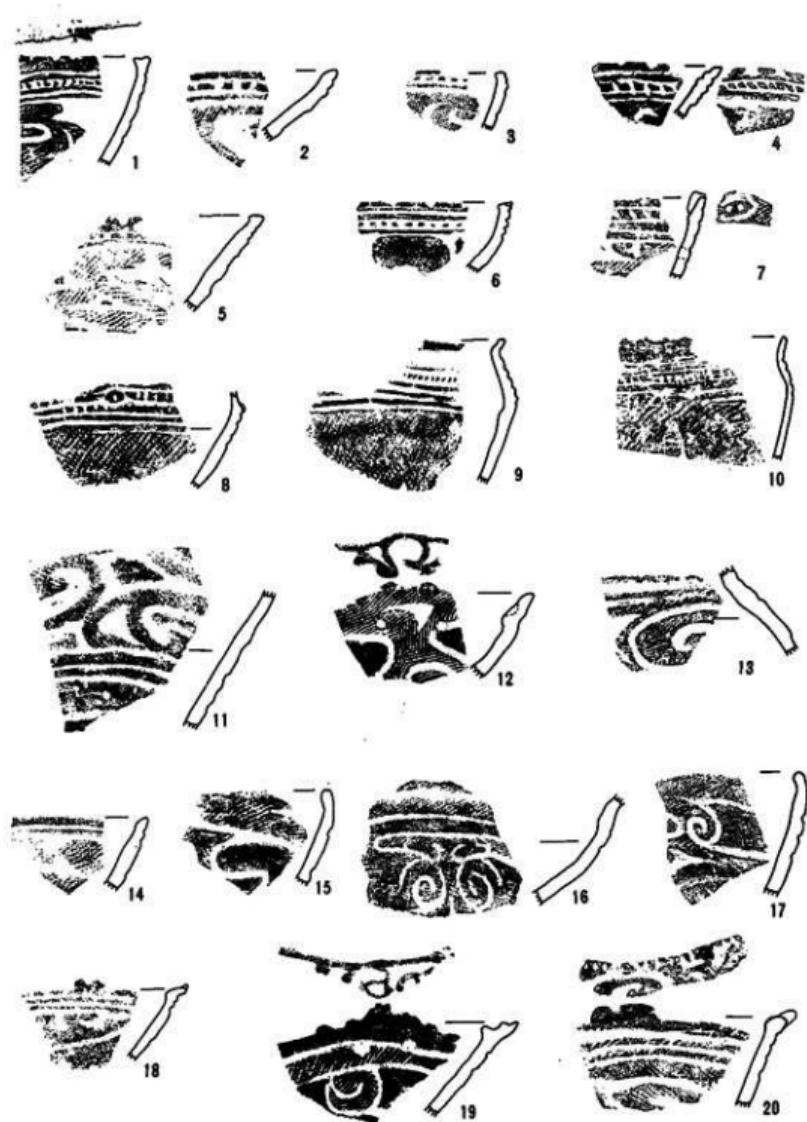
第35図 II・III・IV群土器



第36図 V群土器

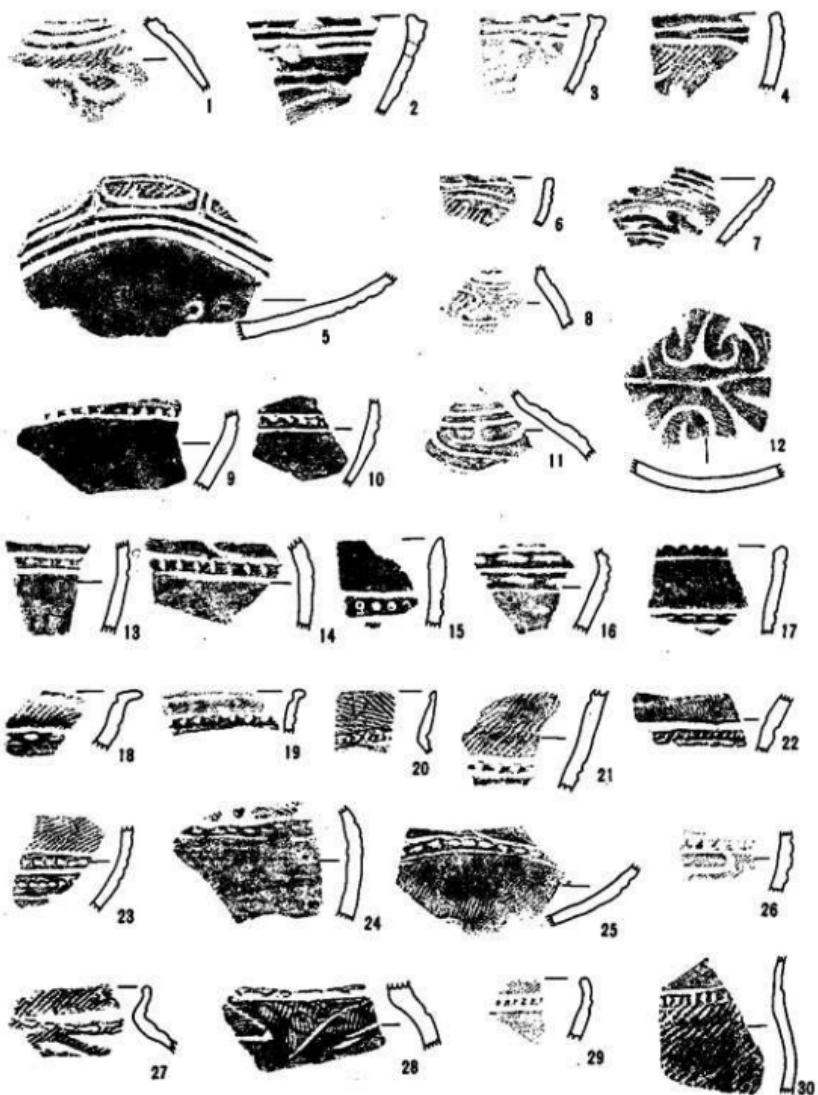


第37図 V群土器



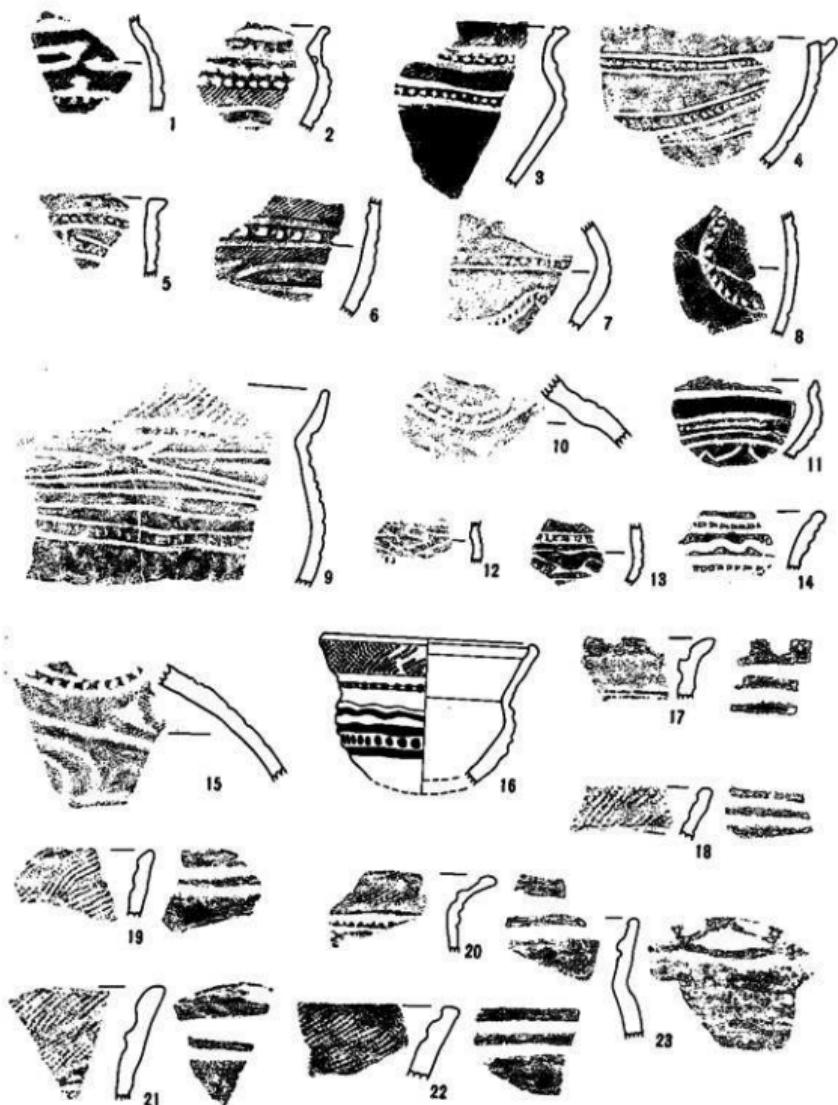
第38図 VI群土器

0 10cm



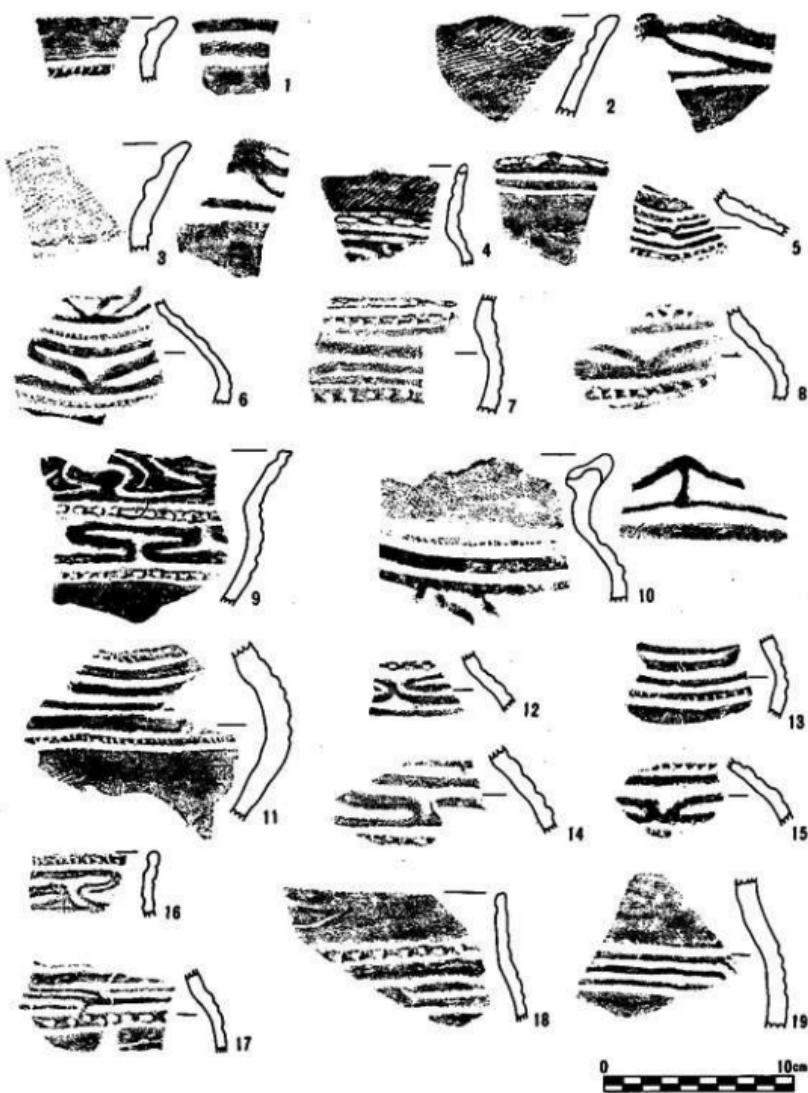
第39図 VI群土器

0 10cm

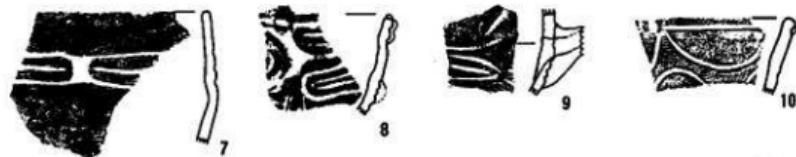


第40図 VI群土器

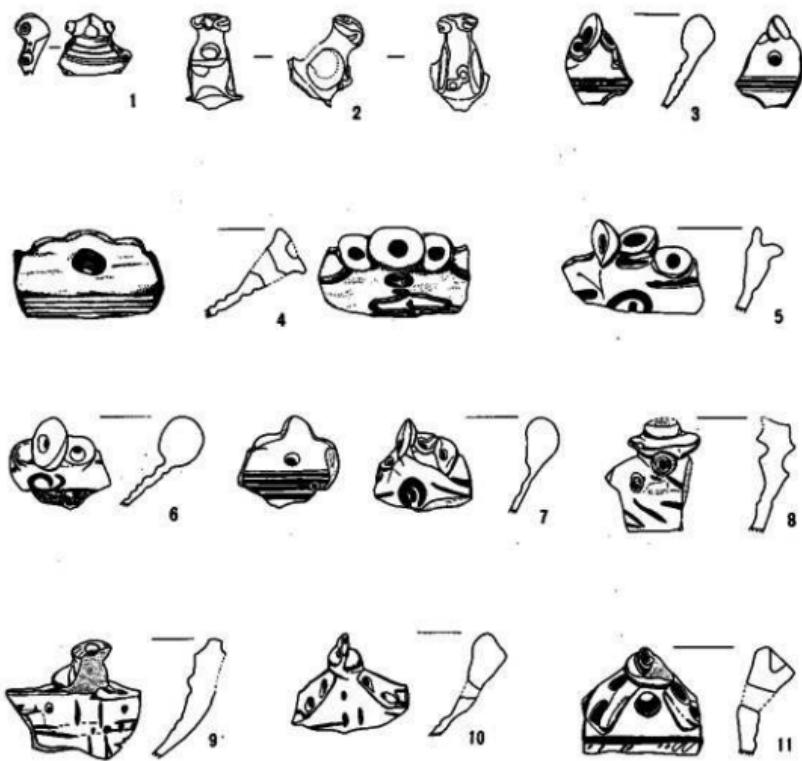
0 10cm
cm



第41図 VI群土器

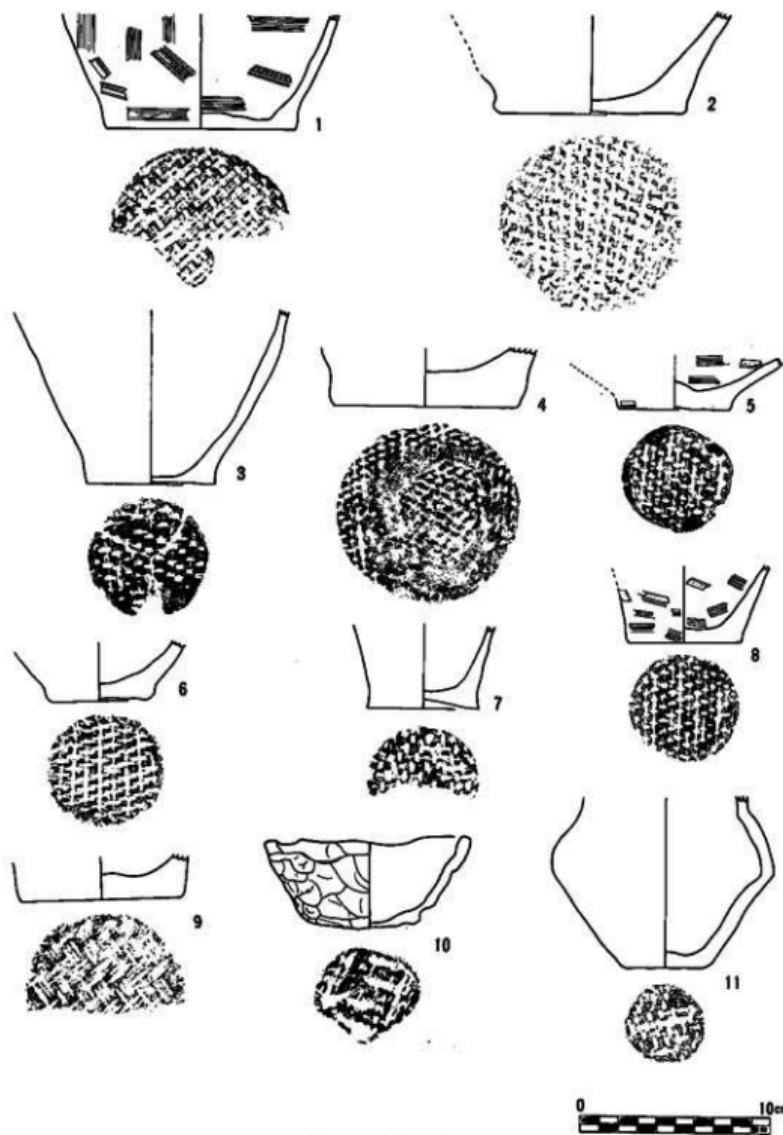


第42図 VI: 瓦器

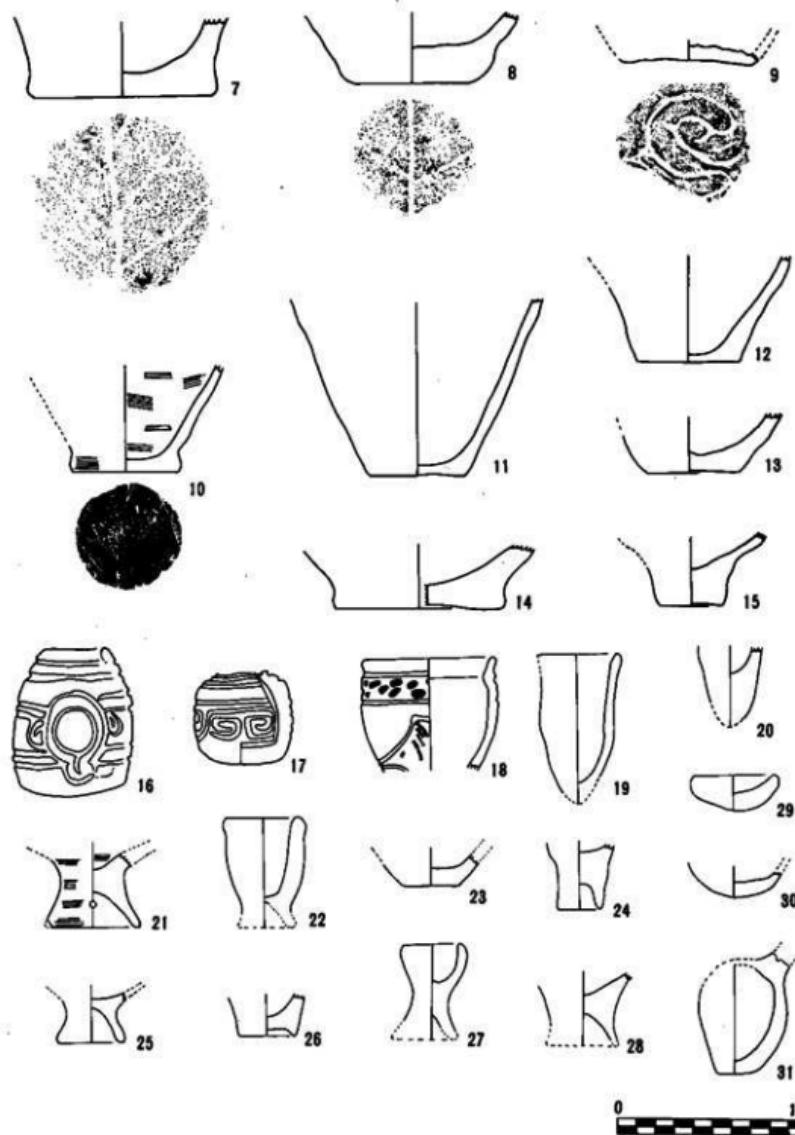


0 10cm

第43图 II・III群土器



第44図 雜群土器



第45図 沖群土器

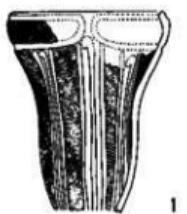


図1はSK 08の裏である。
中期後葉期に位置するが、中期の
ものとしては唯一のものである。
底部は割られており残されていな
い。また内部中程まで黒色のスス
が付着しており、裏棺に利用され
る以前は日常に使用されていたも
のと思われる。



図2はSK 09の埋裏である
る。口縁部は残されてはいなか
ったが、底部は残され網代痕を
有している。裏棺として使用さ
れたもののうちで底部の残され
ているのはこの1点のみである。



図3は08口縁部に瘤が10個付
されると思われ、瘤間には橢円
状の沈線が施される。前述した
IV群7類d種と同じ種類と考
えられる。

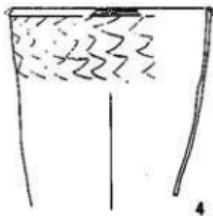


図4はSK 06の埋裏であるが、3と
同様、算出できなかったが口縁部に
瘤が付され、刺突、沈線、刻目が施
される。胸部には羽状斜線文が3段
施されている。これもIV群7類d種
に類似する。この2点は時期的には
晩期初頭のものと考えられる。

2. 石器

1) 磨製石斧 (第2・3表、第46・47図)

検出された磨製石斧は 78 点在る。形態的には、中形・小形品の定角型の物が 6 割以上を占め、中形・大形品は短冊型を示す傾向があり、少數ながら小形の特殊形態の物も在る。一覧表中、第1表は短骨型・特殊形態の物、第2表には定角型の物を載せた。形態的特色把握の為に斧身・基部幅・刃部幅にそれを基数としたそれぞれの割合を算出し、機能的特色を把握する為に刃部の形状・様子、すなわち蛤刃・片面の弯曲の強弱・刃縁部分の磨耗・欠損の在り方等を観察した。結果、短冊型は斧身に対する刃部幅が $\frac{1}{2}$ を越えず、基部幅対刃部幅は $\frac{1}{3}$ 以下に落ちる傾向を示し、定角型は、前者が $\frac{1}{2}$ 前後、後者が 2 ~ 3 倍という数値を示している。したがって、一応定角型に分類した No.38~41・47・52・54 は異質な物かも知れない。刃部の状態を観察すると、蛤刃は短骨型・定角型の小形品 (No.30~46) に多い傾向を示し、磨耗・打損も刃縁全体に及ぶものに対し、定角型の中形品 (No.1~17) の中には、刃部作り出しのカーブが一方のみや強いものが多く、側刃縁も左右何れかが磨耗・打損の割合が強い傾向が在る。したがって、蛤刃を有する石斧の機能を柄に刃部が平行に装着されるものとして横斧、片面のカーブのみ稍々強いものは、直行して装着されるものとして縱斧と分類してみた。(機能観の横縦の区分) なお、同じ蛤刃でも小型定角型のものは、柄と斧身その物が平行に装着される可能性もあり、空欄にした。石材は、小形のものはチャートに限定され、中形品は輝石安山岩・玢岩等とが相中端し、短冊型にはチャートが用いられない傾向が在る。

2) 打製石器

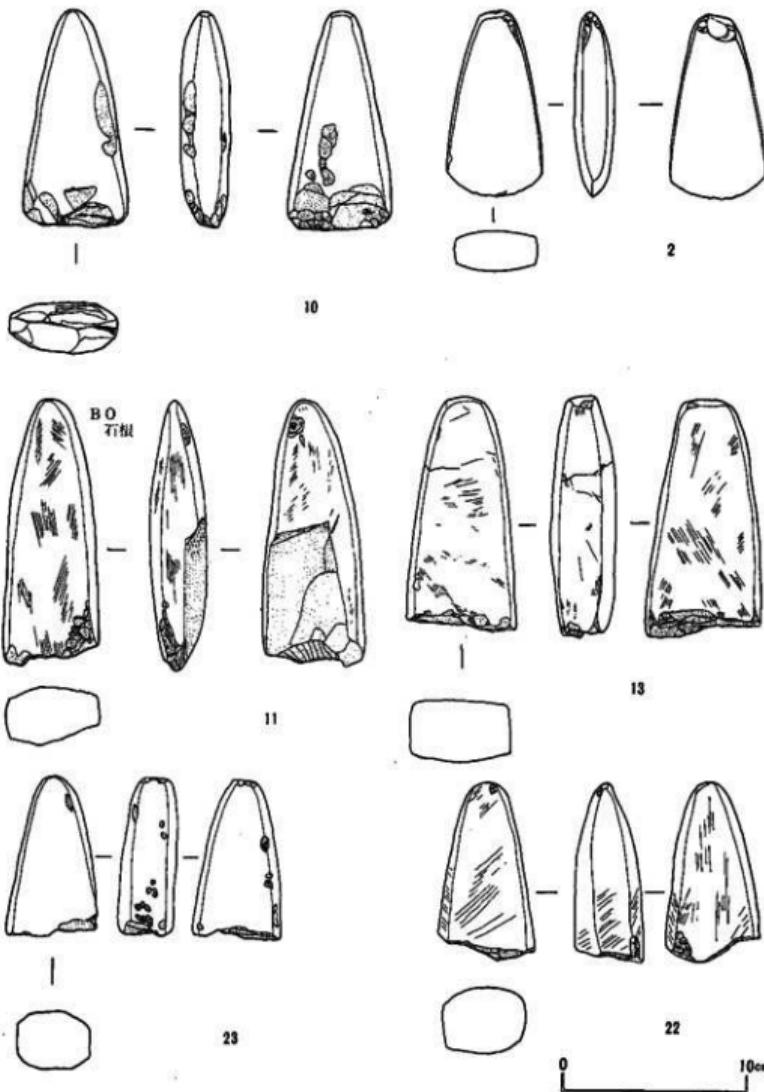
イ) 打製石斧

硬砂岩、岩等比較的軟質の石材を用い、形態は短冊型・分銅型の物が出土しているが詳しい記載は稿を改めたい。

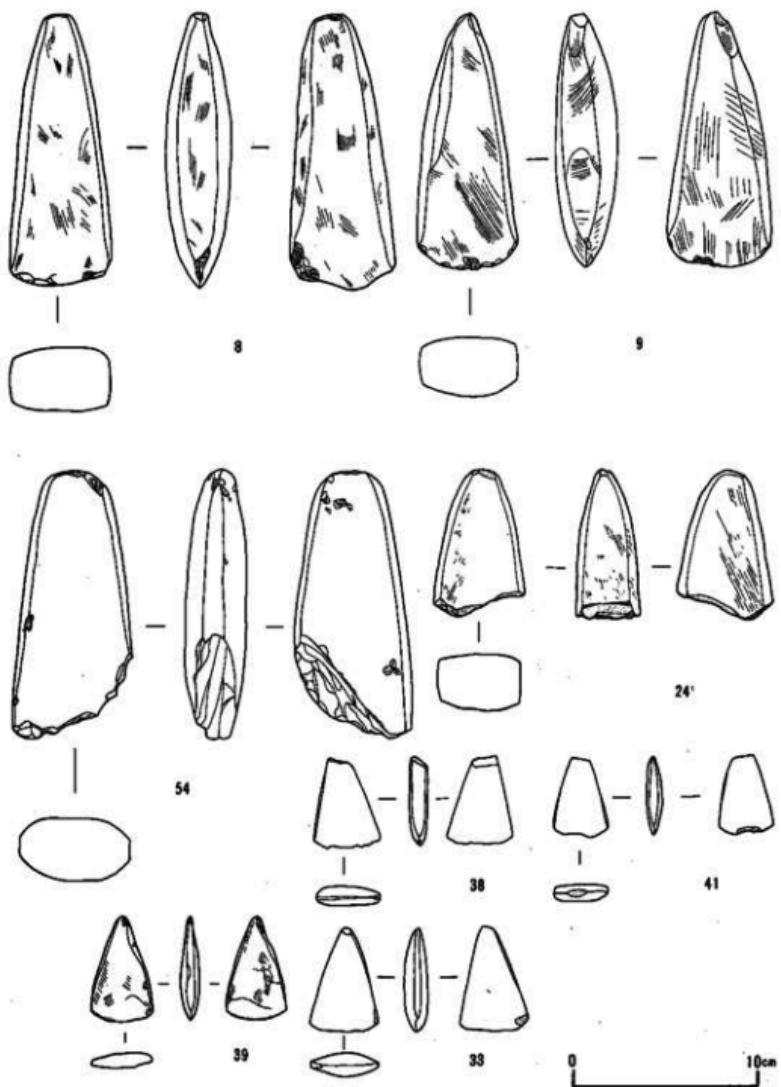
ロ) 横刃部を有する石器 (第48図 1~13)

この類に含めた石器の総数は 20 点余であるが、上小地方でこの類の石器の初現は中期中葉からであり、後晩期を主体とする当遺跡に於けるその数とバリエーションは比較的多い。石材は大半が頁岩系の石を用い、唯一点を除いて概して荒い製作である。形態的には大きく 4 タイプに分類される。

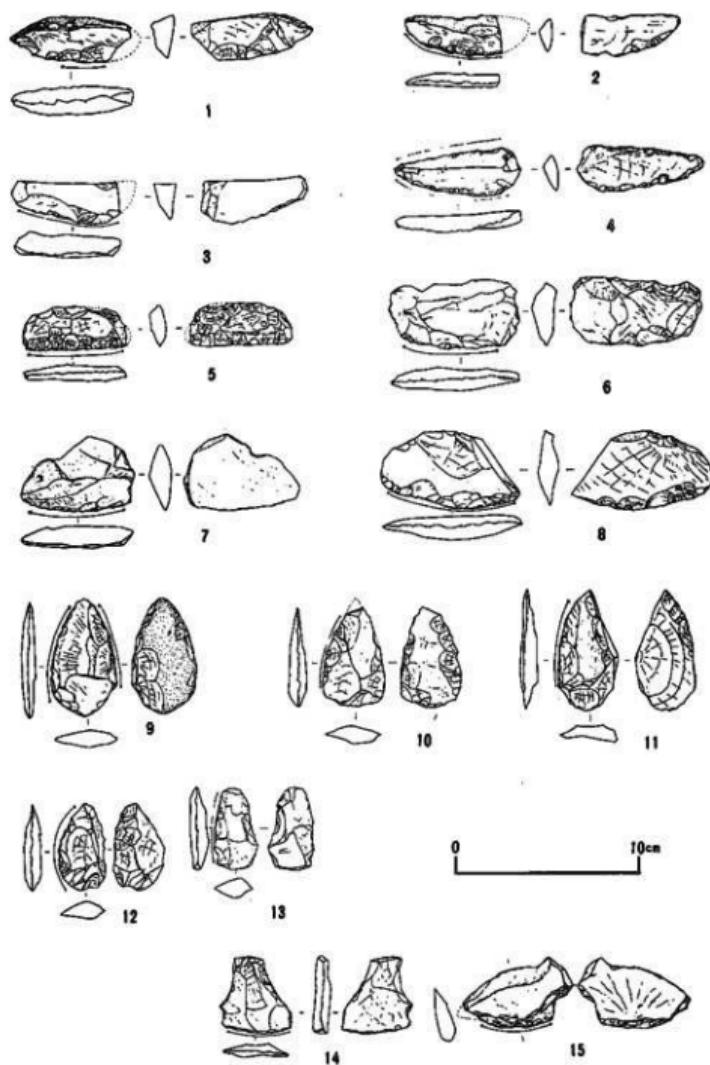
- a. 細みて背部に自然面残し、刃部外弯し、断面三角形を呈するもの。
- b. 直刃乃至は稍彎曲した刃部を有し、断面レンズ状を呈するもの。
- c. スペード形で、尖端を造り出し、断面レンズ状を呈するもの。(両刃も在り)。
- d. 所謂石鎚の類に属するかも知れないが、荒い製作により刃部が形成され、断面ざんぐりしたレンズ状を呈するもの。
- e. その他



第46図 磨製石器実測図(1)



第47図 磨製石斧実測図(2)



第48図 横刃部を有する石器 (1~4: aタイプ、5~8: bタイプ、
9~11: cタイプ、12・13: dタイプ)
石匙形石器 (14、15)

第2表 短冊型・特殊形態磨製石斧

()内数は推定(重量は現)

No	出土地点	斧身 A(cm)	基部巾 B(cm)	刀部巾 C(cm)	厚み D(cm)	B/A	C/A	C/B	重量 (g)	刀部の様子	備考	石材	機能	
1	N 3 W 3	20.0	4.7	6.5	3.8	0.24	0.33	0.19	612.5	片面基部まで欠損	蛤刃 基部欠損	蛇紋岩	横	
2	SXD-09	10.5	3.6	4.7	2.7	0.34	0.45	0.26	240.0	全体打損	蛤刃 基部欠損	?	横	
3	Z	(10.3)	(2.5)	4.3	(2.5)	(0.24)	(0.42)	(0.24)	(147)	全体打損 片面欠損	基部欠損	?	横	
4	S 12 W 42	(15.0)	(5.0)	5.4	(3.8)	(0.33)	(0.36)	(0.25)	(397)	全体磨耗	蛤刃 基部欠損	硬砂岩	横	
5	N 60 W 6	(11.0)	(3.5)	4.1	2.5	(0.32)	(0.37)	(0.23)	(130)	全体磨耗	蛤刃 基部欠損	?	横	
6	N 12 W 60	(9.3)	3.9	(4.4)	2.8	(0.42)	(0.47)	(0.30)	(236)	欠損	蛤刃 ソケット底	?	横	
7	A-Z	(15.0)	-	3.7	3.3	-	(0.25)	(0.22)	(202.5)	全体磨耗一部欠損	蛤刃	?	横	
8	N 45 W 15	(18.0)	-	4.6	3.1	-	(0.26)	(0.17)	(172.5)	体部腹背非対称	?	?	横	
9	N 18 W 54	(12.0)	-	5.6	3.4	-	(0.47)	(0.28)	(289.5)	一部欠損	基部欠損	安山岩	横	
10	C-Z	(12.0)	3.9	-	3.3	(0.33)	-	(0.28)	-	基部欠損	?	?	横	
11	C-D-Z	-	-	-	3.3	-	-	-	-	刃部 基部欠損	?	?	横	
12	Z	-	-	-	3.0	-	-	-	-	刃部 基部欠損	?	?	横	
13	N 33 W 27	(15.0)	-	3.9	3.4	-	(0.26)	(0.23)	(286)	先端そり	基部欠損	?	横	
14	Z	-	-	-	4.4	-	-	-	-	刃部のみ	?	?	横	
15	N 48 W 36	8.5	2.1	3.2	1.1	0.25	0.38	0.13	67.0	全体磨耗	打損	?	?	
16	N 48 W 15	(10.0)	1.5	3.1	-	(0.15)	(0.31)	-	(37)	-	-	?	?	
17	N 57 W 12	4.7	0.8	1.3	0.6	0.17	0.28	0.13	-	全体磨耗	蛤刃	?	横	
18	S 3 W 12	-	-	3.0	1.0	-	-	-	-	全体磨耗	蛤刃	?	横	
19	S 6 W 15	-	-	2.3	0.7	-	-	-	-	全体磨耗	蛤刃	?	横	
20	N 66 W 6	-	-	3.3	0.7	-	-	-	-	全体打損	蛤刃	?	横	
21	N 48 W 12	7.3	0.9	1.3	1.3	0.12	0.18	0.18	-	全体磨耗	蛤刃	?	横	
22	S 9 W 51	7.7	-	-	4.9	1.5	-	0.64	0.19	全体磨耗	分銅型片刃	硬砂岩	?	?
23	S 12 W 12	(15.4)	3.3	-	3.2	(0.21)	-	(0.21)	-	全体磨耗	基部欠損	?	?	
24	N 51 W 18	(13.5)	3.6	-	4.3	(0.27)	-	(0.32)	-	基部欠損	基部欠損	?	?	

第3表 定角型磨製石斧

()内数字推定(重量は現)

No	出土地点	斧身 A(cm)	基部巾 B(cm)	刀部巾 C(cm)	厚み D(cm)	B/A	C/A	C/B	重量 (g)	刀部の様子	備考	石材	機能
1	N 45 W 36	8.9	2.2	4.5	2.0	0.25	0.51	2.0	125.5	左刃縁磨耗	基部より $\frac{1}{3}$ 程に破損	チャート	縫
2	N 45 W 36	9.5	2.2	5.1	2.0	0.23	0.54	2.3	157.5	左刃縁磨耗	基部腹面に破損	チャート	縫
3	S 6 W 48	8.7	1.4	4.1	2.3	0.16	0.47	2.9	128.0	左刃縁磨耗、右刃縁 腹面破損	基部破損	チャート	縫
4	ST82	8.9	1.8	4.0	2.2	0.20	0.45	2.2	135.5	左刃縁磨耗	基部に散打痕	チャート	縫
5	N 21 W 30	9.2	2.0	4.7	2.0	0.22	0.51	2.4	123.0	右刃縁磨耗、左刃縁 背面破損	基部背面破損	チャート	縫
6	ST124	13.9	2.1	5.4	3.3	0.51	0.39	2.6	400	左刃縁磨耗、右刃縁 破損	-	輝石安山岩	縫
7	N 33 W 12	12.9	1.1	5.3	3.3	0.09	0.41	4.8	330.0	右刃縁磨耗	基部尖る	輝石安山岩	縫
8	ST87	(12.0)	1.3	(5.5)	2.5	0.11	(0.46)	(4.2)	(219)	腹背面とも欠損	基部欠損、緊縛痕	矽岩	縫
9	N 60 W 6	(15.0)	(2.5)	(6.5)	3.4	0.17	(0.43)	(2.6)	(366)	背面と右側面へ大欠 損	基部欠損、緊縛痕	?	縫
10	N 27 W 15	-	-	-	4.8	(1.9)	-	-	-	左刃縁磨耗	基部より $\frac{1}{3}$ 欠損	輝緑岩灰岩	縫
11	N 33 W 51	-	-	-	4.1	(1.6)	-	-	-	右刃縁磨耗	基部より $\frac{1}{3}$ 欠損	?	縫
12	S 6 W 48	(8.5)	1.6	(4.1)	2.0	(0.19)	(0.48)	2.6	(116.5)	片面へ欠損	基部打痕	チャート	縫

No	出土地点	身 A (cm)	基部巾 B (cm)	刀部巾 C (cm)	厚 み D (cm)	B/A	C/A	C/B	重 量 (g)	刀部の様子	備 考	石 材	機能
13	N15W39	(10.0)	2.0	(5.0)	2.4	0.20	(0.50)	2.5	(148.5)	片面へ大欠損	基部打痕	珪質硬砂岩	横
14	B-C区境界	(14.7)	1.8	(5.5)	(3.3)	0.12	(0.37)	(3.0)	(338)	大欠損	?	?	横
15	N36W12		2.7		3.3					欠損	透明	硬砂岩	横
16	N39W6			4.7	(1.9)					刃縁両方側く磨耗	基部より $\frac{1}{3}$ 欠損	チャート	横
17	N54W12			4.0	(1.6)					はげ完存	基部より $\frac{1}{2}$ 欠損	チャート	横
18	N51W18		1.6		2.1					基部丸み	輝緑凝灰岩		
19	S12W9		2.3		2.6					基部に敲打痕	チャート		
20	C-D区境界		2.7		2.4						チャート		
21	N12W60		3.0		2.8					基部周辺破損	チャート		
22	N12E30		1.6		3.5					基部尖る	玲岩		
23	N12W27		1.5		2.9					基部尖る	玲岩		
24	ST93		1.6		3.2					基部尖る	?		
25	C-D区境界	(2.0)			3.7					基部尖る	玲岩		
26	N57W33		1.2		2.8					基部尖る	安山岩		
27	S15W15		1.6		3.0					基部敲打痕	?		
28	N54W12		2.3		2.5					基部敲打痕	輝緑凝灰岩		
29	N3W12		2.5		3.4					基部敲打痕	玲岩		
30	S12W12	7.0	2.1	4.0	1.7	0.3	0.57	1.9	83.0	刃縁両方磨耗	蛤刃	チャート	
31	N57W12	7.0	1.1	3.7	1.2	0.15	0.52	3.4	44.0	刃縁両方磨耗	蛤刃	チャート	
32	N9W12	5.8	0.8	3.1	1.1	0.14	0.53	3.9	31.0	刃部直線、一部破損	蛤刃	チャート	
33	N3W45	5.4	0.7	3.7	1.3	0.13	0.69	5.3	35.0	刃縁両方破損	蛤刃 基部尖る	チャート	
34	ST78	5.4	0.5	3.1	0.9	0.1	0.57	6.2	23.0	全体磨耗	蛤刃 基部一部欠損	チャート	
35	N57W12	4.8	1.2	2.5	0.9	0.25	0.52	2.1	18.0	全体磨耗	蛤刃	チャート	
36	S3W9	4.1	1.2	2.8	0.9	0.3	0.68	2.3	16.5	中央破損	蛤刃	チャート	
37	S9W9	5.3	0.9	3.2	0.9	0.17	0.6	3.5	23.0	全体破損	蛤刃 基部尖る	チャート	
38	N57W12	5.1	1.5	2.5	0.9	0.29	0.49	0.18	49.5	全体打撲	蛤刃 基部尖る	チャート	
39	Z	5.5	1.5	2.9	1.4	0.27	0.53	0.25		片方向へ磨耗	蛤刃	?	
40	N24W51	(4.4)	1.6	3.1	1.0	0.36	0.7	0.23		片方向へ磨耗	蛤刃 基部欠損	チャート	
41	S3W9	7.4	1.8	3.4	1.2	0.24	0.46	0.16		片端破損	蛤刃 基部片割欠損	チャート	
42	N9W6	7.4	(1.3)	(3.5)	1.4	(0.18)	(0.47)	(2.7)		片側刃部欠損	蛤刃 基部欠損	チャート	
43	S6W12			(3.6)	(1.5)					全体破損、片耳欠	蛤刃 基部欠損	?	
44	N48W21	(5.0)	(1.2)	3.5	1.0	(0.24)	(0.7)	(2.9)		全体破損	蛤刃 基部欠損	?	
45	N24W51	(7.4)	(1.7)	3.5	1.2	(0.23)	(0.47)	(2.1)		右側刃縁磨耗	斧身変曲 基部欠損	チャート	
46	N24W51				3.8	1.2				直刃、全体破損	蛤刃 基部欠損	チャート	
47	S29W30	(7.2)	1.6	(3.6)	1.2	(0.22)	(0.5)	(0.17)			刃部欠損	?	
48	N39W3				1.8	0.8				刃部半分欠損	チャート		
49	B-C区境界				1.5		0.9			刃部欠損	チャート		
50	S6W24				1.3		1.1			刃部欠損	チャート		
51	N36W3				1.6					基部のみ	?		
52	S12W12	(16.0)	3.0	(5.7)	3.2	(0.19)	(0.36)	(0.2)		刃部欠損	基部打痕	?	
53	N39W15				5.7						蛤刃	?	
54	N12W36	(13.5)	2.4	(4.5)	3.1	(0.18)	(0.33)	(0.23)	307	全体磨耗	蛤刃	?	横

ハ) 石鎚

非常に多数の出土があり、総数4726ヶをかぞえる。外形・刃部の形態等による様ざまな分類が可能であるが、一応形態別に以下の通り分類した。

I型…無茎、平基ないし凹基のもの (1212ヶ)

II型…有茎、凸基のもの (1108ヶ)

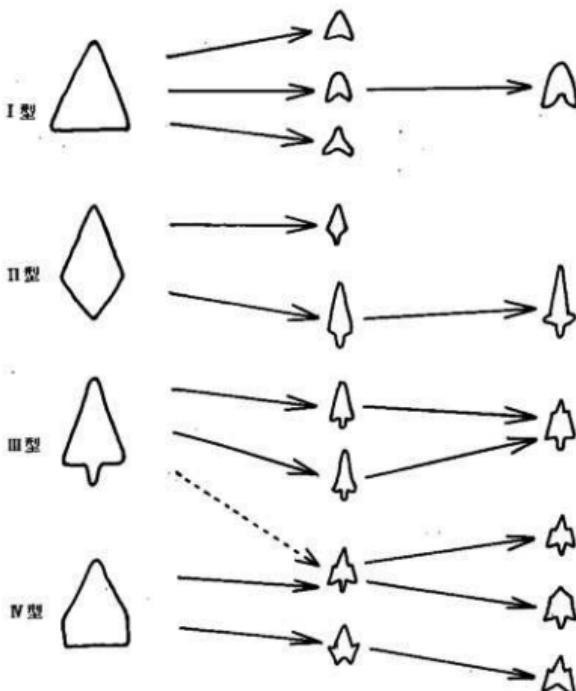
III型…有茎、平基ないし凹基のもの (1380ヶ)

IV型…有茎・無

基・平基・凸基・凹基のいかんにかかわらず、所謂飛行機型と称されるもの (358ヶ)
外に破損しており分類不能のもの (668ヶ)

合計 4726ヶ

上記のように、非常に多数の石鎚が出土した。使用されている石材は、産出地が近いことも理由して黒曜石が最も多い。しかし、当初予想したよりは少ないといえる。そのほかの用材としては、頁岩・チャート・玉髓・瑪瑙などがあり多様である。また、この用材は形態により選ばれていますらしく、その割合に差がある。特に頁岩にそれが著しく、II型に頁石製のものが多い。形態別の数を比較してみると、I・II・III型は際だった差は認めがたい。IV型は特殊な形態であるので、数の上でも極端に少なくなるが、該期の他遺跡に比すると、群を抜いて多いと言える。



第49図 石鎚形態分類模式図

第4表 石鐵計測表

No	グリット	層位	全長	幅	厚	重量g	基部形態	石質
1 - 1	N 6 W 3	II層	20.0	14.5	3.6	0.9	無茎凹基	黒曜石
2	N 6 W 12	"	17.8	16.1	4.0	0.8	"	"
3	N42W27	III層	21.3	19.5	4.2	1.1	"	"
4	N42W56	II層	23.5	12.2	3.6	1.0	"	"
5	N33W30	III層	22.7	12.0	2.6	0.5	"	"
6	N18W 3	II層	21.5	12.1	2.2	9.6	"	"
7	N18W54	III層	16.7	16.1	3.2	0.6	"	"
8	N48W15	II層	23.3	17.0	3.9	1.3	"	"
9	N24W15	I層	21.5	15.0	3.0	9.8	"	"
10	N42W30	III層	23.5	15.0	2.0	0.8	"	"
11	N33W 6	II層	18.8	10.5	3.1	0.6	"	"
12	N 6 E 9	I層	19.5	13.0	3.2	0.8	無茎平基	"
13	N36E 6	I層	16.8	14.0	3.9	0.4	無茎凹基	"
14	Z		17.3	9.6	2.5	0.4	"	"
15	N59W6	II, III層	20.0	15.0	3.8	0.9	"	"
16	S 6 W 3	III層	22.2	14.0	3.0	0.7	"	"
17	N15W30	II層	32.0	21.2	6.2	3.1	"	"
18	N27W15	II, III層	21.0	13.2	3.1	0.8	"	"
19	N54W27	III層	14.0	13.1	2.1	0.3	"	"
20	N57W15	II層	22.5	20.0	5.3	2.3	"	"
21	N45W27	IV層	28.6	11.6	3.2	0.8	"	"
22	N 6 W 6	III層	16.9	11.2	3.4	9.7	"	"
23	N27W27	"	12.6	11.4	2.3	0.3	"	"
24	N54W18	"	14.3	11.6	7.6	9.3	"	"
25	S15W21	II層	18.9	12.9	4.4	0.4	"	"
26	S13W53	III層	17.3	16.7	2.9	0.6	"	"
27	N36W12	II層	18.2	14.2	2.6	0.6	"	"
28	N 3 W12	"	19.0	17.1	3.9	0.9	"	"
29	N18E 6	I層	21.6	17.2	4.7	1.3	"	"
30	S12W37	II層	12.2	12.6	2.4	0.3	"	"
31	N12E 6	I層	21.8	11.9	4.7	0.7	"	"
32	N48W30	II層	18.4	11.6	4.1	0.8	"	"
33	N39W3	III層	19.1	12.5	2.9	0.4	"	"
34	N48W15	II層	16.2	12.8	2.6	0.4	無茎平基	"
35	N33W12	"	16.8	13.9	3.3	0.5	無茎凹基	"
36	N24W30	"	16.6	14.8	2.2	0.6	"	"
37	N48W18	I層	21.1	14.1	2.9	0.5	"	"
38	N15W27	"	17.6	14.4	3.6	0.6	"	"
39	N 3 E 2		14.8	11.0	2.4	0.3	"	"
40	SKP05		14.4	11.3	3.5	0.4	"	"
41	Z		18.6	16.3	4.3	0.9	無茎平基	"
42	N 3 E 3	I層	13.6	12.8	2.7	0.4	"	"
43	N 3 E 3	II層	20.8	19.4	3.4	1.0	"	"
44	N30W3	I層	21.2	11.1	3.4	0.6	無茎凹基	"
45	Z		15.4	13.6	3.1	0.4	"	"
46	N48W12	II層	17.3	11.7	2.8	0.4	"	"
47	N12W30		16.3	12.1	2.6	0.3	"	"
48	N42W33	III層	17.0	11.0	3.3	0.5	"	"
49	S15W 9	II層	15.9	13.9	3.6	0.4	"	"

No.	グリット	層位	全長	幅	厚	重量g	基部形態	石質
50	S12W12	III層	29.8	13.6	2.7	0.6	"	"
51	N 3 E 3		17.5	13.0	4.0	9.7	"	"
52	S 9 W15	IV層	18.2	11.7	2.4	0.5	"	"
53	N12W24	"	16.7	13.1	2.1	0.4	"	"
54	N 6 E 9	I層	19.1	16.7	4.5	1.1	"	"
55	N27W27	III層	13.7	10.7	2.0	0.3	"	"
56	N 9 W6	I層	15.1	13.2	2.3	0.2	無茎平基	"
57	S12W12	II層	16.9	16.6	3.1	0.5	無茎凹基	"
58	S12W39	I層	13.8	10.8	1.8	9.3	"	"
59	N21W21	"	13.3	10.5	1.8	0.3	"	"
60	N57W9	IV層	16.3	12.1	2.5	9.5	"	"
61	N 6 W69	"	13.2	10.6	2.5	0.3	"	"
62	S 3 W18	I層	13.7	12.9	2.3	0.3	"	"
63	S 6 W9	II層	14.8	12.2	2.2	0.4	"	"
64	Z		14.6	14.1	2.8	0.4	"	"
65	N24W42	III層	16.1	12.8	4.9	0.9	"	"
66	N63W12	I層	13.1	12.9	7.2	0.2	"	"
67	N 3 W6	"	15.8	12.6	2.3	0.3	"	"
68	N36W24	III層	13.5	13.1	4.6	0.6	無茎平基	"
69	N 6 E 6	I層	13.3	14.3	3.1	0.4	無茎凹基	"
70	S 3 W54	III層	14.6	14.8	3.1	0.5	"	"
71	N 6 W18	I層	12.4	9.4	2.2	0.2	"	"
72	N42W33	III層	14.1	16.4	2.9	0.5	"	"
73	N 6 E3	I層	15.1	12.1	2.4	0.4	"	"
74	N15W15		11.9	14.9	2.3	0.3	"	"
75	S 3 W12	II層	19.1 (20.7)	13.1	3.3	9.9	"	"
76	N64 w 6	III層	29.9	20.4	4.9	2.7	"	頁岩
77	N41W33	"	19.9	14.5	3.5	0.9	"	"
78	N53W9	II層	28.0	19.0	5.9	2.2	"	"
79	N 3 W 6	III層	24.5	24.8	3.6	1.6	"	"
80	N48W 6	"	22.3	14.2	2.7	0.7	無茎平基	"
81	N45W27	IV層	29.8	17.4	3.3	1.6	無茎凹基	"
82	N42W 3	II層	21.3 13.2	15.4 19.2	3.3 3.6	0.8 1.8	"	頁岩
83	S12W12	"	(39.0)				"	"
84	S 9 W 9	"	27.9	18.7	3.7	1.2	"	"
85	N66W3	III層	26.7	19.3	2.9	1.3	"	"
86	N 9 W60	"	37.7	18.3	5.4	3.4	"	"
87	N39W15	"	25.7	19.6	3.7	1.5	"	"
88	S62W12	II層	22.0	16.7	4.3	1.1	"	"
89	N32W24	"	32.2	16.1	4.3	1.8	"	"
90	N33E 6	I層	25.1	22.7	2.3	2.1	"	"
91	N21W24	II層	22.1	15.8	2.6	0.7	"	"
92	N51W18	"	31.0	18.1	5.0	2.7	"	"
92	Z		24.8	16.7	2.9	7.2	"	"
94	N51W18	III層	22.9	15.0	3.3	1.2	"	"
95	S12W12	II層	23.2	15.1	4.1	1.1	"	"
96	N42W24	"	33.8	16.1	3.5	1.5	"	"
97	N24W18	I III	27.2	22.6	3.9	1.5	"	"

チヤート

No.	グリット	層位	全長	幅	厚	重量/g	基部形態	石質
98	Z		26.6	16.4	2.4	0.8	"	"
99	S B03		21.6	9.4	3.6	0.6	"	"
100	N12E 3		20.0	16.8	4.1	1.0	無茎平基	"
101	N 6 W51	IV層	15.9	14.9	2.7	0.5	無茎凹基	"
102	N15W54	III層	22.6	18.3	3.3	0.7	"	"
103	Z		16.8 (25.0)	21.2	3.9	1.4	"	"
104	N24W24	I層	21.8	16.2	2.8	0.6	"	
105	Z		18.1 (24.0)	21.7	3.9	1.1	"	
106	S 12W12	II層	12.8	12.6	3.3	0.4	"	チャート
107	N21W 6	I層	18.0	15.0	3.8	0.8	"	"
108	Z		20.8	14.8	3.9	1.1	"	"
109	N 6 W12	I層	17.9	16.2	3.8	1.0	"	"
110	N48W21	III層	18.5	17.2	3.2	0.8	"	"
111	N45W 6	"	14.3	16.1	2.6	0.4	"	"
112	S X B04		21.2	15.7	4.1	0.9	"	"
113	N54W 6	III層	17.8	15.4	3.1	2.0	"	"
114	N21W33	I層	20.9	23.4	4.6	0.7	"	"
115	N33W 9	IV層	18.8	11.7	3.9	0.6	"	"
116	S 3 W12	II層	13.1	12.1	2.4	0.3	"	"
117	N66W 9	IV層	15.7	10.9	3.5	0.5	"	"
118	N 3 W 6	I層	22.4	17.3	3.5	0.9	"	"
119	N18W 6	IV層	17.7	16.2	4.7	1.2	"	"
120	N15E 3	I層	21.2	19.9	4.3	1.4	"	"
121	Z		19.5	17.9	3.3	0.7	"	"
122	N51W27	III層	19.1	18.8	3.4	1.1	"	"
123	N54W18	" (21.0)	19.3 (21.0)	15.9	2.9	0.9	"	"
124	N42W33	"	19.1	13.6	2.5	0.7	"	"
125	N 6 E 9	I層	19.1	14.1	3.6	0.7	無茎平基	
126	N30E 9	"	33.1	21.1	8.1	4.3	"	玉髓
127	N21W45	III層 (31.0)	25.1 (31.0)	24.2	4.4	2.3	無茎凹基	頁岩
II - 1	Z		22.4	13.1	4.1	0.9	有茎凸基	黑曜石
2	N30W27	III層	27.4	12.1	4.3	1.1	"	"
3	N15W33	II層	17.8	12.5	2.6	0.4	"	"
4	N24W24	III層	18.3	13.1	3.1	0.6	"	"
5	Z		27.2	11.1	4.2	0.9	"	"
6	N48W12	II層	26.2	12.3	4.8	0.9	"	"
7	N27W 6	I層	24.0	15.5	5.6	1.4	"	"
8	N30W15	II層	17.6	11.6	2.5	0.4	"	"
9	N 3 E 3	"	24.0	13.2	3.6	1.9	"	"
10	N 24W24	III層	26.9	14.1	3.5	1.2	"	"
11	N48W30	II層	28.8	15.6	5.3	1.5	"	"
12	N60W 9	III層	29.0	13.9	5.2	1.4	"	"
13	S K P05		19.1	11.7	3.9	0.5	"	"
14	N48W 9	III層	29.0	16.9	6.4	2.0	"	"
15	S 12W12	"	24.3	15.2	4.9	1.4	"	"

No.	グリット	層位	全長	幅	厚	重量/g	基部形態	石質
16	N 9 W38	I層	26.7	15.8	5.1	1.6	"	"
17	N 9 W36	IV層	22.5	12.9	4.3	1.1	"	"
18	N24W27	I層	19.5	12.4	3.5	0.9	"	"
19	Z		16.4	13.7	3.2	0.6	"	"
20	N24W48	III層	18.5	12.2	3.2	0.6	"	"
21	S 3 W39	"	42.9	18.9	8.1	6.1	"	頁岩
22	N12W39	I層	33.7	26.1	5.5	1.9	"	"
23	N24W 9	"	32.7	16.9	6.1	2.2	"	"
24	N57E 3	III層	29.1	19.7	5.6	2.4	"	"
25	N57W12	"	43.7	14.1	5.5	2.7	"	"
26	Z		37.2	22.3	7.1	4.3	"	"
27	N54W27	III層	40.4	14.8	4.0	2.0	"	"
28	N 3 W60	"	29.7	13.3	4.0	1.4	"	砂岩
29	N 9 W30	II層	26.3	12.8	3.7	0.9	"	"
30	N 6 W 3	I層	25.6	17.1	4.9	1.6	"	"
31	N36W30	III層	36.6	17.4	7.0	3.6	"	"
22	N27W30	"	31.9	15.3	5.2	1.8	"	"
33	N 9 W21	II層	35.0	18.3	6.1	2.7	"	"
34	Z		36.1	18.1	10.1	5.3	"	"
35	N 9 W27	I層	28.0	11.8	6.9	1.6	"	"
36	N48W12	II層	24.3	10.9	2.9	0.7	"	"
37	N15W48	IV層	31.5	14.4	4.1	1.2	"	"
38	N18W30	I層	37.3 (43.0)	11.8	5.2	2.4	"	
39	S12W12	II層	44.2	19.4	6.9	3.9	"	頁岩
40	N30W 6	III層	39.1	16.6	8.1	3.7	"	"
41	N 9 W33	I層	40.9	17.8	6.0	3.1	"	"
42	Z		41.4	16.6	7.4	3.5	"	"
43	N42W24	II層	35.6	17.1	4.4	2.0	"	"
44	S12W 9	"	26.7	19.9	4.9	2.2	"	"
45	N 6 W12	"	43.4	10.1	5.5	2.5	"	"
46	S12W 6	I層	33.4	17.3	7.4	3.0	"	"
47	N18W27	II層	35.9	19.9	8.4	5.2	"	"
48	N42W12	"	39.8	18.1	7.8	5.6	"	"
49	N54W15	"	33.3	20.8	4.6	2.4	"	"
50	N54W18	III層	31.7	22.1	4.8	2.9	"	"
51	N48W24	"	28.8	12.3	4.9	1.4	"	"
52	N 6 W45	IV層	27.2	13.6	4.1	1.3	"	"
53	N51W27	III層	20.7	13.8	2.4	0.6	"	"
54	S57W 6	"	27.2	19.9	4.9	2.1	"	"
55	N57W12	"	40.9	18.5	8.2	6.2	"	"
56	N36E 3	I層	35.1	19.3	7.5	4.4	"	チャート
57	N42W27	III層	36.2	29.9	7.4	5.8	"	"
58	N51W18	II層	26.6	16.9	4.7	1.9	"	"
59	N33W 9	III層	21.9	12.8	3.4	0.9	"	"
60	N39W24	II層	24.6	28.0	5.2	1.4	"	"
61	N48W30	"	23.7	17.3	4.3	1.5	"	"
62	N 6 W45	IV層	22.5	12.8	3.4	0.8	"	"

No.	グリット	層位	全長	幅	厚	重量/g	基部形状	石質
63	Z		27.4	11.7	4.4	1.0	"	"
64	S X a S K 08		24.9	15.6	3.6	1.4	"	"
65	S12W12	II層	32.7	11.8	4.7	1.6	"	
66	N18W3	"	39.2	16.1	6.6	3.6	"	
67	S12E3	I層	21.2	15.3	3.7	1.1	"	チャート
68	N12E6	"	26.4	10.7	4.1	1.1	"	"
69	N36W12	"	25.3	9.5	4.1	1.1	"	"
70	N48W27	III層	41.6	10.9	5.2	2.5	"	"
71	N48W24	"	29.8	14.1	3.6	1.2	"	"
72	N18W51	"	25.2	12.1	5.1	2.6	"	"
73	Z		24.5	10.5	6.8	1.7	"	"
74	N48W3	IV層	35.5	16.9	6.6	2.1	"	"
75	N45W30	II層	23.9	13.4	5.3	1.4	"	"
76	N30W3	III層	23.8	9.6	3.3	0.7	"	"
77	N39W3	I層	23.1	11.3	3.8	0.8	"	"
78	N60W6	IV層	35.5	12.4	3.9	1.7	"	"
79	N35W30	III層	30.8	13.8	4.8	1.5	有茎凸基	チャート
80	S3E9	I層	20.8	15.3	4.2	1.2	"	黒曜石
81	N51W18	II層	25.8	14.8	6.5	1.8	"	
82	N48W27	III層	28.2	10.5	4.7	1.1	"	チャート
83	N48W12	II層	21.7	12.3	4.0	1.0	"	
84	N15W24	"	25.5	10.1	4.2	1.1	"	
85	S9W12	"	24.8	15.8	5.0	1.4	"	
86	N60W12	"	32.6	14.5	6.2	1.4	"	骨
III-1	N42W33	III層	24.0	16.6	3.5	1.3	有茎平基	黒曜石
2	N51W30	"	30.2	11.2	4.1	1.1	"	"
3	N48W18	II層	25.7	14.9	4.4	1.2	"	
4	N42W18	III層	22.4	14.1	4.3	1.0	有茎凸基	"
5	N57W9	IV層	24.1	13.6	2.7	0.7	"	"
6	S12W3	"	28.1	11.6	4.1	1.1	有茎平基	"
7	N51W6	"	22.8	15.9	4.0	1.0	"	"
8	S3W12	II層	23.7	13.3	4.5	0.9	"	"
9	N12E3	"	20.5	13.8	3.0	0.5	有茎凸基	"
10	N15W21	"	20.3	14.0	3.7	0.7	"	"
11	N9W6	"	18.2	13.7	3.8	0.7	有茎平基	"
12	N24W30	"	27.7	12.9	3.6	0.6	"	
13	Z		19.3	14.1	4.1	0.3	"	"
14	N9W48	III層	19.6	12.9	3.5	0.7	有茎凸基	"
15	N51W21	"	29.4	13.9	4.3	1.2	有茎平基	"
16	S12W12	II層	24.1	13.4	4.0	0.9	"	"
17	N54W12	IV層	20.1	15.8	3.7	0.7	"	"
18	N51W21	III層	27.8	16.9	4.0	1.2	"	"
19	N6E3	I層	24.0	14.3	4.0	0.9	有茎凸基	"
20	Z		19.1	12.4	3.2	0.6	有茎平基	"
21	N60W6	IV層	21.4	14.9	2.5	0.6	"	"
22	N3E6	II層	22.7	18.1	4.6	0.6	"	"
23	N42W57	"	20.5	10.1	3.0	1.1	"	"
25	N51W12	II層	38.9	16.9	3.9	1.7	有茎凸基	"

No	グリット	層位	全長	幅	厚	重量/g	基部形態	石質
26	S 12W 3	"	23.3	17.3	3.4	1.0	有茎平基	"
27	N 54W 6	III層	25.0	16.4	4.5	1.0	"	"
28	N 48W 12	II層	18.8	11.3	4.1	1.4	"	"
29	S 3 W 12	"	24.4	14.4	3.2	0.7	有茎凸基	"
30	N 30W 30	III層	20.3	15.0	3.5	0.7	有茎平基	"
31	N 36W 27	II層	22.7	15.0	3.7	0.9	"	"
32	N 48W 18	"	21.9	14.3	3.2	0.5	"	"
33	N 36W 12	III層	28.5	12.4	3.8	0.9	"	"
34	N 6 W 45	IV層	26.1	18.1	4.5	1.3	有茎凸基	"
35	N 45W 15	III層	22.6	15.9	4.7	1.1	有茎平基	"
36	N 45W 24	IV層	24.4	14.9	3.6	0.9	"	"
37	N 21W 36	I層	23.4	15.0	4.1	1.0	有茎凸基	"
38	N 30W 15	II層	28.9	13.6	3.4	0.8	"	"
39	S 6 W 3	IV層	19.7	13.9	2.7	0.7	有茎平基	"
40	N 51W 30	III層	31.5	20.5	3.5	1.6	"	"
41	Z		27.7	14.7	3.7	1.0	有茎凸基	"
42	N 63W 9	III層	25.1	14.9	4.9	0.9	有茎平基	"
43	N 42W 12	I層	22.3	13.9	3.7	0.9	"	"
44	N 24W 30	II層	23.1	16.6	4.5	0.8	"	"
45	N 6 W 9	I層	19.0	14.9	3.8	0.7	有茎凸基	"
46	Z		18.9	12.1	3.5	0.6	有茎平基	"
47	N 3 E 3	I層	19.1	14.9	3.1	0.6	"	"
48	N 42W 27	III層	20.8	13.8	2.6	0.6	有茎凸基	"
49	N 36W 3	I層	24.5	22.0	3.4	0.7	有茎平基	"
50	N 48W 18	II層	18.2	17.7	3.3	0.9	"	"
51	N 27E 3	I層	23.7	17.0	3.5	0.9	"	"
52	S 9 E 3	"	21.1	14.5	3.5	0.7	"	"
53	N 15W 15	"	17.5	16.0	3.9	0.6	有茎凸基	"
54	Z		30.2	18.1	6.1	2.1	有茎平基	頁岩
55	S 3 W 33	III層	36.2	22.7	6.1	3.1	"	"
56	N 48W 36	II層	31.3	11.5	3.5	1.1	"	"
57	N 51W 12	"	38.0	19.5	8.3	3.4	有茎凸基	"
58	N 54W 12	"	34.5	15.3	4.9	1.8	有茎平基	"
59	Z	"	31.8	15.9	5.2	1.6	"	"
60	Z		31.3	12.9	3.7	1.2	"	"
61	N 48W 27	III層	34.1	21.5	6.2	2.7	"	"
62	N 21W 30	"	34.1	16.0	5.8	2.1	"	"
63	S 15W 15	I層	30.7	15.6	4.1	1.5	"	"
64	Z		25.0	13.0	3.8	1.1	有茎凸基	"
65	S 3 W 12	II層	28.8	25.0	3.2	1.3	有茎平基	"
66	N 51W 21	III層	31.9	14.0	3.9	1.5	"	"
67	Z		27.3	15.5	5.2	1.5	"	"
68	S 15W 12	II層	26.9	17.8	4.2	1.5	"	"
69	N 51W 3	"	29.7	13.7	4.5	1.4	"	"
70	N 6 W 3	I層	34.1	14.3	4.8	1.5	"	"
71	N 48W 36	III層	34.3	19.9	3.6	1.7	"	"
72	Z		26.5	16.0	3.7	1.2	"	"
73	N 9 W 18	I層	23.3	14.4	5.1	1.0	有茎凸基	"

No	グリット	層位	全長	幅	厚	重量/g	基部形態	石質
74	N27W30	"	26.0	22.6	6.7	3.4	"	"
75	N48W 3	IV層	26.9	14.4	3.3	1.0	有茎平基	"
76	N21W54	III層	37.6	16.0	4.8	2.2	"	"
77	S18W 6	"	24.6	17.9	4.1	1.4	"	"
78	Z		27.9	16.0	3.7	1.4	"	"
79	N45W39	II層	36.5	19.9	4.9	2.3	有茎平基	チャート
80	N51W30	III層	25.0	16.2	4.5	1.1	"	"
81	S12E 3	I層	20.7	19.5	3.0	0.8	有茎平基	"
82	N60W 6	IV層	24.0	13.6	3.8	0.9	"	"
83	N42W56	II層	32.4	21.1	8.1	3.2	"	"
84	N18W 3	"	27.4	16.6	4.3	1.4	有茎凸基	"
85	N 3 W 9	I層	30.1	17.0	4.6	3.0	有茎平基	"
86	Z		30.5	14.7	3.4	1.0	"	"
87	S 3 W12	II層	21.6	13.9	3.5	1.0	有茎凸基	"
88	N48W33	IV層	21.6	16.1	4.1	1.0	有茎平基	"
89	N30W 6	III層	22.9	14.8	3.9	0.9	"	"
90	N 3 W18~21	"	18.3	12.4	2.8	0.6	"	"
91	N51W21	"	19.9	13.9	3.7	0.5	"	"
92	N30W30	"	23.0	16.5	4.0	0.9	有茎凸基	"
93	N 6 W57	I層	29.9	14.1	4.6	1.0	有茎平基	"
94	Z		28.9	26.5	7.1	2.8	有茎凸基	"
95	S 3 W39	IV層	23.0	16.3	4.2	0.9	"	"
96	N 6 W42	III層	24.4	14.3	3.6	1.0	"	"
97	N36W21	"	28.6	14.4	4.3	1.4	"	"
98	Z		30.4	17.4	6.5	1.9	"	"
99	N42W27	III層	22.3	12.1	3.1	0.7	有茎平基	"
100	N51W 3	IV層	25.8	15.4	4.1	1.0	"	"
101	N30W 9	III層	28.1	12.0	3.6	0.9	"	"
102	Z		27.9	14.0	4.0	1.4	有茎凸基	"
103	N51W24	III層	22.4	17.7	3.5	0.8	"	"
104	N51W 6	II層	21.8	16.9	3.9	1.0	有茎平基	"
105	N 3 W36	IV層	24.0	16.8	4.7	1.3	"	"
106	S 6 W21	II層	29.8	12.5	3.5	1.0	"	"
107	S12W12	IV層	28.6 (35.0)	19.5	4.3	1.6	"	"
108	N12W15	I層	17.9	13.0	5.1	1.5	"	"
109	N45E 3	III層	21.9	17.9	4.8	1.3	"	"
110	N51W 9	IV層	24.1	16.6	4.4	1.2	"	"
111	N30W59	III層	26.1	19.6	3.8	1.6	"	"
112	N 3 W12	II層	18.4	9.9	3.0	0.5	"	"
113	N51W24	IV層	28.4	19.1	4.1	1.6	"	"
114	N54W 6	"	31.3	19.8	4.0	1.9	"	"
115	N15W24	II層	41.9	19.5	6.1	3.5	"	"
116	N12W45	III層	25.5	16.0	3.4	0.9	有茎凸基	"
117	S 9 W42	"	24.6	14.6	1.9	0.6	有茎平基	"
118	N63W 9	"	17.1	14.5	3.0	0.6	"	"
IV-1	N42W27	III層	17.5	17.3	4.5	0.7	有茎凸基	黒曜石
2	N15W48	"	17.5	16.6	2.9	0.6	"	"

No	グリット	層位	全長	幅	厚	重量/g	基部形態	石質
3	S 3 W12	II層	19.0	15.7	3.4	0.7	"	"
4	S 6 W48	III層	20.6	14.3	3.8	0.8	"	タ
5	N45W15	"	21.8	13.1	4.3	0.8	"	"
6	S24W30	"	28.6	16.5	3.9	1.2	"	"
7	N30W12	II層	21.6	17.9	3.6	1.1	"	"
8	S12W 6	II層	23.2	16.4	4.0	1.0	無茎凹基	"
9	N48W27	III層	18.8	18.6	3.2	1.0	"	"
10	N 9 W30	II層	22.1	17.0	3.4	1.1	"	"
11	N36W30	III層	22.5	14.4	3.4	0.9	"	"
12	Z		25.7	23.4	4.1	1.6	有茎凸基	"
13	N48W21	III層	20.4	15.1	2.7	0.8	無茎凹基	"
14	Z		28.6	11.8	3.3	0.8	有茎凸基	"
15	N 6 W12	II層	28.8	18.4	4.1	1.1	"	"
16	S12E 3	III層	21.3	14.3	4.7	0.9	"	"
17	N45W30	"	21.0	14.4	3.2	0.8	"	"
18	N36W30	"	17.0	14.1	4.7	0.9	"	"
19	N18W24	II層	17.4	16.9	3.4	0.8	"	"
20	"		25.4	17.6	5.3	1.0	"	"
21	N51W 3	IV層	21.1	14.3	3.4	0.8	"	"
22	S15W15	I層	17.9	12.1	2.5	0.4	"	"
23	N51W21	III層	16.5	15.8	2.8	0.6	"	"
24	N27W 9	"	11.2	16.8	3.1	0.5	"	"
25	Z		15.0	10.7	2.4	0.3	"	"
26	N48W15	II層	17.1	18.0	4.1	0.9	"	"
27	N42W12	"	21.1	10.5	2.8	0.5	"	"
28	N45W15	III層	17.2	11.7	3.8	0.6	"	"
29	N42W21	"	15.9	11.7	2.4	0.4	"	"
30	Z		18.0	12.1	3.0	0.5	"	"
31	N33W 3	I層	17.0	15.2	3.0	0.6	無茎凹基	"
32	N39W15	"	15.2	16.0	3.7	0.6	"	"
33	N45W15	III層	13.9	13.7	5.0	1.0	有茎凸基	"
34	N51W 3	"	22.2	13.6	4.2	0.9	"	"
35	N36W27	II層	17.4	12.0	3.7	0.4	"	"
36	S B03	III層	33.1	20.4	4.3	2.0	"	頁岩
37	N18W24	II層	29.4	15.3	4.1	1.8	無茎平基	"
38	Z		23.1	18.3	4.3	1.3	有茎凸基	"
39	N30W 6	II層	25.0	17.2	3.8	1.1	"	"
40	N33W33	III層	18.1	14.1	3.1	0.8	無茎平基	チャート
41	N18W48	"	21.9	13.8	4.3	1.0	有茎凸基	"
42	N15W33	I層	15.1	15.1	3.0	0.6	無茎凹基	"
43	N36W18	"	20.1	14.1	3.5	0.8	有茎凸基	"
44	N30W15	II層	23.6	17.0	4.4	1.1	"	頁岩
45	N54W 6	IV層	20.8	19.1	5.9	1.2	無茎凹基	"

ニ) 石匙型石器 (第51図14・15)

所謂石匙では勿く、近似した形態を有し、台形状低辺部が刀部となっている物で、2点のみである。

3. 石製品

1) 石劍・石刀 (第54図2~6)

全て破片であるが、両刃の劍様のものと、片刃の刀様のものがある。石劍・石刀とも粘板岩製のものが最も多い。加工し易い粘板岩製のものは、形もていねいに整えられ、良く研磨されている。石劍把部破片は、把頭が作出されており、把部と刀部を区画している。把頭・鍔には羽状の線刻が施されており、優品である。石刀破片は前後を欠いているが、平らで幅広い棟と丸まった刃をもつ直刀形のものである。また縁泥片岩製のものは研磨不純であるので、簡単な劍形を呈するものである。

2) 石棒

明らかに石棒とすることが出来るものは1点のみである。如実に形状を模した陽器形で、殆んどデフォルメされていない。形状としては真直ぐでなく、僅かに彎曲している。白色を呈する輝石安山岩製で、全長約25cmをはかる。

3) 石冠 (第55図1~3)

合計3点出土している。1点は通常の冠形であり、他の2点は楔形のものである。

冠形のものは、底部が舟底状に稍凹み、頂部は偏平で、多孔質の安山岩製である。

楔形のものは、1点が粘板岩でつくられており、二面に「X」字を二つ重ねたような線刻文様をもち、全面に研磨痕が明瞭に残る。稍ふくらんだ楔形を呈する。他の1点もほぼ同形であるが、二面に「カスガイ」を上向きにしたような文様を有する。赤味がかった灰褐色の安山岩製である。

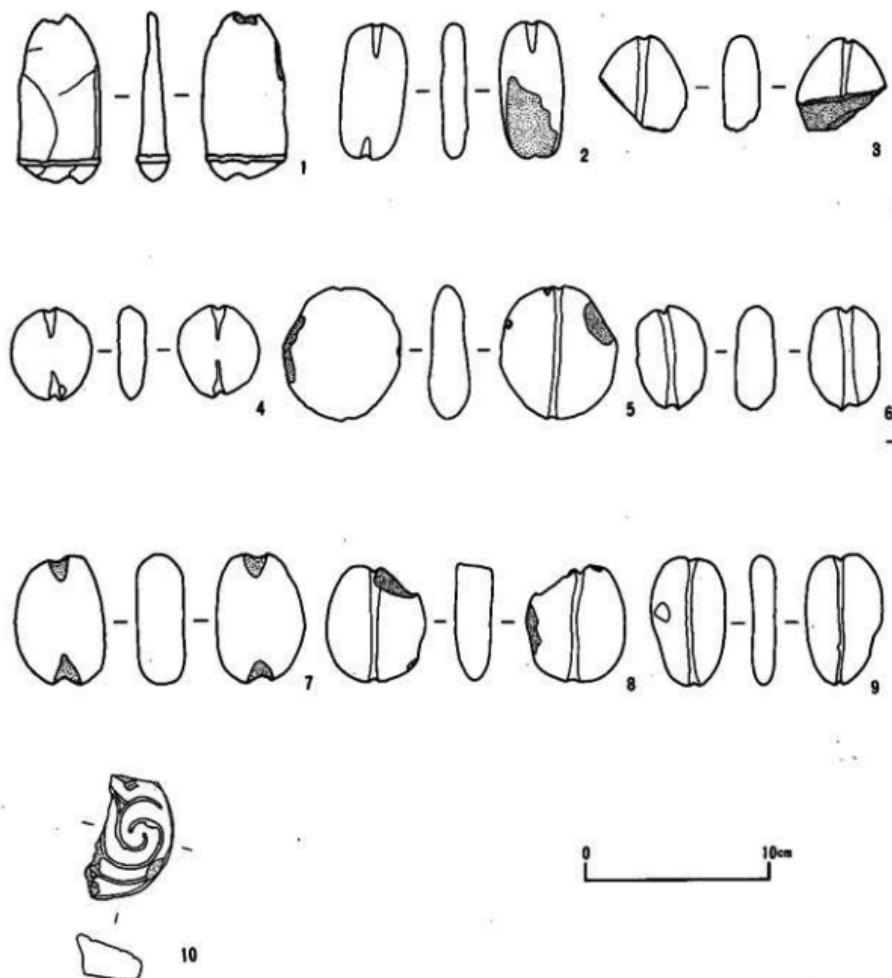
4) 石錘 (第53図1~9)

楕円形ないし円形の礫石錘で、偏平な河原石を使用している。形態としては、両端を凹ませたもの、凹みから凹線が出ているが両端を連結していないもの、一面に凹線があるもの、二面に凹線があるものの4形態がある。浮子の出土と合せて、依田川に於ける漁撈の様子をうかがえる資料である。

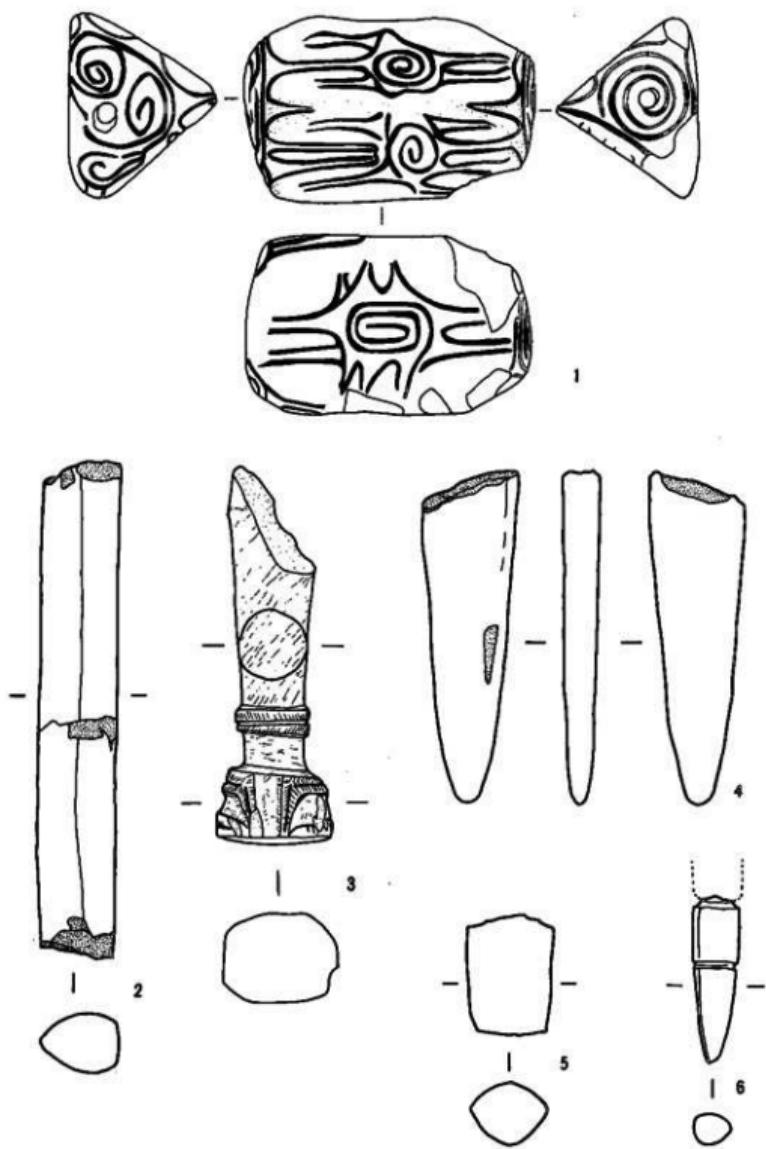
5) 浮子

軽石製浮子が出土した。摺り削って形をつくっているものが多いが、欠損しているため全容

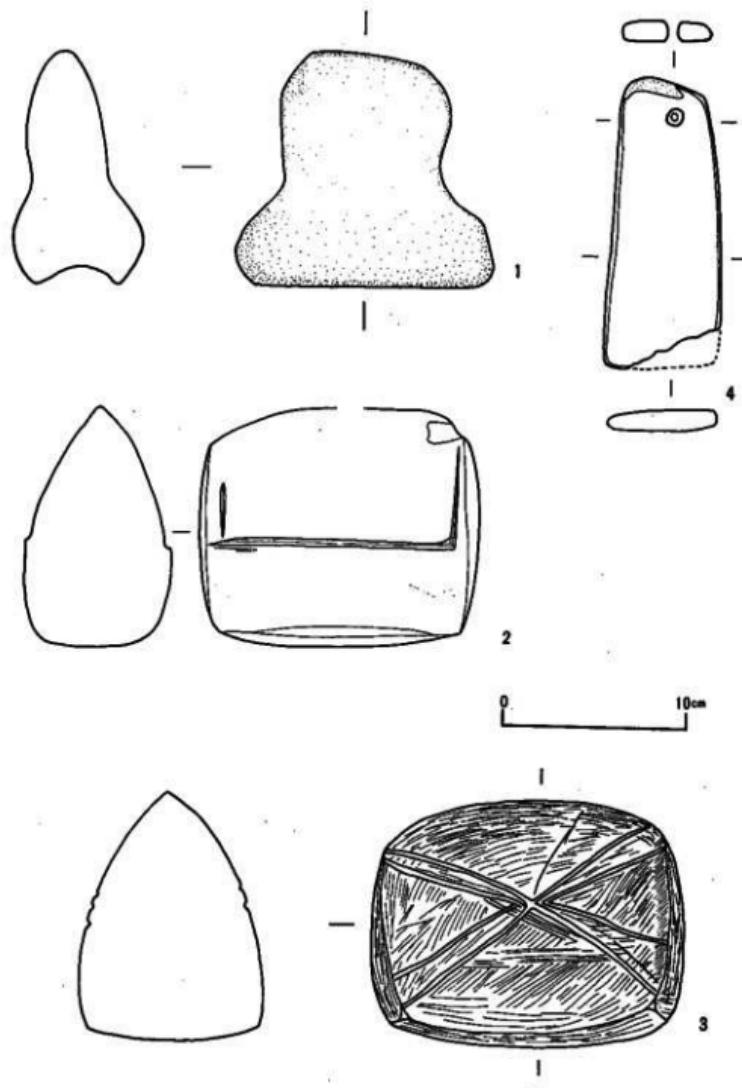
は知り得ない。また、楕円形のものの両端に凹みをつけた石錘状のものもある。黒灰色の軽石によってつくられている。



第50図 石錘及び土版



第51図 三角墳土製品及び石劍



第52図 石冠及び玉ベラ

4. 土製品

1) 土製耳飾 (第5表、第53~56図)

1.

検出した土製耳飾の総数は、完形、破片を含めて、295箇を数える。この数の内には可能な限り接合復原を試みたが、不可能なために、同一個体になるかも知れないものも含まれている。この内完形品は寡少にして全体の29%にすぎないばかりか、形態による偏差が顕著である。またこれらの内明確に遺構と伴出したものは僅かに数点のみで、単独の出土であり、対形態の出土ではない。したがって、既に知られている如く土製耳飾の機能は対で満される為、遺構に単独伴出する土製耳飾を俄かに遺構の性格・時期に同定することはできない。さらに入土層位による分類も、編年の主資料たる土器自体が混在と攪乱により層位的把握が困難である為、不可能である。よってここでは、形状による分類を主とし、文様の有無、文種の種類による分類を副としておおまかな分類をして置きたい。もとより、その分類は充分ではなく、さらに断面形状、胎土による分類も試したかったが、時間の都合上、残念ながら手が及ばなかった。

さて、これらの土製耳飾を胎土、焼成、製作手法の観点より概観すれば、胎土は、小形で手の込んだ細工をするものが在るにもかかわらず、細石粒を多量に含む物が過半以上である。しかし、磨耗の進行していない物を観察すると、表面は丁寧に調整・研磨されている為、あるいは化粧粘土による表面調整がなされたものとも思われる。このことは、文様が施される場合、必ず片面を中心としてなされ、表面と裏面の明確な意識的区分がなされることから類推が許されるだろう。さらに裏面と表面の径を比すると、稍表面の径の方が優越するものが通常である。また極少数であるが水洗しを施した様な精選された胎土の物もあり、これらには精緻な文様が施文されるケースが多い。(一覧表中、記載事項の無きものは前者のタイプの胎土で、精選されているものののみ記述をした。)

さらに、表面を顔料、漆をもって塗彩した痕跡を残すものも少数ながら認められるが、I類、II類は本来的には塗彩されることが多かったのかも知れない。顔料については不明で、「朱」と記載したが「紅」であるかも知れない。

なお、完形欄に○印の付してあるもの以外は全て破片であり、したがって径は図上復原による推定径であることを断ておく。

I類…環形を呈するものをこの類とする。全体の約55%を占める。文様の有無・文様の形容・ブリッジの有無により4種に細別する。文様施文は、全て表面側になされるが、表面ばかりでなく環内側あるいは口外唇部にまでなされるものがある為、断面形状による細分が可能と思われるが一括した。無文類は有文類の部分の破片の可能性もあり、無文のみで存在する物も予知は可能であるが判別はできない。ブリッジを有するもの以外は、径が厚みの3倍を超えるものが約58%あり、概して中型・大型品が多く、ブリッジを有す

るものは中型品が多い傾向が在る。

a種：彫り込み文（主として三叉文風乃至は雲形文風）を有するものをこの種とする。表面は研磨され黒色を呈するものが多い。断面形状によりさらに分類が可能である。（破片であるため次のb種に入るものがあるかも知れない。）

b種：a種の文様に加えて、環内側突出部あるいは口唇部に他の文様が組み合されるもの。a種と同様細分の可能性がある。

c種：a種・b種の文様以外のものをこの種とする。破片である為、b種に含まれるものがあるかも知れない。a種・b種同様に細分が可能である。文様を引き立たせる為か朱乃至は漆を施したものの割合が多い。

d種：ブリッジを有するものをこの種とする。中型品が主である。

e種：無文のものをこの種とする。破片から推定した径である為、稍不正確であるが、小型・中型・大型品がそれぞれ存在する。断面形状による分類が可能である。

II類…白形を呈し、中央孔を有し、多少なりとも断面形状がH字状を呈するものをこの類とする。

全体量の約10%を占める。I類に比し形状的特色から完形品が多い。胎土を精選したものは無いが、文様を施す表面及び無文のものでも表面は意識的に丁寧に調整される傾向がある。有文類と無文類に大別されるが、概して小型・中型品に限られる。小孔は2点を除いて1mm～8mmに限定される。

a種：有文のもの。（刻目文・列点文・線刻文・彫り込み文等）概して小型品であり、径対厚みは2倍を越えない。

b種：無文のもの。概して、小型品であるが、No.1～No.11までは径対厚みが2倍を越えず、No.12～No.17は2倍以上となり、あるいは断面形状の観察により細分を要するのかも知れない。

III類：白形を呈するが、中央孔無く、概ね断面形状がH字状を呈する物をこの類とする。

全体量の約14%を占める。有文類と無文類に大別される。概して中型・大型品に限定される。

a種：有文のもの。同心円文・花弁文・弧線文・沈線文・刻目文等が施文される。典型的なのはNo.1～No.6で大型品に限定される。

b種：無文のもの。径対厚みが2倍を越える中型品が典型である。断面形状による細分が可能かも知れない。

IV類…白形を呈するが、断面形状がH字状を呈する程の表裏面の深い凹みが無く、浅い凹みを有するか、裏面のみ抉り込まれているものをこの類とする。

全体量の約12%を占め、完形品が多い傾向を示す。径対厚みは全て2:1以下であり、小型・中型品に限定される。III類との帰属が曖昧なものがあるが、文様の有無により2

種に細分される。

a種：有文のもの。列点文・刻目文・沈線文が施される。断面形状による細分が可能かも知れない。

b種：無文のもの。断面形状による細分が可能かも知れない。

V類：側面中央部が張り、和太鼓型を呈するものをこの類とする。

全体量の5%を占め、全て完形品であるが、1点を除いて径が2cmを越えない小型品に限定される。文様を有するものは唯一点であり、概して不細作であるが、中央孔の有無により2種に分類される。

a種：中央孔を有するもの。中央孔の径は0.2~0.8に限定され、径対厚みの比は1か乃至は厚みが稍大なる形状を呈す。文様を有するものはこの種に唯一点在るが、異質の感がある。

b種：中央孔の無いもの。径対厚みの比は厚みの大なるものが多い。全て無文である。

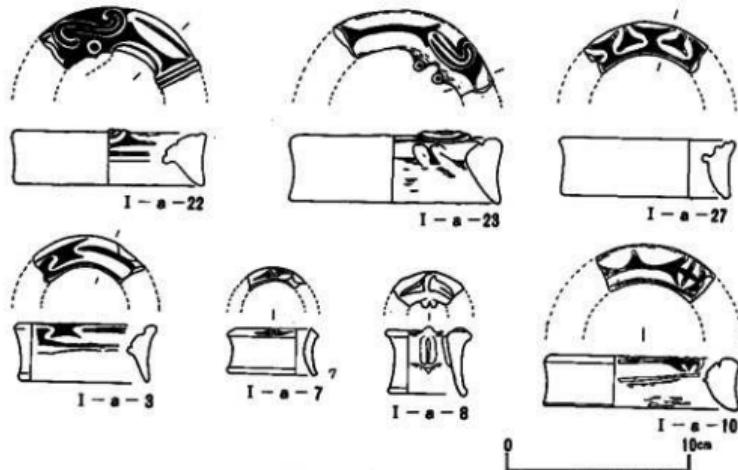
VI類…表面が異さら意識的に肥大され、カフスボタン状を呈するものをこの類とする。(径は表面の径を計測した。) 全体量の3%弱を占め、中型・小型品に限定される。形状的には側面が内側する傾向を示す。表面文様の有無により2種に細分される。

a種：有文のもの。

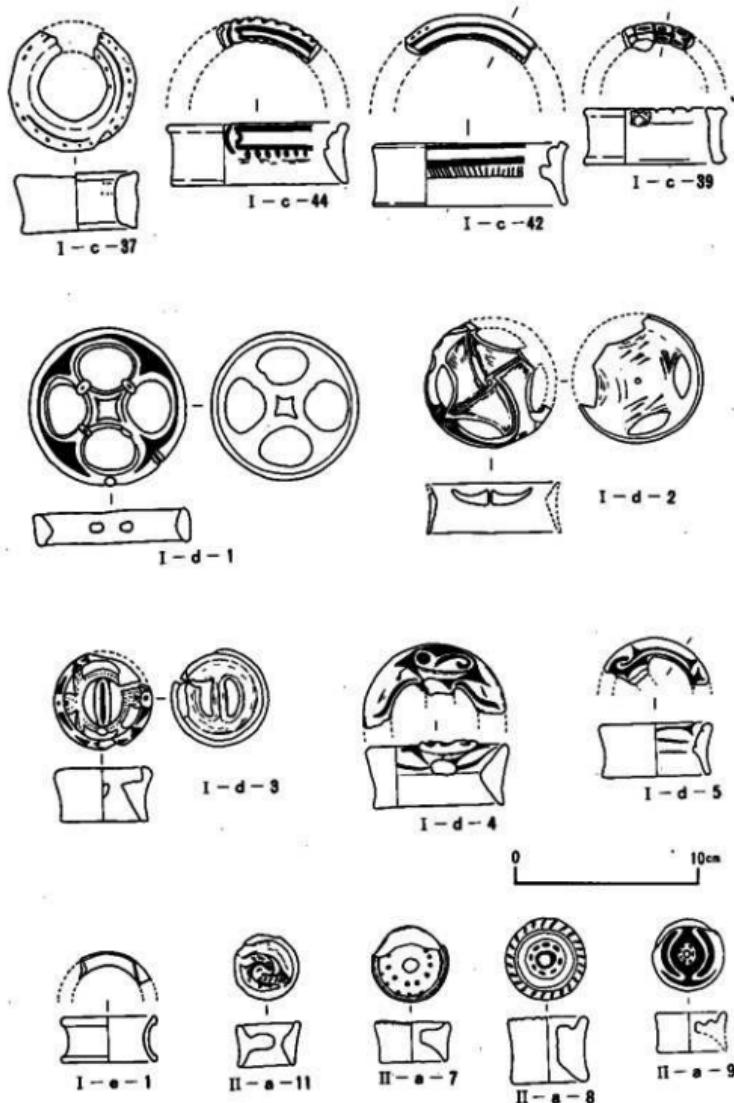
b種：無文のもの。

VII類：その他の物をこの類とする。

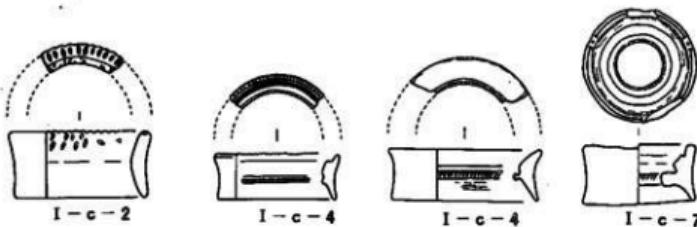
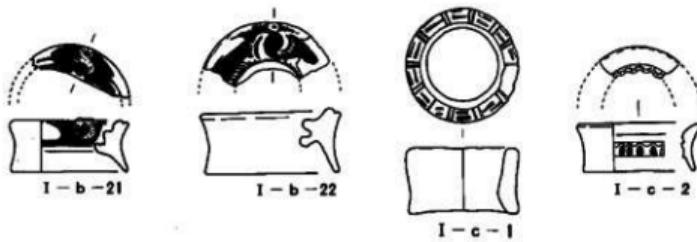
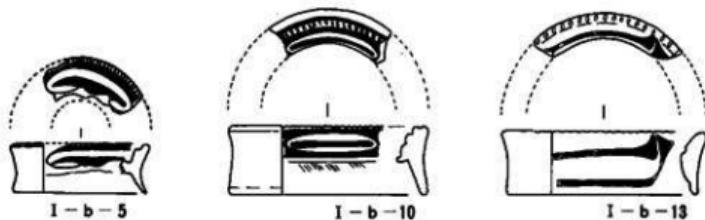
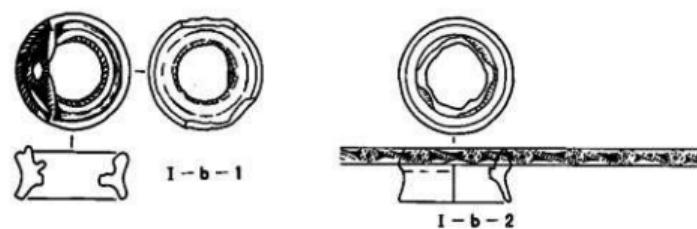
No.1~No.3は柱状を呈し、No.4~5は鼓型である。



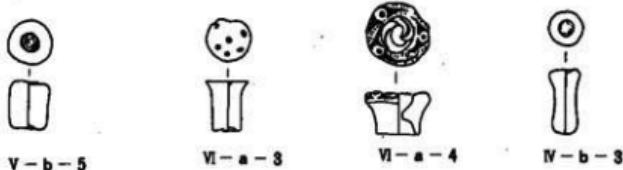
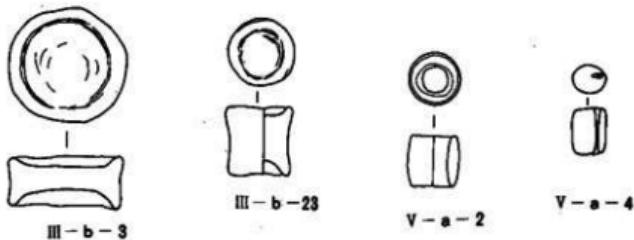
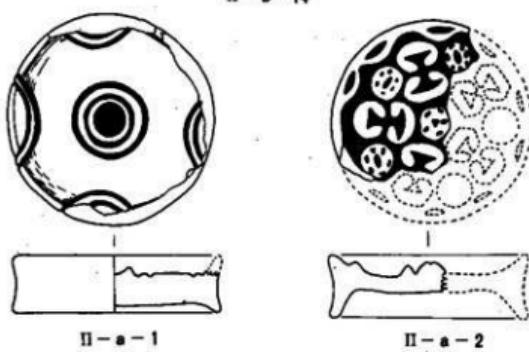
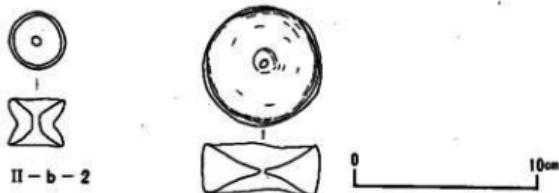
第53図 土製耳飾り



第54図 土製耳飾り



第55図 土製耳飾り



第56図 土製耳飾り

第5表 土製耳飾 計測観察表 計測・観察表

I類a種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	S 6 W51	III層	5.0	2.1		三叉文風乃至雲形文風彫り込み文			790705
2	N21W6	I層	6.0	2.2		"			790404
3	N54W18	III層下部	5.0	2.0		"			790512
4	N54W48	IV層	4.0	1.9		"			790704
5	N21W39	III層	5.2	2.3		"			790529
6	N42W36	IV層	6.6	2.3		"		○	790622
7	N 6 W 3	II層	3.2	2.1		"		○	790421
8	N48W18	トレンチ	3.0	2.3		彫り込み文		○	790628
9	N60W3	IV層	5.0	2.3		三叉文風乃至雲形文風彫り込み文			790705
10	N15W30	IV層	7.0	1.8		"			790515
11	N51W30	III層	5.4	2.3		"			790517
12	N57W9	IV層	5.2	1.8		彫り込み文			790702
13	N30E3	I層	4.8	2.5		"			790317
14	N63W9	III層	6.0	2.2		"			790520
15	N24W51	III層	6.0	2.2		"			790606
16	S 18W 9	I層	5.0	2.0		"			790317
17	N 6 E 15	I層	5.4	2.0		"			790314
18	N63W3	IV層	3.4	1.6		"			790619
19	N42W24	II層	6.4	2.2		"			790502
20	Z		5.8	2.0		"			790317
21	Z		3.0	1.6		"			790527
22	N 3 W 18	II層	6.8	1.8		三叉文風乃至雲形文風彫り込み文		○	790422
23	N51W9	II層	7.4	2.3		"		○	790510
24	N 6 E 3	I層	8.0	2.3		"		○	790312
25	S 12W12	II層	6.2	2.0		"			790809
26	N 12W15	IV層	5.0	2.0		"		○	790703
27	S 18W 6	II層	6.2	1.9		"			790410
28	S 15W15	I層	7.0	2.0		"			790323
29	N33W27	III層	7.2	2.1		"			790513
30	N42W39	IV層	7.2	2.1		"			790513
31	N51W15	II層	7.0	2.2		"			790505
32	N30W30	III層	5.4	2.0		彫り込み文			790520
33	N39W9	III層	6.8	1.9		"			790531
34	N48W18		6.8	1.9		"			
35	N 9 W 27	II層	6.0	2.0		"			790421
36	N48W24	IV層	8.0	2.4		"			790614
37	N48W24	III層	7.4	2.4		"			790509
38	S 3 W 12	I層	7.4	1.9		"			790313
39	N66W6	III層	6.4	1.8		"			790511
40	N30W30	III層	5.2	2.0		"			790520
41	S 9 W 9	II層	3.6	-		"			790418
42	S 15W15		4.6	-		"			
43	N54W12		-	-		"			
44	S 3 W 57		-	-		"			
45	S 6 E 6	I層	7.6	2.0		"			790319

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	粘土の 状態	朱の 有無	出土期日
46	N42W36	III層	7.8	2.0		"			790612
47	S 9 W 9	II層	7.4	2.3		"			790417
48	N48W24	IV層	6.6	2.4		"			790614
49	N48W9	III層	5.0	2.1		"			790512

I類b種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	粘土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N 6 E 3	II層	4.0	2.2	○	彫り込み文、縦刻文			790312
2	S 15W 9	II層	4.0	1.8		" , 刻目文	精選		790509
3	N 54W 15	IV層	5.4	2.1		" , "		○	790611
4	N 9 W 3	II層	4.2	1.9		" , "			790312
5	S 3 W 9	III層	5.0	1.7		" , "			790703
6	N 15W 51	III層	1.7	1.9		" , "	精選		790607
7	N 60W 9	IV層	7.6	2.2		" , "			790615
8	N 30W 57	II層	7.0	2.0		" , "			790329
9	N 45W 30	IV層	7.2	2.2		" , "			790705
10	N 6 W 3	II層	7.0	2.4		" , "			790421
11	S 12W 12	II層	8.0	2.0		" , "		○	790727
12	N 9 W 57		8.4	1.8		" , "			
13	S 9 W 48	III層	7.2	2.2		" , "			790612
14	S 3 W 9	II層	7.4	2.0		" , "			790422
15	Z		6.0	2.0		" , "			790713
16	Z		7.4	2.2		" , 列点文			790425
17	N 15W 15	II, III層	7.0	2.6		" , 刻目文			790327
18	N 54W 15	IV層	6.0	1.8		" , "			790601
19	N 54W 18	IV層	5.4	2.0		" , "	精選		790704
20	N 54W 12	III層	7.6	2.0		" , "			790503
21	N 60W 6	IV層	4.2	1.8		" , "			780819
22	N 24W 27	III層	5.0	2.1		" , "			790328
23	N 33W 15	IV層	7.2	2.3		" , "			790321

I類c種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	粘土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N 33E 6	I層	4.0	2.4		刻目文			790326
2	SKPO4内 埋甕内		5.0	2.3		"			790703
3	S 12W 12	II層	4.4	1.7		"	精選		790809
4	S 12W 12	III層	4.4	1.6		"	精選	○	790809
5	S 9 W 6	II層	4.8	1.9		"	精選		790314
6	S 9 W 48		4.2	1.9		"			
7	N 6 W 6	I層	5.4	1.8		"			790321
8	N 27E 6	I層	7.0	-		"			790403
9	N 12W 48	III層	4.0	2.0		沈線文、縦刻文		○	790532
10	N 33?	I層	4.8	2.3		"			790404
11	N 45W 21	III層	5.4	2.0		"			790515
12	S 18W 18	III層	4.3	1.9		" , 縦刻文			790623

No.	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
13	N 6 W33	II層	6.0	2.0	"				790422
14	N51W9	IV層	7.8	2.1	"				790611
15	N39W18	IV層	8.6	1.9	"				790704
16	S 9 W12	I層	6.6	1.9	"				790316
17	N45W12	IV層	5.8	1.9	"				790704
18	N45W9	IV層	4.8	1.3	"		黒漆		790506
19	N 3 W60	III層	8.4	1.6	"				790610
20	N48W24	III層	7.8	2.0	"				790504
21	N 3 W3	III層	6.6	2.0	"				790419
22	N 6 W3	II層	5.0	1.6	"		○		790513
23	S 15W21	II層	6.0	2.0	"				790428
24	N54W15	III層	7.4	1.6	"				790519
25	Z		7.6	2.1	"		○		790714
26	SKPO6内	埋甕内	4.4	1.7	線刻文				790618
27	N60W3	III層	4.6	1.7	沈線文、刻目文				790508
28	S 3 E 3	II層	4.4	1.5	線刻文、刻目文				790417
29	N27W9	I層	5.4	1.9	"				790322
30	N36W6	III層	6.4	2.5	沈線文				790515
31	N 9 W27	II層	4.4	1.9	線刻文、裏面 点刻文				790320
32	S 12W42	III層	7.4	2.4	"				790529
33	S 3W9	I層	6.0	2.0	"				790324
34	N51W12	II層	5.0	1.6	"				790504
35	S 15W33	II層	4.2	1.7	"		○		790502
36	N12W9	II層	-	-	"				790313
37	N45W27	IV層	4.4	2.0	列点文				790614
38	N48W15	II層	7.0	2.5	" , 線刻文		○		790510
39	N33E 3	I層	5.0	1.9	沈線文、列点文				790404
40	S 3 W9	II層	5.4	1.9	" "				790418
41	S 15W15	I層	5.2	2.2	刻目文 沈線文				790423
42	N 6 W3	II層	6.8	2.2	沈線文、列点文 刻目文		○		790422
43	S 15W15	IV層	7.4	2.1	沈線文,		○		790622
44	N 6 W6	II層	6.4	2.1	沈線文、点刻文				790504
45	N51W12	II層	7.0	1.6	" "				790504
46	N57W3	III層	5.4	1.8	" , 刻目文		薄手		790511
47	S 6 E 6	I層	5.8	2.0	"				790318
48	N54W18	III層	4.2	1.7	" "		薄手		790511
49	N51W6	IV層下部	5.2	2.2	沈線文、刻目文				790604
50	N30W30	埋甕内	4.4	2.4	刻目文		○		790618
51	N 3 W60	III層	4.8	-	沈線文				790610
52	S 15W12	I層	4.8	-	"				790315
53	Z		5.7	-					790424

I類d種

No.	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N51W15	IV層	5.5	1.2	○	十文字ブリッジ、三叉文風彫り込み			790704
2	N 6 W3	II層	4.7	1.8	○	" "	精選	○	790422

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
3	N48W24	IV層	3.4	1.8	○	三叉文乃至雲形文風彫り込み			790614
4	S 6 W51	III層	5.0	7.7		"			790705
5	S 12 W12	II層	4.0	1.8		"		○	790809

I類e種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	S 12 W12	II層	3.4	1.6			精選	○	790809
2	N 51 W12		4.0	2.4					
3	S 3 E 6	II層	3.6	2.1					790610
4	N 54 W18	III層	6.2	2.6					790511
5	N 12 W36	II層	7.0	2.4				○	790423
6	N 51 W3	IV層	4.8	2.1					790509
7	N 9 W30	II層	5.4	2.2					790423
8	SxaSK08	集石土被内	4.6	2.3					790423
9	N 6 W3		6.0	2.3					790706
10	N 27 E 6	表土	4.0	2.1					790403
11	S 18 W9	II層	5.6	2.0					790403
12	S 18 W27	II層	4.2	1.8					790429
13	S 15 W12	I層	4.6	2.3					790316
14	N 45 W30	III層	6.6	2.3					790521
15	S 3 W9	II層	4.8	1.8					790418
16	S 3 W39	III層	3.8	2.7					790520
17	N 15 E 33	I層	3.2	2.0					790312
18	N 30 W18	II層	5.0	2.4					790502
19	N 9 E 33	II層	5.8	2.3					790312
20	S 12 W12	II層	3.4	1.9					790409
21	N 6 W3	II層	3.4	1.4				○	790421
22	Z		6.0	2.6					790424
23	N 3 W21		—	—					790321
24	N 9 E 33	I層	8.0	2.1					790311
25	N 42 W30	IV層	7.2	2.4					790513
26	S 3 W9		7.6	2.2					790703
27	S 3 W9	II層	8.4	2.4					790418
28	N 6 W3	II層	3.4	1.4				○	790411
29	S 12 W15	II層	6.0	2.0					790511
30	S 12 W12	II層	9.0	2.3		内面剥離			790811
31	S 6 E 6	I層	5.8	1.9					790318
32	N 36 W30	III層	6.8	2.2					790513
33	N 36 W30	III層	6.8	2.2					790513
	N 54 W9	IV層	6.6	1.9					790507

II類a種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N 36 W12	II層	1.9	1.4	○	φ 0.2 割目文			790324
2	N 51 W33	III層	1.4	1.4	○	φ 0.3 "			790515

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
3	S 6 W18	I層	2.1	1.8	○	φ 0.7 列点文			790321
4	S 12 W9	II層	1.8	1.4	○	φ 0.3 〃			790407
5	Z		2.7	2.1	○	φ 1.5 〃			790429
6	N 60 W6	III層	2.4	1.4		φ 0.4 〃			790528
7	S 18 W9	IV層	2.8	1.5	?	列点文縦刻文			790703
8	S 12 W12	I層下部	2.8	2.3	?	列点文、刻目文			790408
9	N 9 W51	II層	2.7	1.4	?	彫り込み文、列点文			790530
10	S 18 W15	I層	2.3	1.5	?	三叉文風			790317
11	N 15 W33	II層	2.2	1.5	?	〃			790314
12	N 9 W57	II層	2.7	—	φ 0.3	彫り込み文			790530

II類b種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N 42 W24	II層	1.3	1.4	○	φ 0.3			790502
2	N 3 E 3	集石遺構内	2.0	1.6	○	φ 0.3		○	790708
3	S 12 W12	II層	2.4	1.4	○	φ 0.8			790809
4	N 21 W30	I層	2.4	1.6	○	φ 0.6			790315
5	N 42 W39		1.7	1.3	○	φ 0.4			790422
6	Z		1.5	0.9	○	φ 0.4			
7	N 6 E 6	I層	1.6	1.2	○	φ 0.2			790320
8	N 51 W3	III層	2.0	1.6	○	φ 0.2			790611
9	N 15 W 9	I層	2.3	1.4	○	φ 0.3			790322
10	N 18 E 30	I層	3.8	2.0		φ 0.7			790311
11	S 12 W12	II層	1.8	1.5		φ 0.2			790802
	Z		1.8	1.8		φ 0.3			790424
12	N 54 W15	II層	2.8	1.3	○	φ 0.5			790505
13	S 6 E 6	I層	4.4	1.4	○	φ 0.3			790318
14	N 51 W27	IV層	3.8	1.1	○	φ 0.4			790524
15	N 51 W27	IV層	4.0	1.7	○	φ 0.4			790524
16	N 48 W24	IV層	3.4	1.4		φ 0.5			790614
17	N 51 W30	IV層	4.0	1.5		φ 1.2			790524
18	Z		1.4	1.3	○	φ 0.5			790612

III類a種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N 21 W 9	IV層	7.3	2.0	○	同心円文、弧文			790415
2	N 48 W18	III層	7.0	2.2		花弁文風			790509
3	N 9 W20		6.4	2.6		弧線文			790619
4	N 51 W30	III層	6.5	2.3		沈線文、刻目文			790510
5	N 15 E 21	I層	7.2	2.4	〃	〃			○
6	N 18 W3	II層	7.2	4.8	○	列点文			790425
7	N 21 E 15	I層	2.8	1.3		刻目文			790404
8	N 36, W 6	III層	2.0	1.3		列点文、〃			790326
9	S 12, W 12	II層	2.1	2.0		沈線文			○
10	S 12 W15	III層	3.1	1.8		刻目文			790428

III類 b種

No.	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N42W39	IV層	4.2	2.0	○				790705
2	N54W9	IV層	4.0	1.8	○				790507
3	N33W30	IV層	4.0		○				790515
4	N33W30	IV層	6.2	2.1	○				790705
5	SB07		4.4	2.2	○				790703
6	S6W9	II層	4.8	1.2	○				790418
7	N27E33	I層	3.6	1.7	○				790311
8	Z		2.0	1.0	○				790604
9	S12W9	-	3.3	2.9	○				790405
10	N48W21	IV層	4.9	2.0					790515
11	P190		4.6	2.2					790702
12	N45W36	IV層	4.4	2.0					790625
13	S12W12	II層	5.6	2.2					790809
13	S12W12	II層	5.6	2.2					790809
14	S15W12	I層	4.0	1.5					790316
15	S42W36	III層	4.5	2.1	○				790601
16	N12W51	III層	(5.0)	(2.0)					790530
17	N66W6	II層	2.7	1.7	○				790511
18	S3W9	II層	3.5	1.8	○				790422
19	N48W30	II層	3.7	2.8	○				790510
20	N51W15	II層	1.8	1.2	○				790505
21	S3W12	I層	2.0	1.4					790313
22	N24W24	II層	2.4	2.1					790421
23	N12W18	トレ内	2.3	2.3	○				790623
24	N54W24	IV層	3.4	2.0					790524
25	N45W15	IV層	2.3	2.6	○				790611
26	N12W51	IV層	(5.0)	(2.0)					790608
27	S15W3	II層	(2.4)	(4.2)					790409
28	N39W12	III層	3.0	2.4					790502
29	N45W12	IV層	1.6	1.1					790703
30	N36W12	II層	1.2	1.5	○				790324
31	Z		3.4	2.6	○				790528

IV類 a種

No.	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N51W15	II層	1.4	1.2	○	列点文			790505
2	S21W3	II層	3.6	2.8	○	"			790427
3	S9W45	IV層	3.2	1.9	○	"			790616
4	N48W24	III層	2.3	1.6	○	"			790509
5	S12W12	II層	1.9	1.6	○	沈線円文、(裏面抉り込み)			790409
6	N54W12	IV層	1.0	1.5	○	"			790605
7	N54W12	IV層	1.7	1.3	○	刻目文			790507
8	Z		2.3	1.7	○	"			790424
9	N6W6	I層	1.2	1.5	○	沈線円文、刻目文			790314
10	S12W9	II層	1.0	1.3	○	" "			790315

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
11	N 3 E 3		1.0	1.3	○	彫り込み文 (裏面抉り込み)			790419
12	N54W12		1.0	1.5		刻目文			790605
13	S 12W 9	II層	2.4	1.6		列点文、刻目文 (表裏)			790315

IV類b種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N54W27		2.2	1.9	○				
2	N48W18	IV層	1.7	1.3	○				790327
3	N12W3	II層	2.4	2.4	○				790328
4	N45W30	III層	3.4	2.0	○				790521
5	N42W36	IV層	2.1	1.6					790520
6	N42W36	II層	2.6	2.3	○				790513
7	N 3 E 3	II層	2.9	2.6					790510
8	N54W27	III層	2.2	2.0	○				790519
9	N18W42	III層	1.3	1.2	○				790620
10	N33W 9	II層	2.5	2.1					790322
11	S 12W12	II層	4.2	2.2					790808
12	Z		1.5	1.4	○				790424
13	N 6 W24	II層	2.8	1.6	○				790314
14	N36W33	IV層	5.1	3.1	○				790531
15	S 12W51		3.5	2.1					
16	S 15W15	IV層	2.0	1.8					790622
17	N 6 W15	I層	2.8	1.9					790415
18	N21E12	I層	2.2	1.6					790316
19	S 12W 9	II層	1.4	2.0	○				790408
20	N45W33	I層	2.6	2.7	○				790407
21	N45W36	IV層	2.1	2.4					790625

V類a種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N 6 E 6	I層	1.9	1.9	○	ブリッジ状に2孔あり 沈線文			790312
2	N30E 6	I層	1.7	1.7	○	φ 0.8			790403
3	S 3 E 9	I層	1.4	1.9	○	φ 0.5			790318
4	S 9 W 9	III層	1.1	1.6	○	φ 0.2			790417
5	N42W39	IV層	1.7	1.3	○	φ 0.4			790622
6	N24W51	IV層	1.0	1.4	○	φ 0.1			790621
7	N42W18	II層	1.0	1.7	○	φ 0.1			790326

V類b種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N63W12	III層	1.8	2.1	○				790520
2	S 6 W57	IV層	1.7	2.3	○				790618
3	N54W9	IV層	1.1	2.0	○				790507

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
4	N12W46	III層	1.4	2.1	○				790602
5	N9E3	I層	1.7	1.7	○				790319
6	Z		1.4	1.2	○				790604
7	N12W51	IV層	2.3	2.3	○	表面凹む			790608
8	Z		0.5	1.8	○				790811

VI類a種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N54W6	IV層	3.5	3.1	○	列点文			790515
2	N6W9	I層	2.7	2.6	○	"			790319
3	N24W51	IV層	1.6	1.7	○	"			790621
4	S18W15	I層	2.1	1.4	○	彫り込み文、刻目文 孔あり			790317
5	N60W9	IV層	-	-		中心孔あり			790615

VI類b種

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N45W24	IV層	2.9	2.3	○				790614
2	Z		2.0	1.9	○				790714
3	Z		1.2	2.2	○				790714

VII類

No	出土地点	層位	径 (cm)	厚み (cm)	完形	文様概略	胎土の 状態	朱の 有無	出土期日
1	N60W6	IV層	1.4	1.3	○				790506
2	S3W15	III層	1.3	1.2	○				790409
3	S12W51	IV層	2.1	2.5	○				790618
4	N21E6	II層	2.2	2.1	○				790316
5	N12E3	II層	1.2	1.2	○	沈線同心円文(表裏)			790312

2) 土製円板 (第57図1~56)

土製円板は総数285点と多量に出土しており、そのうち完形品が211点である。平面形態としては円形のものが最も多く、そのほか橢円形・隅丸長方形のものなどが少數みられる。また、有孔のものが3点・穿孔途中のものが2点含まれている。

製作手法により2種類に分類した。

A:側面をきれいに研磨し形態をつくるもの。

B:打ち欠いて形態をつくるもの。

3) 土偶 (第59図1~10)

各部破片合せて40点ほど出土した。腕部・脚部破片が多く、頭部・胴部は少ない。

顔は偏平な顔面に眉や鼻を隆線で簡単に表現し、目や口は申し訳程度に表わされているものが多い。胴部は、乳房の表現されているもの及び妊娠体や大きく腰を張らせたものなど、女性体を示しているものが殆んどである。手先・足先は僅かに曲げることによってそれとわかる程度に非常に簡略化されており、また膝頭を表現しているものもある。肩の部分の刻線による文様や、腰の部分の線刻文様など明らかに着衣を表わすと思われる文様をもつものが存在する。

破片を総合すると、太くガニ股状に内弯する脚と、一度水平に開いておいて肘から先を下に折り曲げる腕及び先に突き出した首に偏平な顔をもつ頭部を備えた全容が推考され、小形のものが圧倒的である。これらの形態は縄文時代後期の土偶に一般的なものだが、中に1点、所謂十字形土偶で前に突き出した頭部をもつものがあるが、中期の様式を残存してはいるが後期のものと考えてよからう。また、形状や文様から晩期土偶も存在すると思われるが、量的に僅少で詳かでない。

胎土に砂粒を含み、橙褐色を呈するものと黒色~黒褐色のものがあり、黒色~黒褐色のものは研磨されているものもある。

4) 三角墻土製品 (第51図1)

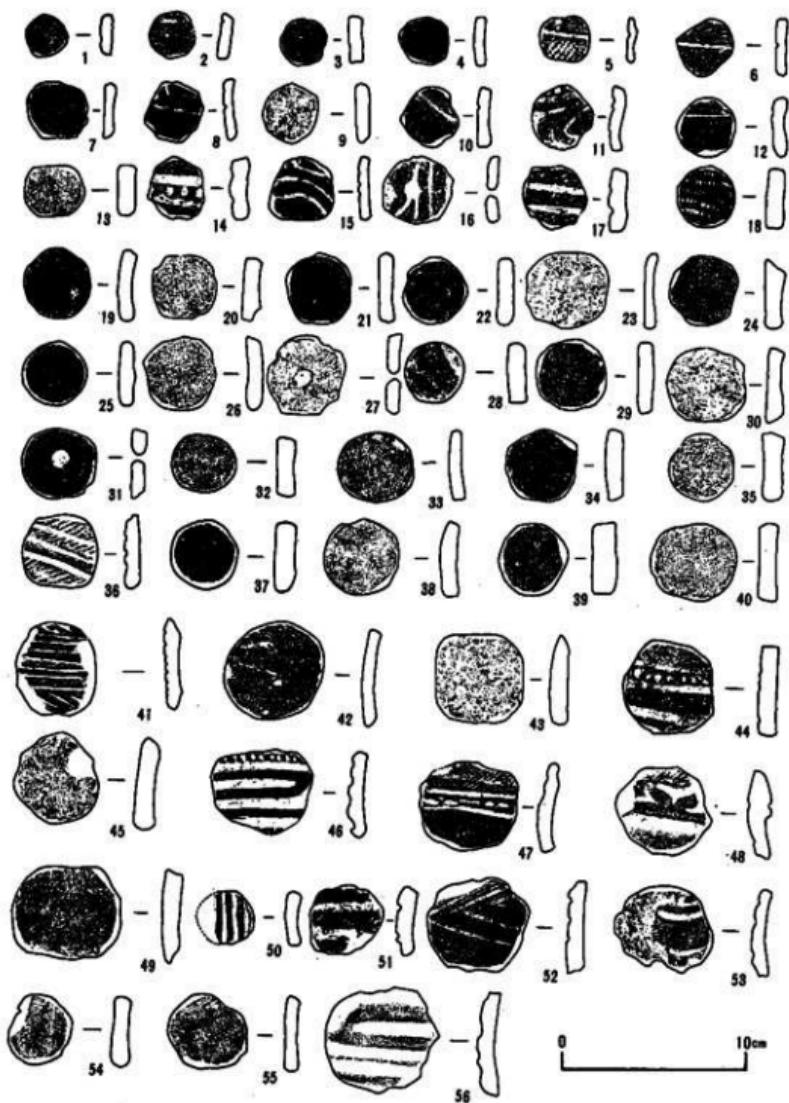
出土状況が明らかでなく、いかなる遺構に伴なっていたものか不詳である。

三角柱状を呈し、断面形状は正三角形でなく、一角が他の二角より稍尖った形である。三面は平滑で、両端二面は少しふくらみ、一孔が貫通している。五面全てに沈線により描かれた文様をもつ。長方形面の三面には、ほぼ中央に渦巻形の文様を配し、そこから長い線が周囲に伸びている。両端二面は孔を中心に矢張り渦巻文を置いている。

5. 装身具 (第58図1~12)

土製勾玉・石製勾玉・白玉・骨角製装身具などがある。出土点数はあまり多くない。

土製勾玉は、「C」字形の太くずんぐりしたものと、「し」の字形の細くすんなりしたものと



第57図 土製円板

第6表 土製円板計測観察表

番号	出土地	押印番号	部位	文様、その他	形態	大きさ	厚さ	重量	種類	残存状態
222	N60W12	1	体部	無文	円 形	22×21	0.7	3	A	完 形
128	N48W12		"	"	方 形	23×22	0.7	3	B	"
5	N12W51	2	"	"	円 形	25×24	0.7	4	A	"
194	Z		"	"	"	21×20	0.6	4	A	"
179	S 6 W60		"	"	橢円形	28×24	0.7	4	B	"
239	N21W27		"	"	円 形	20×20	0.8	4	B	"
6	S 6 W57	3	"	"	"	25×24	0.7	5	A	"
7	S 6 W9	4	"	"	"	26×26	0.5	5	A	"
248	N27W27		"	"	"	26×24	0.6	5	B	"
214	N33E 6	5	"	沈線・縄文	橢円形	26×23	0.5	5	A	"
17	N60W 6	6	"	"	"	31×26	0.6	5	B	"
44	S 3 E 9		"	- 列点文	円 形	29×27	0.8	6	B	"
10	N54W27	7	"	無文	橢円形	33×28	0.6	6	B	"
46	S 18W15		"	沈線・縄文	"	33×28	0.7	6	B	"
9	Z	8	"	"	長方形	30×27	0.5	6	B	"
102	S 18W21		"	無文	円 形	29×26	0.7	7	B	"
122	S 30W36		"	"	"	28×27	0.9	7	A	"
184	Z	9	"	"	"	28×27	0.7	7	B	"
130	Z		"	"	橢円形	31×24	0.6	7	B	"
202	S 6 E 6		"	"	"	32×27	0.6	8	A	"
116	N33W51		"	"	方 形	29×27	0.8	8	B	"
11	S 15W12	10	"	沈線	"	30×29	0.6	8	A	"
1019	N60W 3		"	無文	橢円形	33×28	0.7	8	B	"
1	N57W12	11	"	三叉文・縄文	円 形	32×31	0.6	9	B	"
53	N 6 W45		"	無文	"	29×28	0.9	9	A	"
89	N15W54		"	"	"	27×26	1.2	9	A	"
125	Z		"	"	"	29×29	0.9	9	B	"
191	N 3 E 3		"	"	"	33×33	0.5	9	B	"
232	S 3 W15		"	"	"	24×23	1.0	9	A	"
234	N12W54		"	"	"	31×29	1.0	9	B	"
275	S 6 W57		"	"	"	30×28	0.7	9	A	"
59	N 9 W57		"	"	六角形	35×30	0.6	9	B	"
71	N27W51		"	"	橢円形	31×27	0.7	9	A	"
12	S 6 W 3	12	"	沈線	円 形	31×30	0.8	10	A	"
68	N51W 6		"	無文	"	33×31	0.7	10	B	"
73	S 6 E12		"	"	"	30×27	0.9	10	A	"
90	N27W51		"	"	方 形	32×30	0.7	10	B	"
131	S 3 W12		"	無文	橢円形	35×27	0.8	10	B	"
149	N 9 W 6		"	"	円 形	34×33	0.8	10	B	"
158	N 6 W57		"	"	"	39×37	0.6	10	B	"
51	N42W12	13	"	"	橢円形	32×26	0.9	10	A	"
13	S X b16	14	"	凹線・列点文	円 形	32×30	0.9	11	B	"
103	S 3 W36		"	無文	"	39×37	0.6	11	B	"
156	N36W18		"	"	"	34×33	0.7	11	B	"
177	N24W18		"	"	"	36×36	0.7	11	B	"
190	N42W 9		"	"	"	33×31	0.8	11	B	"
224	N15E 3		"	"	"	28×28	0.9	11	A	"

番号	出土地	標図番号	部位	文様、その他	形態	大きさ	厚さ	重量	種類	残存状態
525	S 3 W54	15	#	沈線	#	33×32	0.7	11	A	#
535	S K P14	16	#	沈線・有孔	楕円形	38×34	0.7	11	A	#
1021	N 6 W30		#	無文	長方形	34×29	0.9	11	A	#
14	N 3 W27	17	#	沈線	円形	35×34	0.8	12	B	#
18	N30W12	18	#	縞文	#	31×30	0.9	12	A	#
19	S 6 W57	19	#	無文	#	36×36	0.8	12	A	#
31	N 9 W57		#	沈線	#	40×39	0.6	12	B	#
77	N39W36	20	#	無文	方形	34×32	0.8	12	A	#
167	N60W 6		#		円形	36×35	0.7	12	B	#
252	N 3 W60		#		#	36×35	0.8	12	B	#
1006	N 9 W54		#		#	40×38	0.5	12	B	#
1022	N30W30		#		#	31×31	1.0	12	B	#
104	S12W51		#		楕円形	40×36	0.7	12	B	#
144	N39W36		#		#	37×28	0.8	12	B	#
160	S 3 W48		#		#	39×32	0.8	12	B	#
263	N45W15		#		#	36×36	0.6	12	B	#
15	S 3 W 6	21	#		円形	36×35	0.8	13	A	#
16	N 9 W45	22	#		#	34×33	0.8	13	A	#
110	N30W48		#		#	41×40	0.7	13	A	#
168	S 6 W24		#		#	33×31	0.9	13	B	#
213	N33W12		#		#	35×34	0.9	13	A	#
1017	N33W48		#		#	35×34	0.7	13	B	#
99	S12W57	23	#		楕円形	43×39	0.6	13	B	#
169	N 9 W57		#	沈線	長方形	38×33	0.8	13	B	#
64	N36W48		#	無文	楕円形	37×30	0.9	14	B	#
22	N39W12	24	#		円形	35×34	0.9	14	A	#
28	N51W27		#	沈線・刺突文	楕円形	42×34	0.6	14	B	#
47	S 3 W12	25	#	無文	円形	34×34	0.9	14	A	#
66	N15W51	26	#		#	38×36	0.6	14	B	#
109	S12W18		#		#	34×32	0.8	14	A	#
215	N36W30	27	#	無文・有孔	#	41×39	0.7	14	B	#
220	N24W30	28	#	無文	#	33×32	1.0	14	A	#
223	N33W42		#		#	36×35	0.9	14	A	#
240	N33E 6		#		#	35×34	0.9	14	B	#
249	N24W48		#		#	38×36	0.8	14	B	#
1020	N45W30		#		#	33×22	1.0	14	A	#
153	N24W24		#	条痕	楕円形	43×35	0.7	14	B	#
166	N5W21		#	無文	長方形	39×33	0.8	14	A	#
178	S 6 W57		#		方形	36×34	0.9	14	B	#
1026	N48W12		#		楕円形	38×31	0.8	14	B	#
21	N45W24	29	#		円形	37×35	0.8	15	A	#
61	N 9 E 3		#		長方形	37×32	0.9	15	A	#
100	S18W12	30	#		円形	41×39	0.7	15	B	#
189	N42W39		#		#	34×33	0.8	15	B	#
212	N45W33		#	凹線・列点文	#	35×34	0.8	15	B	#
242	N27W42		#	無文	#	38×37	0.8	15	B	#
536	S 3 W12	31	#	無文・有孔	#	39×37	0.7	15	A	#
26	N36W18		口縁部	沈線	楕円形	40×35	0.8	15	B	#
146	N24W18		体部	縞文	#	37×33	0.8	15	B	#
171	S 9 W45		#	無文	#	32×29	1.2	15	A	#

番号	出土地	博団番号	部位	文様、その他	形態	大きさ	厚さ	重量	種類	残存状態
233	N53W27	32	"	"	"	36×32	0.9	15	A	"
238	N48W36	33	"	"	"	40×36	0.8	15	A	"
255	N33W36		"	"	"	38×33	0.8	15	A	"
262	S 6 W57		"	"	"	40×35	0.8	15	B	"
1023	S 18W18		"	"	"	43×37	0.8	15	B	"
20	N27E15		"	"	円 形	34×33	1.0	16	A	"
24	N 3 W60	34	"	"	"	38×37	0.9	16	B	"
55	N36W48		"	"	"	40×38	0.7	16	B	"
86	S 18W 6		"	"	"	35×33	1.0	16	B	"
136	N 6 E 3		"	"	"	35×34	1.2	16	B	"
218	N36W12		"	"	"	37×34	1.0	16	B	"
237	N15W24		"	"	"	37×35	0.9	16	B	"
157	N57W18		"	"	方 形	39×37	0.8	16	A	"
172	N 3 W60		"	"	橢円形	48×40	0.7	16	B	"
266	S 3 W 3	口縁部 体 部	"	"	"	41×36	0.8	16	B	"
1025	S 15W15		"	"	"	34×30	1.0	16	B	"
112	N51W18		"	"	円 形	43×42	0.7	17	B	"
119	S 6 W54		"	"	"	39×38	0.8	17	B	"
216	N39W12		"	"	"	39×38	1.0	17	B	"
241	S 12W12		"	"	"	42×41	0.6	17	B	"
257	Z		"	"	"	43×40	0.6	17	A	"
27	S X a S K08	口縁部 体 部	沈 線 沈 線・繩 文 無文	"	橢円形	43×36	0.7	17	B	"
196	N42W36			"	長方形	39×37	0.8	17	B	"
1010	N 3 W 6		"	"	方 形	44×43	0.8	17	B	"
1011	S12W 6		"	"	橢円形	42×39	0.8	17	B	"
57	N45W24	35	"	"	円 形	36×35	1.0	18	A	"
69	S 9 W54		"	"	"	42×40	0.9	18	B	"
105	N12E15		"	"	"	41×39	1.0	18	B	"
229	N 6 W 6		"	"	"	39×38	1.1	18	B	"
254	3号住C区	37	"	"	"	35×35	1.1	18	A	"
1014	N15W39		"	"	"	43×43	0.8	18	A	"
84	N51W21		"	"	長方形	43×38	0.8	18	B	"
29	N45W24		"	"	円 形	40×39	0.8	19	A	"
65	N27W51		"	"	"	44×43	0.7	19	B	"
97	S 6 W33	38	"	"	"	40×39	0.8	19	A	"
251	N24W27		"	"	"	43×41	0.8	19	A	"
268	S 30W42		"	"	"	39×38	1.0	19	B	"
1005	S 6 W21		"	"	"	44×42	0.8	19	B	"
1015	N39W18		"	"	"	40×38	1.0	19	B	"
116	S 6 W18		"	"	"	39×38	0.9	19	B	"
1028	N33W54		"	"	"	38×35	0.9	19	B	"
159	S 3 W45		"	"	橢円形	43×35	0.8	19	B	"
87	N57W 9		"	"	方 形	45×43	0.6	19	B	"
23	N60W 9	39	"	"	円 形	37×37	1.2	20	A	"
32	S 6 W 6	底 部 口縁部 体 部	網代 無文	"	"	50×47	0.7	20	A	"
72	N57W12			"	"	44×40	0.8	20	B	"
154	S 3 W12			"	"	42×38	1.2	20	B	"
161	S 18W18		"	"	"	47×44	0.9	20	B	"
173	N33W12		"	"	"	39×37	1.1	20	A	"

番号	出土地	神社番号	部位	文様、その他	形態	大きさ	厚さ	重量	種類	現存状態
67	S 9 W51			"	方 形	39×38	0.9	20	B	"
113	S B-05			"	"	45×41	0.8	21	B	"
106	N30W9	40		"	横円形	44×40	1.0	21	A	"
253	S 3 W18			"	横円形	42×37	1.0	21	B	"
558	N48W18	41		沈線	"	47×41	0.9	21	B	"
145	N36W15			無文	円 形	42×41	1.0	22	B	"
206	N 9 W57		底 部	網代	"	47×45	0.8	22	B	"
150	N 9 W60		体 部	無文	"	51×50	0.6	22	B	"
225	N 3 W18			"	横円形	45×39	0.9	22	B	"
235	S 6 W15			"	"	39×31	1.2	22	A	"
1004	S 18 E 3			"	"	45×38	0.9	22	B	"
1009	N 9 W54			"	円 形	47×46	0.8	23	B	"
35	N48W27	42		"	横円形	54×48	0.8	23	A	"
96	S 3 W9			"	"	50×39	0.8	23	B	"
155	N60W 6	43		"	方 形	46×46	0.8	23	B	"
176	N27W48			"	"	30×29	1.0	23	B	"
34	S 15W36			沈線・縄文	円 形	49×49	1.1	24	B	"
38	S 3 W12			無文	"	44×42	1.0	24	A	"
83	S 12W57	45		"	"	46×44	1.1	24	B	"
163	N24W30			"	"	41×39	1.2	24	B	"
203	N33W 6			"	横円形	50×45	0.8	24	B	"
210	S 18W12			綾杉文	円 形	46×43	0.8	24	B	"
1030	N54W 6			無文	"	47×45	0.8	24	B	"
1013	N39W24			"	横円形	48×42	1.0	24	B	"
247	N48W15			"	方 形	45×42	0.8	24	B	"
33	N 3 W 9			沈線	円 形	46×44	0.9	25	B	"
75	N48W30			無文	"	49×49	0.7	25	B	"
91	N 3 W36			"	"	42×40	1.1	25	B	"
258	N45W15			"	"	45×43	0.8	25	B	"
49	S 12W57			"	横円形	50×40	0.9	25	B	"
197	N 3 E 3			"	"	49×42	0.8	25	B	"
1001	S 3 W57			"	"	56×50	0.7	25	B	"
3	S 30W42	46		工字文・列点文	"	54×42	0.8	26	A	"
79	S 12W51			無文	円 形	46×46	1.0	26	A	"
245	S 9 W39			"	横円形	50×45	0.8	26	B	"
2	S 12W12	47	口縁部	刺突文・縄文	"	52×46	0.9	27	B	"
137	S X a S K08		体 部	無文	円 形	49×47	1.1	27	B	"
221	N 6 W48			"	"	46×47	1.0	27	B	"
76	S 12W 6			"	横円形	53×43	0.7	28	B	"
74	N 3 E 3			"	"	53×47	0.8	28	B	"
205	S 9 W21			沈線・穿孔途中	"	42×41	1.1	29	B	"
78	N51W15			無文	円 形	46×43	1.2	30	B	"
82	N12W54			"	"	50×50	1.0	30	B	"
135	N12W57			"	"	52×50	0.9	30	B	"
228	S 6 W12			"	"	52×49	0.8	30	B	"
93	N 3 E 3			"	"	48×47	1.0	31	B	"
95	N57W3			"	"	53×50	1.0	32	B	"
208	S 6 W21	44		凹線・縄文	"	48×47	0.9	32	A	"
1033	N54W12			無文	"	49×48	1.1	33	B	"

番号	出土地	博図番号	部位	文様、その他	形態	大きさ	厚さ	重量	種類	残存状態
186	N57W6		"	"	"	52×49	0.9	34	B	"
1842	N3W51		口縁部	"	楕円形	56×51	0.8	34	B	"
1012	S3W15		"	網文	円形	44×43	1.5	34	B	"
81	Z		"	穿孔途中	"	53×50	1.1	35	B	"
139	N3E3		"	無文	"	51×48	0.9	35	B	"
94	N54W12		体部	"	六角形	57×49	0.9	35	B	"
219	S3E3		"	"	楕円形	57×50	0.7	35	B	"
1002	N48W18		"	"	"	57×52	0.9	36	B	"
43	N3W15		"	凹線	円形	57×55	0.8	37	B	"
195	N3E3		"	凹線・網文	楕円形	55×50	0.9	38	B	"
209	N33W3		"	無文	"	54×48	1.0	38	B	"
40	S3W57	48	口縁部	表面網文・裏面三叉文	円形	48×46	0.8	39	B	"
42	N48W24	49	体部	無文	長方形	57×47	0.9	39	B	"
50	N3W6		"	胸骨状文・沈線	円形	65×63	0.7	41	B	"
261	S12W12		"	網文	楕円形	56×48	1.2	42	B	"
80	Z		"	無文	"	61×59	0.9	43	B	"
230	Z		"	"	"	50×44	1.0	47	B	"
244	N3W12		"	"	円形	62×59	0.9	51	B	"
8	S3W12	50	"	沈線・表面に朱が付着	"	26×	0.8	(6)	A	1/2欠
25	N54W6	51	"	沈線・網文	長方形	37×34	0.9	(15)	B	4/5欠
30	S6W57		体部	綾杉文	円形	43×	0.7	(16)	B	一部欠
36	N48W18	52	"	"	"	52×50	0.9	(31)	B	"
39	S3W9	53	"	沈線・網文	楕円形	51×	0.8	(19)	B	"
41	N45W39		"	隆蒂	円形	56×	1.1	(40)	B	"
45	Z		"	"	"	45×	0.9	(25)	B	"
52	N66W6		"	無文	楕円形	27×23	0.8	(5)	B	"
54	N63W3		"	"	円形	34×	0.7	(9)	B	"
58	N36W33	54	"	"	"	36×	1.0	(14)	A	"
60	S6E12		"	"	"	37×35	1.0	(16)	B	"
62	N39W24	55	"	"	"	39×39	0.7	(16)	B	"
63	S9W54		"	"	"	34×	0.9	(15)	B	"
70	N6W6		底部	網代底	"	48×	1.1	(27)	B	一部欠
88	N21W42		"	"	"	45×	1.0	(20)	B	"
92	S21W3		"	"	"	35×35	0.8	(12)	B	"
101	N63W9		"	"	"	31×29	0.7	(8)	A	"
107	N12W54		"	"	"	45×	1.3	(27)	B	"
108	N6W45		体部	"	楕円形	46×	0.8	(17)	B	1/2欠
111	N51W18		"	"	円形	37×	0.9	(14)	B	一部欠
114	N9W6		"	"	"	44×	0.9	(16)	A	"
115	N57W6		"	"	楕円形	48×	1.1	(31)	B	"
117	N9W51		"	"	"	35×	0.7	(13)	B	"
118	N51W6		"	"	円形	38×	0.7	(10)	B	1/2欠
120	N51W9		"	"	円形	33×32	0.9	(11)	A	一部欠
121	N45W27		"	"	"	29×	0.8	(9)	B	"
124	N3E3		"	"	"	40×	0.9	(12)	B	1/2欠
126	N24W51		"	"	楕円形	40×36	0.8	(14)	B	一部欠
127	Z		"	"	円形	25×	0.6	(3)	B	1/2欠
129	N42W33		"	"	"	29×	0.8	(8)	B	一部欠
132	N45W27		"	"	楕円形	40×	1.0	(22)	B	"

番号	出土地	鉢図番号	部位	文様、その他	形態	大きさ	厚さ	重量	種類	残存状態	
133	N48W30		#	#	円形	36×	0.8	(11)	B	1/2欠	
134	Z		#	#	"	43×	0.6	(14)	B	一部欠	
138	N60W6		#	#	楕円形	55×48	0.5	(19)	B	#	
140	N51W9		#	#	"	48×	0.8	(30)	B	#	
141	N42W39		#	#	円形	33×	0.7	(6)	B	#	
142	N51W12		#	縹文	"	40×	0.9	(12)	B	#	
143	N42W39		#	沈縁	"	48×	0.6	(19)	B	1/2欠	
147	N24W18		#	#	"	42×42	1.0	(42)	B	一部欠	
152	S 3 W12		#	無文	"	38×	0.9	(13)	B	#	
162	S 9 W54		#	"	方形	40×	0.8	(13)	B	#	
164	N42W36		#	"	楕円形	40×35	1.1	(16)	B	#	
165	N 6 W60		#	"	円形	38×	0.7	(13)	B	#	
170	N24W18		#	沈縁	"	42×41	1.2	(23)	B	#	
180	N48W30		#	#	"	44×	0.7	(11)	B	1/2欠	
181	S 3 W 3		#	#	"	42×	0.7	(8)	B	#	
182	N42W24		#	無文	"	—	0.9	(9)	A	2/3欠	
185	N51W 6		#	#	"	36×	0.8	(7)	B	1/2欠	
187	N51W12		#	#	方形	32×29	0.7	(7)	B	一部欠	
193	N 6 W51		#	#	円形	32×	0.7	(9)	B	#	
201	S 3 W12	56	#	工字文	楕円形	53×	1.0	(39)	B	#	
217	N36W3		#	無文	"	36×32	0.7	(10)	B	#	
226	N45E3		#	"	円形	36×	1.1	(17)	B	#	
227	N24W45		#	"	"	47×	0.9	(22)	A	#	
231	N36W12		#	"	楕円形	42×34	0.7	(10)	B	#	
236	Z		#	"	円形	45×	0.8	(13)	B	#	
246	N36W3		#	"	方形	40×39	0.7	(16)	B	#	
267	N48W18		#	"	円形	39×	0.9	(20)	B	#	
269	N15W12		#	隆帯文	楕円形	45×	1.0	(26)	B	#	
270	Z		#	凹線	"	54×48	1.1	(29)	B	#	
274	N42W36		#	無文	円形	39×	0.7	(13)	B	#	
421	N63W9		#	縹文	"	35×	1.0	(11)	A	#	
552	S 3 W 6		口縁部	表面 裏面	沈縁・縹文 沈縁・列点文	楕円形	46×	0.6	(17)	B	#
1003	S 12W9		体 部	無文	円形	42×40	0.8	(21)	B	#	
1007	S 3 W54		#	#	"	44×	0.7	(14)	B	#	
1018	S 9 W36		#	#	"	32×31	0.8	(12)	B	#	
1024	S 12W9		#	#	"	34×32	0.8	(11)	A	#	
1027	N15W39		#	#	楕円形	44×38	0.9	(18)	B	#	
1029	N30W57		#	#	円形	43×	0.6	(13)	B	#	
1032	N39W36		#	#	"	38×38	0.8	(14)	B	#	

がある。粗雑なつくりで、黄褐色を呈する。石製勾玉は小型偏平でC字型の内側に一つふくらみをもち、形状的には子持勾玉状のものである。黒色の滑らかな石でつくられているが、材質は不明である。白玉は全て滑石製で、偏平なものから丸玉状のものまであり、いずれも灰緑色である。安山岩もしくは硬質砂岩製の偏平な円板状の垂飾りが2点出土している。

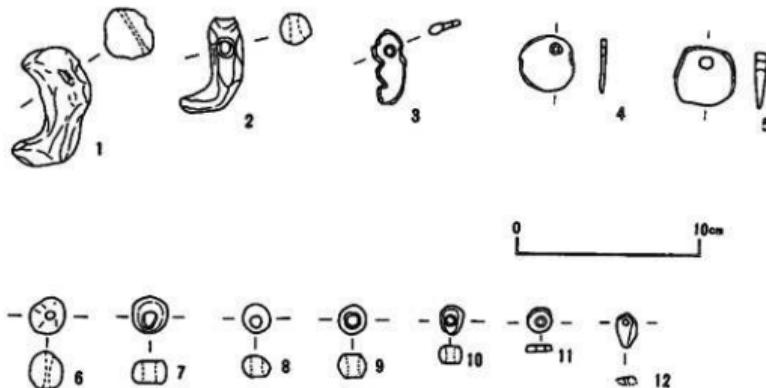
骨角製装身具は、猪牙製と思われるもので、2箇の正方形を連結したような形をとり、一方に1孔が、もう一方には2孔があけられている。同様のものをいくつか連ねて装身具とするものであろうが、いかなるものかは不明である。

6. 骨角製品

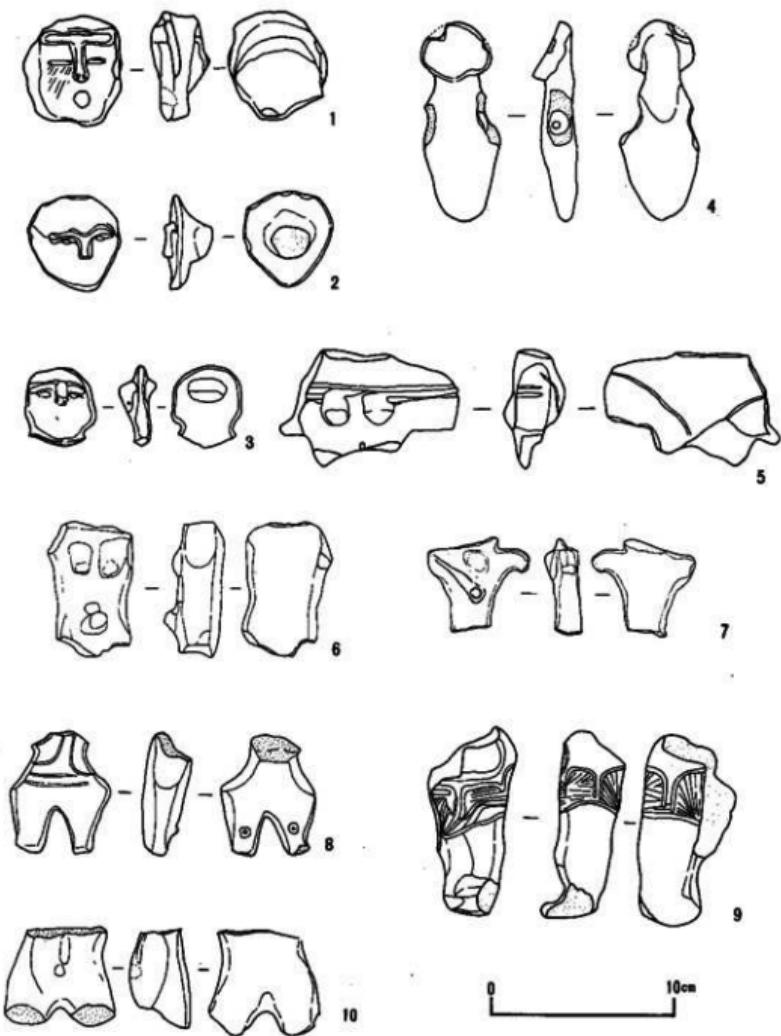
非常に多量の骨角類が出土しているが、製品となっているものは極めて少ない。

石鎌を挟み範に装着するためのものと思われる角製品が2点出土している。1点は猪牙製で、他の1点は鹿角製である。後者には形態の上からも疑問があるが、前者は石鎌を挟む部分や、範に挿し込む部分が細かく細工されている。範としては矢竹が使用されたものであろう。

また、鹿角製の断面方形で先が細くなる箸状製品が1点出土した。いかなるものか、その性格は不詳である。



第58図 装身具



第59図 土偶

II. 平安時代の遺物

1 土器

(1) 土師式土器 (第60~63図)

環形土器・皿形土器・甕形土器・壺形土器・片口付塊形土器及び錫蓋形土器がある。

1) 環形土器 (第63図1~25、第64図35~50)

ほとんどが完形の環形土器で、取り立てて特異なものはない。全てが回転糸切り皿で、高台を有するものと付かないものがある。また内面黒色処理のものと、そうでないものがあり、黒色処理されたものの中には暗文をもつものもある。胎土には砂粒を稍含むが、おおむね良好な胎土で、焼成もまたは良好である。色調は橙褐色のものが多いけれど、躊躇した黄褐色のもののが若干存在する。

2) 皿型土器 (第60図26~29、第61図30~34、52)

高台の有無により大きく2つに分けられる。高付の付かないものは、底部から若干内側しながら立ち上がるものと小さな底部から直斜状に開くものの2形態がある。高台付のものも大体同様であるが、直斜状に開くものが稍多い傾向にあるようである。また、高台付のものの中に高い高台に偏平な小さな皿部の付く、特に異なるものが含まれている。内面黒色処理は行なわれているが数的には多くない。胎土・焼成は普通であるが、良好なもののがいくつか存在する。色調は環形土器と変りない。

3) 甕形土器 (第62図59~64、第63図65~67)

全容の判明するものは1点もない。図化出来るのは口縁部のみであるが、これも、口縁部を一周するものはない。全て破片からの図上復原である。それでも、口縁部の形態から長胴甕であることが知れる。しかし、1点ではあるが、頸部が強く「く」の字状にくびれ体部が偏球状をなすと思われるものがある。そのほかは頸部形状に「く」の字状、「し」の字状の差はあるてもいずれも長胴形を呈する模様である。外部整形手法としては、ヘラ削り・刷毛・ナデが認められる。中に3点特に小型の甕形土器がある。これらは胎土・成形・焼成とも良好であり、内面黒色処理が施されたものがある。

4) 壺形土器 (第62図57・58)

図化可能なものは2点のみである。直口壺と無頸壺である。直口壺は、口唇部が肥厚くて平緩状をなし口縁部が外反しているかのようであるが、口縁部内側は殆んど直立している。胎土・成形は良好で、外面はヘラ削りが行なわれ、内面は黒色処理されている。無頸壺は、口縁部から肩部にかけての僅かな破片であり、全容は知り得ない。口径約12cmをはかり、橙褐色を呈する。

5) 片口付塊形土器 (第63図68)

1点だけの資料である。环を大振りにした形状で、あいまいな片口を付ける。成形後の調整はあまり良好でないが、胎土・焼成は良好である。内面は黒色処理されている。

6) 鍔釜形土器

鍔部破片の出土によって存在が知られたが、図上復原も不可能で、勿論全器形は不明である。鍔が体部に対して直角に付く形態をとる。

(a) 須恵器 (第64図)

器形としては、壺・壺蓋・甕・盤・平瓶がある。

1) 壺

高台の付くものと付かないものがある。しかし、高台の有無にかかわらず底部は殆んど全てが回転糸切りで切り離されており、その他の切り離し手法のものは見当らない。中に1点だが、高台の付く底部から体部・口縁部に直線的に直立し、非常に深いものがある。壺としてよいか疑問だが、一応ここに分類した。

2) 壺蓋

つまみが付き、内側の返しのない形態のもので、つまみは低い擬宝珠形のものから、偏平な僅かに擬宝珠の痕跡を残すものがあり、なだらかに口縁に至るものと、一度棱をもって口縁に至るものがある。棱をもつものの口唇部は嘴状を呈する。

3) 甕

口頸部と体下半部及び底部が圓化できただけである。口頸部破片は比較的長い頸部に、一度折り返したような縁をもつ口唇部がつく。体下半部及び底部は、いずれも器肉薄く、大型品としては繊細なつくりである。

4) 盤

1点のみ、しかも底部破片のみの存在である。形態的には壺ないし甕になる可能性も大きい。底部から体部への立ち上がりが稍きついので疑問も残るが、盤として分類した。

5) 平瓶

口頸部のみの破片である。頸部の欠損状態から平瓶であることが知れる。頸部から口縁部に外反しながら至り、口唇部は折り返して袋状を呈する。

(b) 灰陶陶器 (第65図・第66図23~28)

出土量は多く、須恵器を軽く凌駕している。器種としては、碗・皿・壺・瓶がある。

1) 碗 (第65図1~9、12~13)

量的に最も多い。大型のものと小型のものがあり、小型品は2点のみで、他は全て大型品である。高台は概して高くしっかりしており、強く外に張り出すもの、直立するもの、直立するが内凹するものとがある。

2) 皿 (第65図14~22)

所謂段皿が多い。高くしっかりした段を有するものと、段差の不明瞭なものとに2分される。口縁部は殆んど外反するが、一端立ち上がり外反するものが1例ある。高台は低くだらだらした形状のものが多い。

3) 壺 (第66図27)

直口壺が1点ある。口頸部は直立し、低い。肩部以下は欠失しているが、全体に器肉が厚い。

4) 瓶 (第66図23~26、28)

長頸瓶と仏花瓶形の小型品がある。長頸瓶は口縁部破片と頸部破片・底部破片で、全容の知れるものはない。口縁部は大きく外反し、袋状ないし嘴状を呈する。また、頸部は強く直角にくびれ口縁部に向かい直立する。

仏花瓶形品は非常に小型で、口縁部を欠いているが、推定器高10cm内外と思われる。体部は卵形を呈し、頸部は細く、体部と底部の境でくびれ、安定した底部をもつ。成形はロクロ回転によるもので、底部は回転糸切りであるが、体部にはしばりの痕跡をとどめる。

(二) 緑釉陶器 (第66図29)

出土量は僅少で、全容を知ることの出来るものも1点のみであるが、上田小県地方では初出例である。器形の知れるものは皿で、成形良好であり、焼成も堅緻である。釉薬は内外面の全面にかけられ、ていねいで、稍黝んだ緑色を呈する。このほかに、明らかに異った個体のものと思われる破片がいくつかあり、胎土の様子から2種類に分けられる。そのうち1種類は皿の口縁部破片で、内面に不明瞭な段をもつ段皿である。

(三) 瓦 (第66図30~32)

軒丸瓦及び平瓦の破片が出土している。瓦を伴なう遺構は何ら確認されず、瓦のみが、遺跡内のどこということなしに出土した。量的にはあまり多くない。

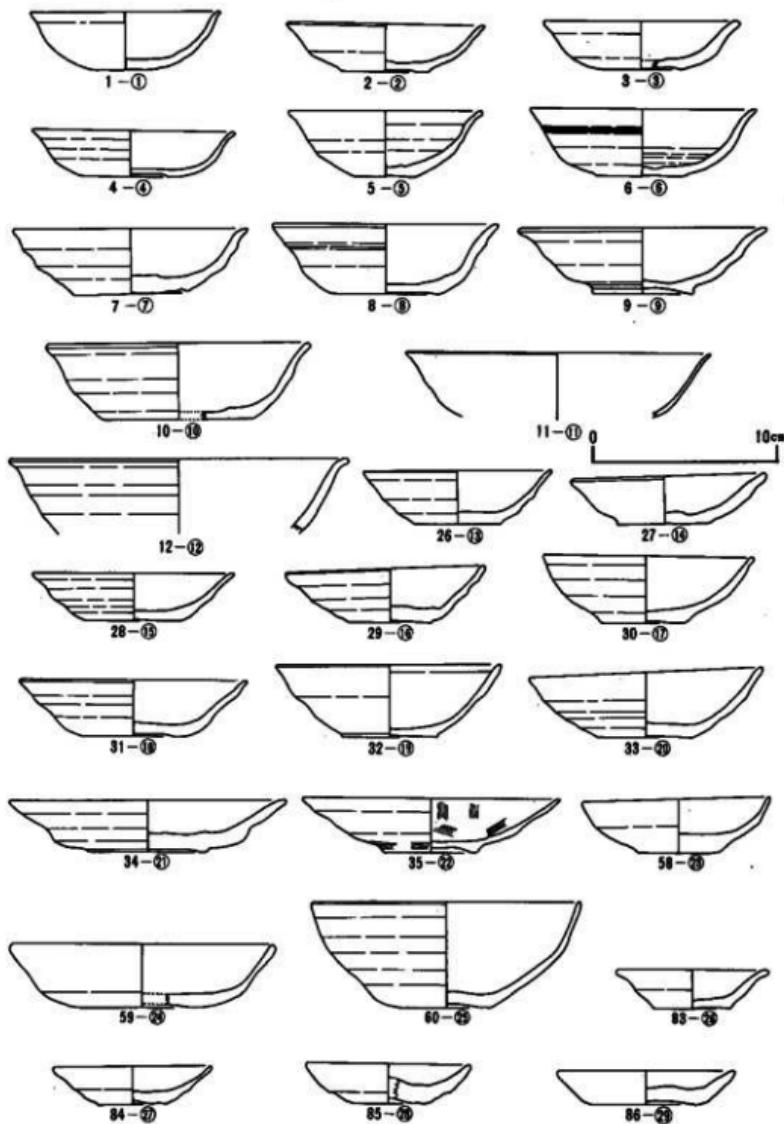
軒丸瓦は瓦当部分の約1/3の破片である。内区文様は単弁蓮華文で、花弁は彫り浅く凸線で表現されている。珠文が花弁内に各1個置かれており、子葉を表わしている。中房は、花弁同様に凸線で区画されているが、殆んどが欠失しているので、詳細は不明である。花弁と周縁との間には矢張り凸線による圓線が花弁に接してめぐらされている。胎土良好で橙褐色を呈する。

上記の軒丸瓦以外は全て平瓦破片である。胎度は概ね良好で、焼成堅緻、薄手のものが多い。布目痕・叩き目が明瞭に残り、叩き目は殆んどが縱位であるのに、僅かに横位のものも含まれている。

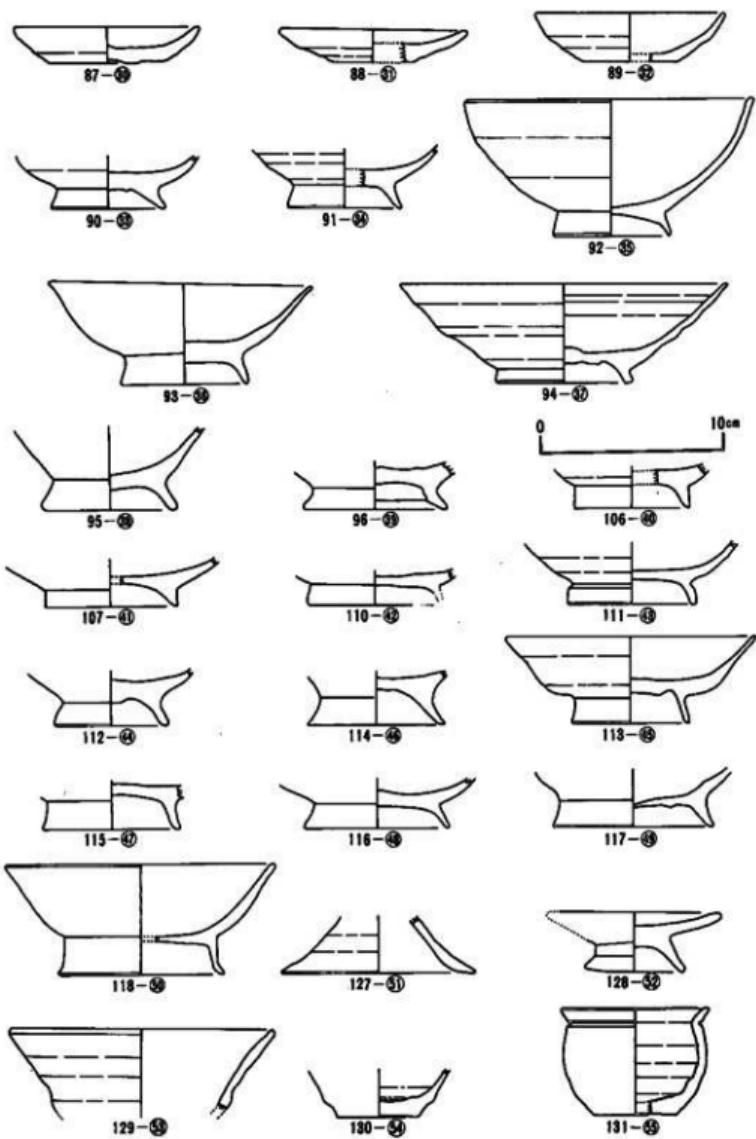
(四) 土錐 (第67図)

23点出土しており、その全てが筋錐形であるが、20~23の4点は中央部があまり太くならない管状に近い形状を呈する。

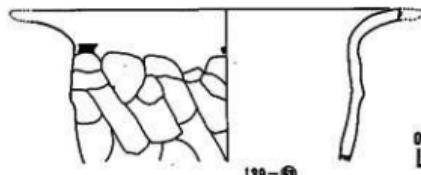
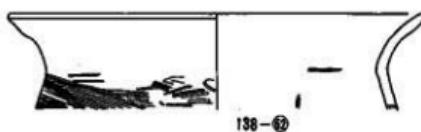
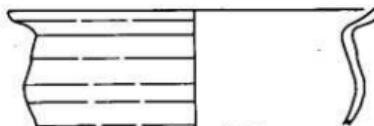
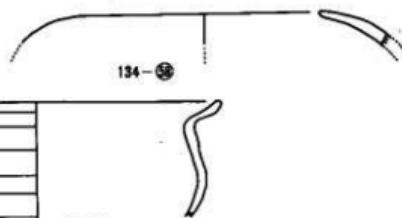
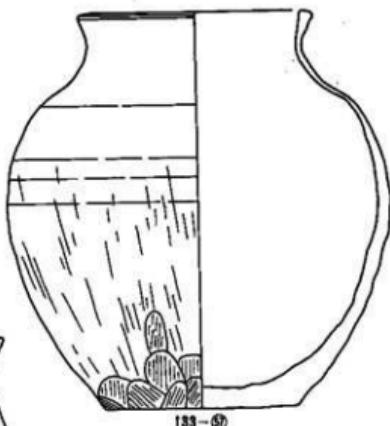
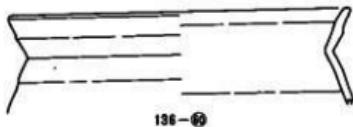
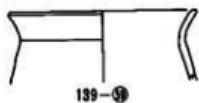
各部の計測値は、全長で23の7.4cmから20の5.0cm、最大径で1の2.8cmから22の1.8cmと、かなりの開きが認められる。しかし、土錐本来の機能を考えると、この程度の形状や大きさの差異は、何らの不都合もなかったものと思われる。



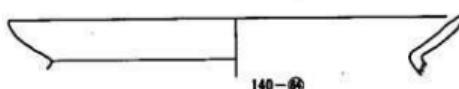
第60図 土師器



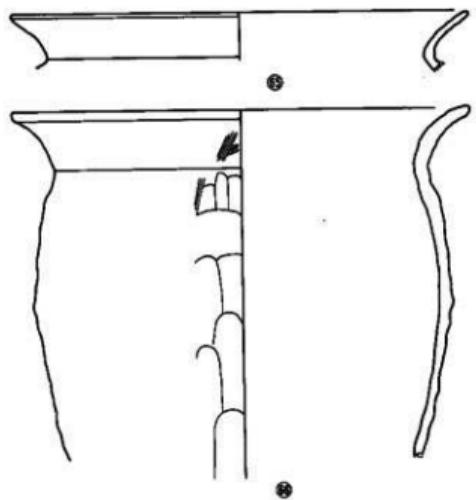
第61図 土器



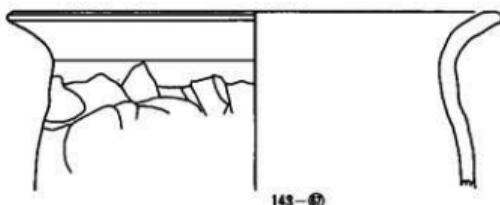
0 10cm



第62図 土師器



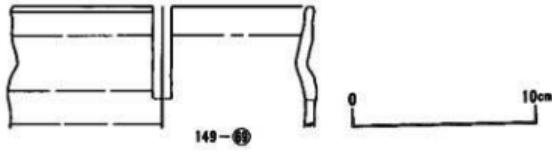
②



148-③

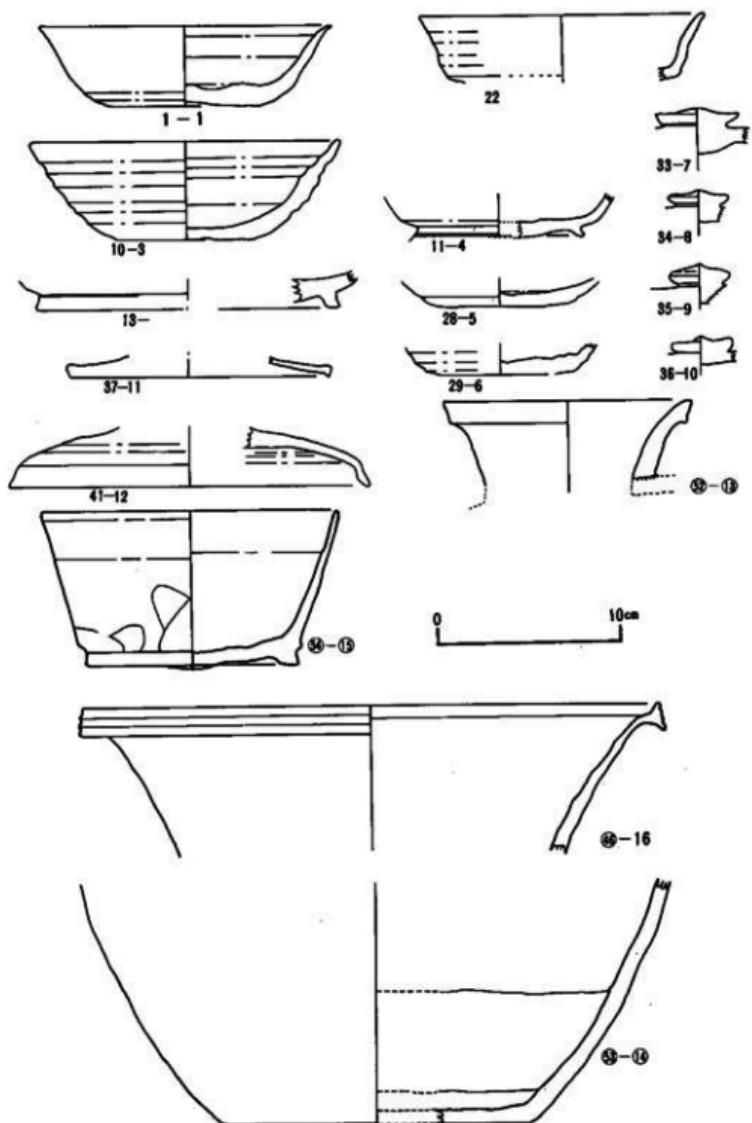


148-④

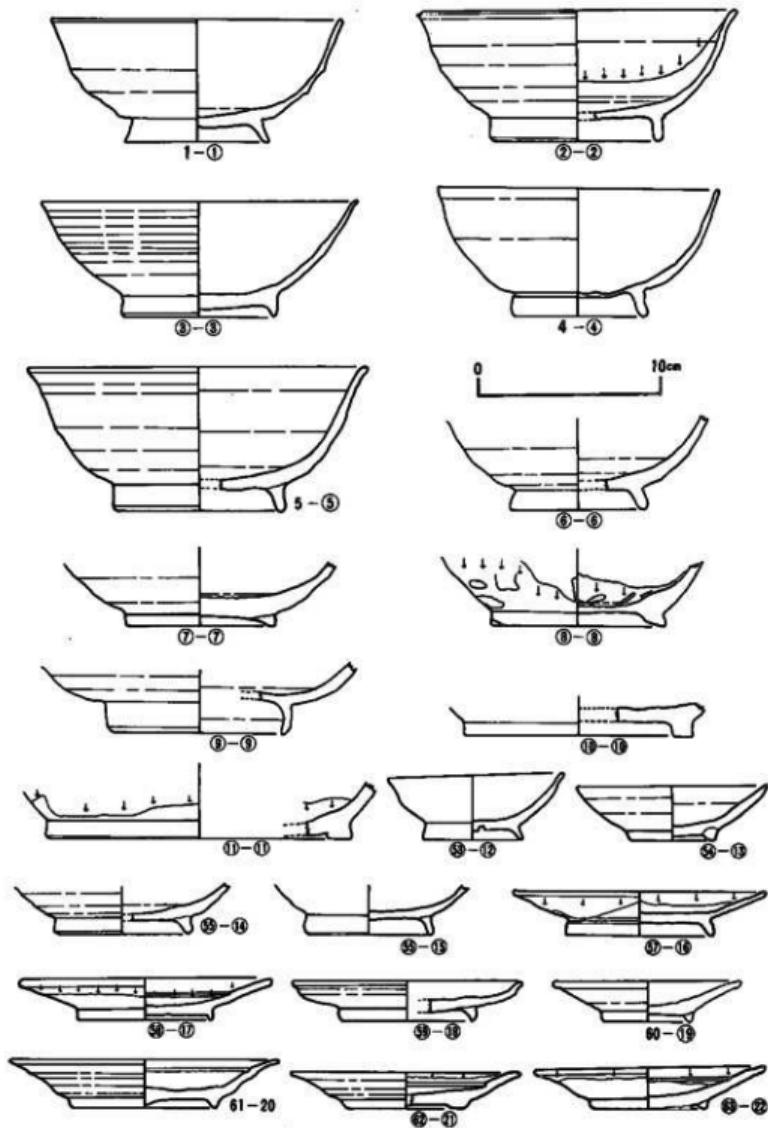


149-①

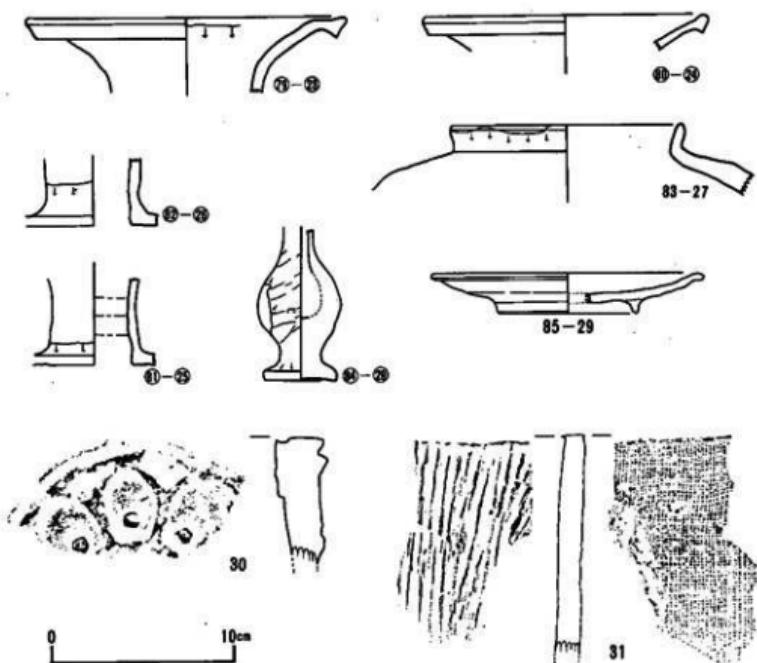
第63図 土師器



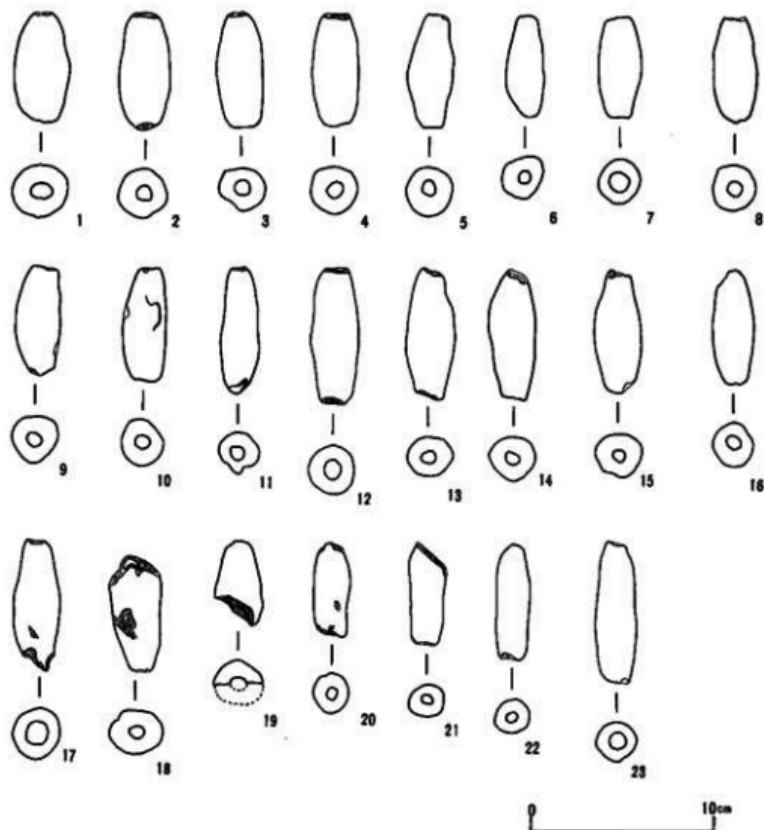
第64図 猥惡器



第65图 庚物陶器



第66圖 延軒陶器、瓦



第67図 土 總

(イ) 羽 口

小鋸治址と考えられる遺構から鉄鋸を伴って出土している。全容を知ることの出来るものが2点あり、2点ともほぼ同大で、長さ約14cm、径約10cmをはかり、一方に熔津が付着していて、よく使用されたことがわかる。この2点以外にも羽口破片は出土しているが、全容を知れるものはない。

第4章 深町遺跡出土骨類について

西沢寿晃

本遺跡の発掘調査に伴ない、多量の骨類が出土したが、これらは人骨と動物骨に分けられ、それぞれ出土状態や遺存の程度が異なる。人骨の場合、明瞭に土塗や配石土塗内の出土もあるが、遺跡全域に広範囲に散布する動物骨中に混入したものも多く、その個体数や埋葬形態、時代的な類推には種々の問題が残る。以下、出土骨類の概要について記載する。

I 人骨 (記載類は不同であるが、墓址内出土と確認された個体からとする。各計測項目はマルチによる)

1 SK 03 出土：左大腿骨の上部 $\frac{1}{2}$ 程度が残り、骨頭は欠く(現存長約17cm)。殿筋粗面や、恥骨筋線の発達は弱い。骨体上部横径30mm、同矢状径22mm、同横断示数73.33(超広)である。他に右脛骨の骨体中央部、右腓骨の同部位が残る。骨質は堅い。

2 SK 04 出土：後頭骨のいわゆる十字隆起の部分を中心として遺存し、その周縁部が細片となって残る。外後頭隆起は顕著でない。

3 SK 05 出土：白色を帯びた硬質の骨で滑沢な表面を有する。頭蓋骨の頭頂より前頭にかけて残り、眼窩部は細片となっている。冠状縫合は離開し、矢状縫合も一部の観察では癒着していない。前頭部の膨隆は弱いが、眉上弓はやや強く発達する。下顎骨は両側枝を欠くが、骨体の前部が残る。骨体は頑丈で、オトガイ棘は棘状、顎舌骨筋線は著明である。舌側面の歯槽部に下顎隆起の強度な発現がみられる。オトガイ孔は両側ともP₂の下方。各歯の咬耗は進み、大臼歯は頬側へ傾斜する平面化した咬合面をつくり、象牙質の露出が著しく、マルチの2~3度に相当する。両側の大歯の歯槽は萎縮して稜状に閉鎖し、左右対象の抜歯痕と見倒される。

左上腕骨の下半部、左脛骨、腓骨の骨体中央部と、左右大腿骨は骨体部分がほぼ完全に残る。粗線の発達は強く、粗糲性に富む。下方で外側唇が鋭い一棱を形成する。殿筋粗面や恥骨筋線は粗い結線状となる。計測値から大腿骨の上部は広型に属し、

M ₃ M ₂ M,P ₂ P ₁ ◎I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ ◎P ₁ P ₂ M ₁ M ₂
· · · ·	
○印 抜歯	
・印 残存歯	

中央部ではいわゆるピラステルの形成が著しい結果となり、各期の縄文時代人の特有性に合致する。壮年期の男性と推定される。

なお、本人骨の出土状態には特異な位置関係がみられ、埋葬様式に由来するものか、単なる散乱状況を示すものか問題が残る。すなわち左右の大腿骨が又状に置かれ、一方の開かれた方位に頭蓋骨が挟まれた形となる。頭蓋骨は発掘の際に、底部、後頭部等を削取されている。交叉した大腿骨の一側に上腕骨、脛骨等の長骨が平行して置かれ、交点の先方に他の短小な骨の集積がみられた。

大腿骨体		右	左
上部	(9) 横径		31 mm
	00矢状径		25
	横断示数		80.65
中央部	(7) 横径	25	26
	(6) 矢状径	30	29
	横断示数	120.00	111.54

4 SK 06 出土：1個体の各部の骨が一括されている。頭蓋骨は僅少な顎面骨と下頸骨のみであるが、脊椎骨、肋骨の小部分、右鎖骨の骨体は完形、上腕骨は両側とも下半分が残る。骨の骨体遠位端、寛骨は恥骨結合を含む細片、大腿骨、脛骨等がいずれも破損されて遺存する。全体的に骨は纖細で、一見女性骨を推定させる。

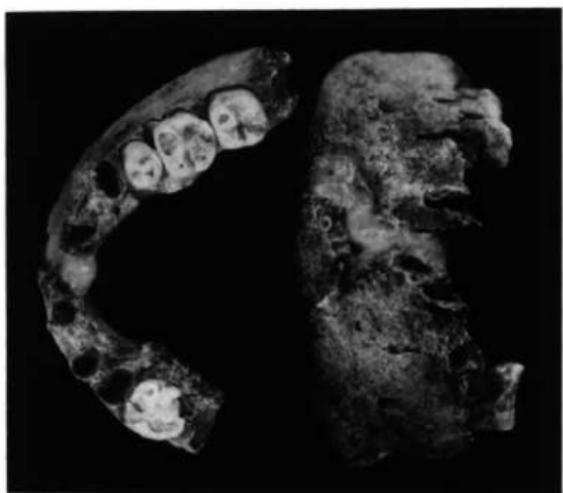
上頸骨の右歯槽部において、犬歯の歯槽は閉鎖し、生前の抜去痕とみられる。同様に下頸骨も正中から右側を残すが(左側歯槽の一部も残る)、犬歯の歯槽のみが稜状に閉鎖し、右側においては上下の大歯を対象とした抜歯が施行されたものと認められる。下頸隆起が著明であり、オトガイの発達も強い。

5 SK 07 出土：大小の臼歯の歯冠が剥離されて残るが、他に骨の遺存はない。

6 SKP 04 出土：右大腿骨の骨体中央部(現長約 21 cm)、同左側の中央辺の破片のみである。白色を帯びた堅硬な骨質で、かなり頑丈な骨壁を有する。しかし粗線の発達はわずかに強い程度で、骨体はやや内湾する傾向がみえる。骨体中央横径 24 mm、同矢状径 28 mm、同横断示数 116.67*横断示数からやや強いピラステルの形成がみられる。

7 SKP 05 出土：部位の認定ができるのは、頭蓋骨において主に後頭骨、下頸骨の細片、上腕骨、大腿骨、脛骨等である。発掘の際に埋葬位が確認できたもので、両側の上・下肢がそれぞれ体側に平行する伸展葬と見られたが、クリーニングは殆んど不可能であった。

8 SKP 14 出土：埋甕に伴なった骨で、多量に残っているが、白色の骨粉状となって崩壊が進み、形を成さない。焼骨の可能性もあるが明確でない。



抜歯のある人骨（下顎骨）

上：前面観

下：上面観



切歯のあるシカの角

第68図 人骨・鹿角

9 N・15、E・3 出土：左側頭骨の岩様部と乳突部分のみである。乳様突起は発掘の際に斜めに削られている。後頭乳突縫合より離脱する「黄」の堅い骨質である。外耳道の前後壁に顯著な外耳道骨腫の発現がみられる。表面平滑で球状をなし、膨隆は進攻して、外耳道は上下に二分されるかのように挾窄している。

10 S 3 E 3 出土：前頭部を除く頭蓋冠はほぼ完形である。冠状縫合は癒着せず、矢状縫合は外枝で残るが、内枝では痕跡的である。矢状縫合に沿って浅い陥凹があり、頭頂結節がやや強く隆起する。頭頂孔は左側に1個、外後頭隆起は極く弱い。下顎骨の骨体前方より右側が残る。臼歯部の歯槽線は吸収、崩壊され、歯槽は浅い陥凹を示す程度となる。大・小白歯の一部が残るが、いずれも極度に咬耗が進み、特に小白歯の総ては全面に象牙質が露出する。咬耗度はマルテンの3度に相当し、熟年の男性と推定される。

11 N 48 W 18 出土：トレンチの側壁に露出した骨で、発掘の結果、頭蓋骨で一顆のみであった。脳頭蓋は細片化するが保存はよい。骨壁は厚くペレグマ部で8.4mmある。冠状縫合は簡単で内外板に残り、矢状縫合は離脱する。土項線は発達し、外後頭結節の隆起も著大で、プロッカの分類による4～5に及ぶ。頭項平面はやや起状に富む。M₁のみが残存し、咬耗は唇側に傾斜する平面状に進んでいる。

12 N 24 W 30 出土：左鎖骨が両端を欠くが完形を保つ。寛骨の右坐骨結節から寛骨臼の一部、大坐骨切痕の部分が残る。右大腿窓の骨体上半部は大・小転子を欠く（現存長約18cm）。筋附着部の粗糲性は中等度で転子間線も弱度。骨体上部横径30mm、同矢状径25mm、同横断示数83.33で広型に属す。

13 S 3 W 3 出土：遺存骨は脛骨の骨体と共に前腕骨とみなされる骨片、寛骨の大坐骨切痕の部分、脛骨、鎖骨の細片、左右大腿骨は上下端を欠く（現存長約25cm）。粗線は弱度で、筋附着面も強くない。大腿骨横断面の上部は広型に属し、中央部にはビラステルが中等度に形成されている。

14 S 6 W 15 出土：右大腿骨の骨体上部（現存長約8.7cm）。下端口横折状で、粗線は発達した柱状をなす。

15 S 9 W 15 出土：頭蓋骨のみである。後頭骨の一部は上縁が後頭縫でみられ、後

大 腿 骨 体		右	左
上 部	(9) 横 径	31 mm	31
	⑩ 矢状径	25	26
	横断示数	80.65	83.87
中央部	(7) 横 径	27	
	(6) 矢状径	31	
	横断示数	114.81	

下面是下項線まで、他は細片となる。外後頭隆起は中等度。右側側頭骨の岩様部が残る。乳様突起は一部欠けるが、前下方へ向う小型であろう。外耳道において後壁下方から上方へ向って膨隆する外耳道骨腫が発現している。

16 S 15 W 18 出土：頭蓋骨の中で左頬骨、右側側頭骨の岩様部、後頭骨の左右後頭孔の部分が残る。

要約：以上記載した出土人骨は総数 16 体となる。これらの各人骨を出土地点や、骨格の連結性等で比較すると、總てが異個体とする可能性が大である。その他にも 10 地点において、骨片状であるが人骨と見做せるものの出土があり、総数は増加する傾向がある。しかし各骨の破損ははげしく、性別、年齢等の鑑別は困難であり、埋葬様式も不明確な点が多い。

各人骨の特性をみると、その多くに縄文的な要素を覗見することができる。大腿骨にみられる柱状性はかなり強度のものであり、縄文人の殆んどに発見される性状に伴なう。風習による抜歯を施された人骨例は、近年長野県内でも増加しつつある。その発生にも諸説があり、文化的、生態的にも重複する系統があるとみられている。また外耳道骨腫という疾患を残す人骨も県内では特異な資料となろう。縄文時代の貝塚遺跡群よりの人骨に高頻度に発見されるもので、この成因にも諸説があり、沿海地帯における潜水作業による刺激なども、誘因の一つとされているものである。

中部高地が從来、その地形や土壤成分から、骨類の保存に全く不適な地域とされるなかで、本遺跡の出土人骨は貴重な資料の一つとなるであろう。

II 動物骨

遺存体の種類：遺跡の殆んど全域にわたり、多量の動物骨が発掘された。出土状況や包含層の記載は発掘記録に譲るが、いずれも縄文時代の生活址に関連した遺存体と見做される。

動物種をみると、ニホンジカが圧倒的に多く、イノシシが少量共伴する以外は、他の動物は量的には全く存在しない。これらの骨がすべて食料残渣で、狩猟対象が代表的な大型獸であるシカ、イノシシに限られてきた段階とすれば縄文後期以降の通例に合致する。

各地点に散乱する骨のすべては、細かく破碎された屈曲性の骨折状態を示す。頭骨も同様に細片化するが、顎骨や脊椎、肢端の骨などは比較的原型を止める。

出土動物骨の種名

1. ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck
2. イノシシ *Sus scrofa leucomystax* Temminck
3. ツキノワグマ *Ursus thibetanus japonicus* Schlegel
4. タヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus* Temminck

5. テン *Martes melampus melampus* Wagner6. ニホンザル *Macaca fuscata fuscata* Blyth

7. 鳥類

上記種中ニホンジカ、イノシシ以外はツキノワグマ—犬歯、クヌキ一下頸骨左
 半部、テン一下頸骨右側、ニホンザル—中手骨のみで他の部分の骨は殆んど見
 当らない。

量と分布：骨の総重量は約 10 kg を超える。比較的完形を保つニホンジカ、イノシシの距骨、踵骨を摘出すると総数は次表の通りである。各骨の出土地点と左右差を検討すると、シカの場合、最小頭数は 13 頭であるが、組み合わせからみて総頭数は著しく増加する可能性がある。しかし、これは捕獲解体された頭数に直接関係しない單なる目途である。

ニホンジカ	距骨	右 12	左 13	計 25
	骨	右 4	左 7	計 11
イノシシ	距骨	右 2	左 2	計 4

S 3 W 9 地点には、シカの距骨が 7 個出土し、他の散乱骨も全体の約 3% がこの地点に密集する。同様な分布は〈S・12、W・12〉、〈S・15、W・18〉をそれぞれ中心とした地点に濃密的である。その他の地点には散在する程度であり、動物の解体作業に一定の場所を確保したものとすれば、遺跡の全体的な構成の上からも興味ある現象である。

加工痕のある骨：骨の関節端に近く横走する切痕を多く見かける。またその性状からシカの中手骨を縦割にした類例も多い。シカの角は自然脱落したものに加えて、その基部を前頭骨と共に破碎したもの、切り込みが楔状にはいったもの、切り取った角の利用部である先端を切断したものなどに分けられる。

なお一部に火焼骨も混入するが、全体的に焼骨は少ない。

以上の動物骨の分析は全たく概略であり、詳細な検討の余地は多く残されているが、別稿に譲りたい。

動物遺存体の観察については、愛知学院大学歯学部、宮尾嶽雄教授に多くの御教示を得た。深謝申し上げる次第である。

第 5 章

ま と め

深町遺跡は、古くから縄文時代後期を中心とする竹の花遺跡として著名であり、土地耕作者や小学生・中学生などによって多くの遺物が採集されてきたし、好事家にとっても格好の採集地でさえあった。ところが、依田地区は場整備事業によって全面的に破壊されることになった。そこで丸子町教育委員会では発掘調査を行なって記録保存することにしたが、本調査に先立ち、遺跡範囲把握のため試掘調査を実施した結果、遺跡の大部分が大字生田字深町に含まれ、字竹の花にはごく僅かの部分がかかるにすぎないことが判明し、既に学界に名高い竹の花遺跡という名称も、事実を示すには相応しくないことになり、協議の結果、以後は所在する字名をとり、「深町遺跡」と呼称することになった。人口に膚浅した名称を変更することには些かの躊躇もあったが、将来永きにわたってのことを考えて、敢えて名称変更したことを先ず断つておく。

さて、既に紹介してきたように、深町遺跡は縄文時代後期及び晩期と平安時代後期の、大きく分けて2時期に中心をもつ遺跡である。あまりにも膨大な遺物のために、本書は事実の紹介を主とし、考察的なことは最少限にとどめることにしているが、ここでは2つの時期それぞれについての簡単な整理を行ない、まとめにしたい。

※

縄文時代後晩期の遺構としては、敷石住居址・配石址・集石址・配石土括・集石土括・石棺墓・甕棺墓・土括墓・石器工房址などがある。何れも黒色土層の中に構築されているので、遺構である部分とそうでない部分の判別が困難で、そのプランの明確でない部分が多い。しかし、甕棺墓については、棺として使用された甕がしっかりとしているもののがいくつかあり、詳細に検討してゆけば好資料となりうるものである。また土括墓の中には明らかな再埋葬があり、葬制研究にも好材料となろう。更に一層興味深いのは、配石土括・集石土括・土括と甕棺墓の分布状態である。無規律に存在するというのではなく、何らかの規制によって占有するエリアが決定されているが如くである。これは住居址や石器工房址などの存在場所にも関わってくるが、次に述べる遺物のうちの特殊なものの分布状態と不可分の関係を有している。

出土遺物は非常に多種多様でおなかつ多量である。甕・鉢・注口などの土器のほか、打製・磨製の石斧・石鎌・石錐・石匙などの石器、石剣・石刀・石棒・石冠・石鍤・浮子などの石製品、土偶・土版・三角墻土製品・剝型土製品・土製耳飾り・土製円板などの土製品、石製土製の勾玉・硬玉製滑石製の玉類・牙製の装身具などの装身具類それに骨角製品がある。

土器はコンテナ(30×40×15)350にも及ぶ膨大なもので、後期中葉のものが量的に最も多く、以後晩期中葉までの土器が続いている。また、今回は調査が及ばなかった更に下層には中期の

土器が含まれていることが判明しており、従って若干の中期土器及び後期前葉の土器も出土している。出土土器からのみ考えると寡多の差はあっても、一応中期後葉から晩期中葉まで間断なく連続している。

中期後葉の土器は最も遡って曾利III式土器までであり、後期前葉は少ないながらも称名寺式土器・堀之内式土器が存在し、僅かではあるが三十幅場式土器が含まれ、また西日本系統の土器が含まれている可能性もある。最も多い後期中葉は加曾利B式土器の影響が非常に多く、他からの影響は殆んど認められない状況である。後期後葉及び末葉になると量は減少して、安行式土器の影響の外に中部山岳あるいは東海地方に多く見られる文様構成の土器と、東北地方の影響と考えられる土器も出現する。晩期に入ると量的に更に減少傾向をみせる。初頭に於いては後期後葉から末葉にみられた様相を認められるが、この外に東北地方の影響が大きくなり、むしろ主体となってくるかのようである。前葉から中葉にかけては東北地方の影響が大多であり、千曲川水系においては佐野式土器とほぼ同様の様相を呈する。そして晩期後葉の氷式土器出現以前に衰微してしまっている。以上、非常に大雑把に土器の流れをみてきたが、量的に非常に多い無文粗製土器については詳細な分析が未だ行なわれていないのでここで触れることは避けておき、後日の検討にまちたい。

そのほかの遺物も土器と同様の時期に属するものだが、特に約300ヶにも上る土製耳飾りと同じく約300ヶを数える土製円板の多量さが目をひく。また、上記の2つのもののほかに石劍・石刀・石棒・石冠・土偶・土版・三角墳土製品などの一般に祭祀に関わると考えられている遺物の多様さが注目される。しかも、土器・石器の分布状態が遺跡全体にわたっているのに比し、これらの遺物は若干の例外は認められるものの、ある一定の範囲に集中しており、先に述べた配石土括・集石土括・土括と豪棺墓の分布する部分及びその周辺と、住居址や石器工房址などの分布する部分との大きく分けて2つの地区に偏在するといえる。すなわち、前者は葬送の場所であり、後者は生活の場所である訳だが、その両者に分布の中心をもつということは、一般に呪的遺物・葬送儀礼遺物と称されているこれらの遺物が、該期の生死を超えた精神生活を考え上で非常に良好な資料となるものであろう。

以上のほかには、総数約5,000点にもなり、一遺跡出土としてはおそらく全国でも有数の量の石鎚は特筆に値する。形態的にも非常に多様で、用材もまた甚だ多様である。あまりにも多量さゆえ、基本的形態による分類と法量の計測のみを紹介出来るにすぎないが、細かな検討を加えれば興味深い結果を導き出せるであろう絶好の資料である。

※

平安時代に属する遺構としては竪穴式住居址5と小鐵冶址2がある。このうち、小鐵冶址は焼土の存在と若干の関係遺物の出土によってのみ、僅かに確認されたにすぎず、遺構としてははっきりしていないものである。竪穴式住居址は、第1・2号住居址が南壁を破壊されているものの、第3～5号住居址は隅丸方形プランを呈するもので、長軸を南北にもっている。第1・

2号住居址も同様と思われる。出土遺物としては土師式土器・須恵器・灰釉陶器があり、特に第4号住居址の南西隅からは土師式土器の壺形土器・皿型土器が集中して出土している。

該期出土遺物としては、土師式土器・須恵器・灰釉陶器があるのは上述の通りだが、ほかに、綠釉陶器・土鍤・瓦・羽口・鉄滓がある。土師式土器は器種も揃っており量も多いが、それに比し須恵器は少ない。また、灰釉陶器は多く、碗・皿のほかに小形の仏花瓶形品が1点含まれており当地方では類例がない。更に、綠釉陶器は上小地方初出の例であり、皿は半欠しているものの全容を知ることが出来、そのほかにも別の2個体のものの破片がある。以上の出土遺物の概観を通じて時期的には平安時代後期が考えられるが、土師式土器・灰釉陶器に比し須恵器の量が少ないことは、更に限定された時期が求められることを物語っているが、土器・陶器の詳略な検討を経て後日記することにするが、一応10世紀後半～11世紀前半という実年代を与えられようか。

深町遺跡は、古くから縄文時代遺跡として名高かったが、今回の調査の結果、平安時代集落遺跡としてもその重要性が認識されるに至った。殊に、灰釉陶器の多さと綠釉陶器の存在は、今後の研究に資するところが大きいものである。

図 版

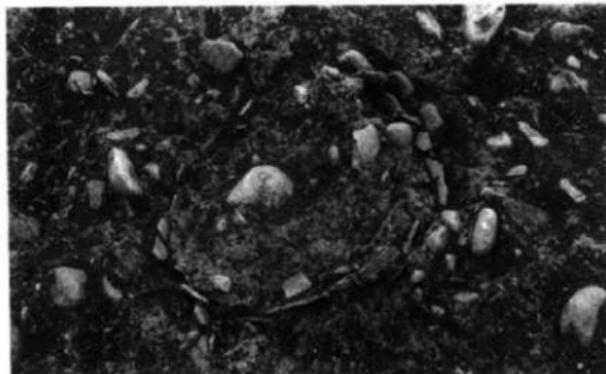


S B06



S X a SK09

図版2 遺構



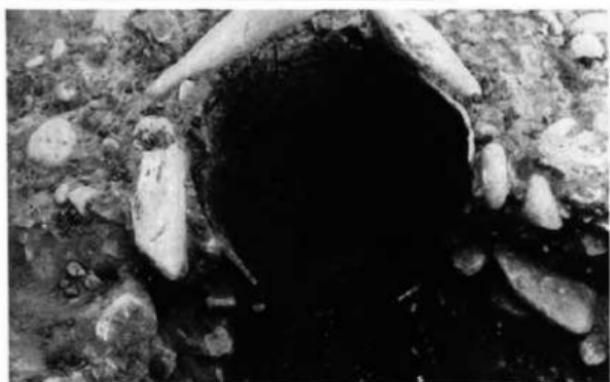
SKP-01



図版3 遺構



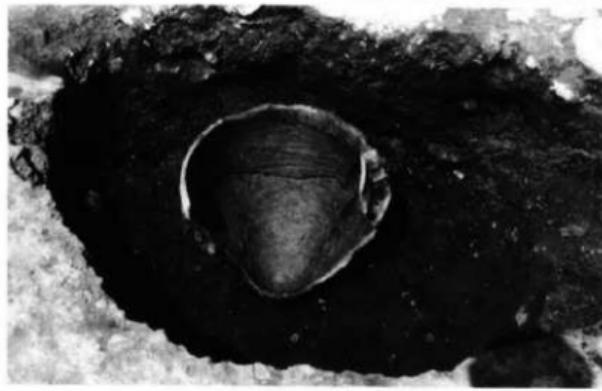
SKP-07



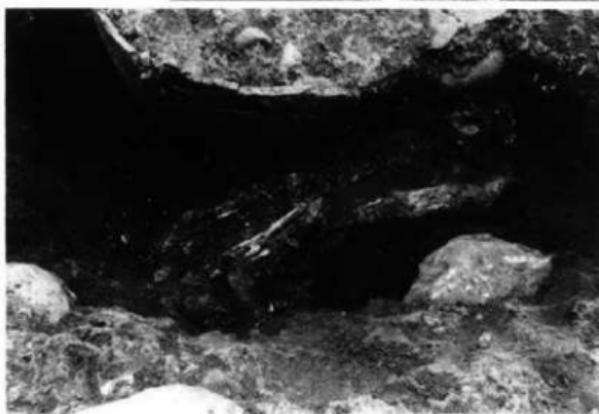
図版4 遺構



SKP-10



図版5 遺構



図版6 遺構



SKP-04と石棺



SKP-03



SKP-06

図版7 遺構



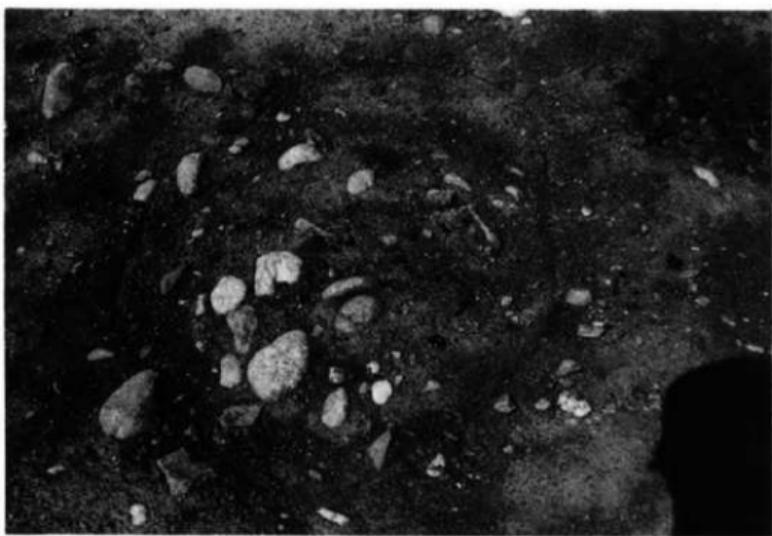
SK-09



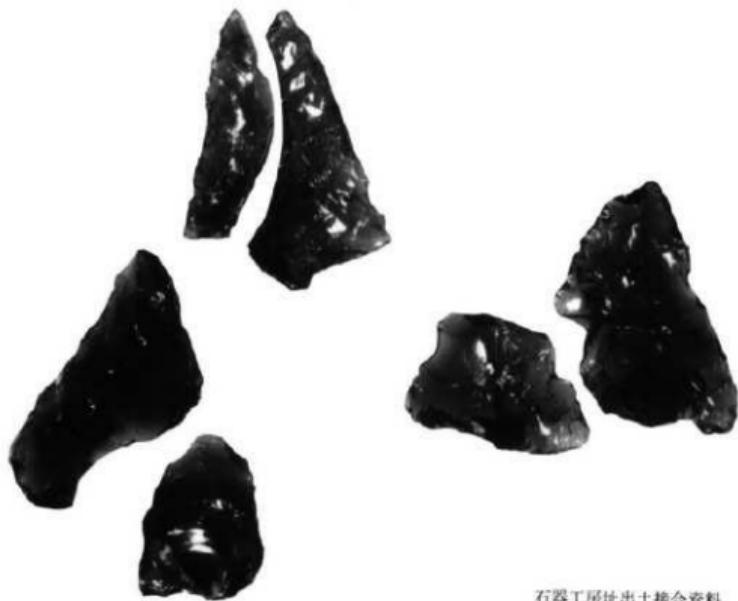


S X a - 17 - 1





石器工房址



石器工房址出土接合資料

図版 10 遺構（住居址）



SB-01



SB-02



SB-03



SB-04



SK-05



同上

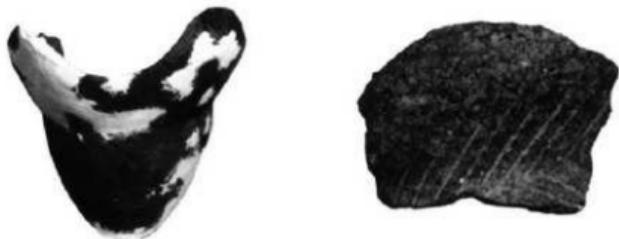
図版 13 遺物（縄文土器）



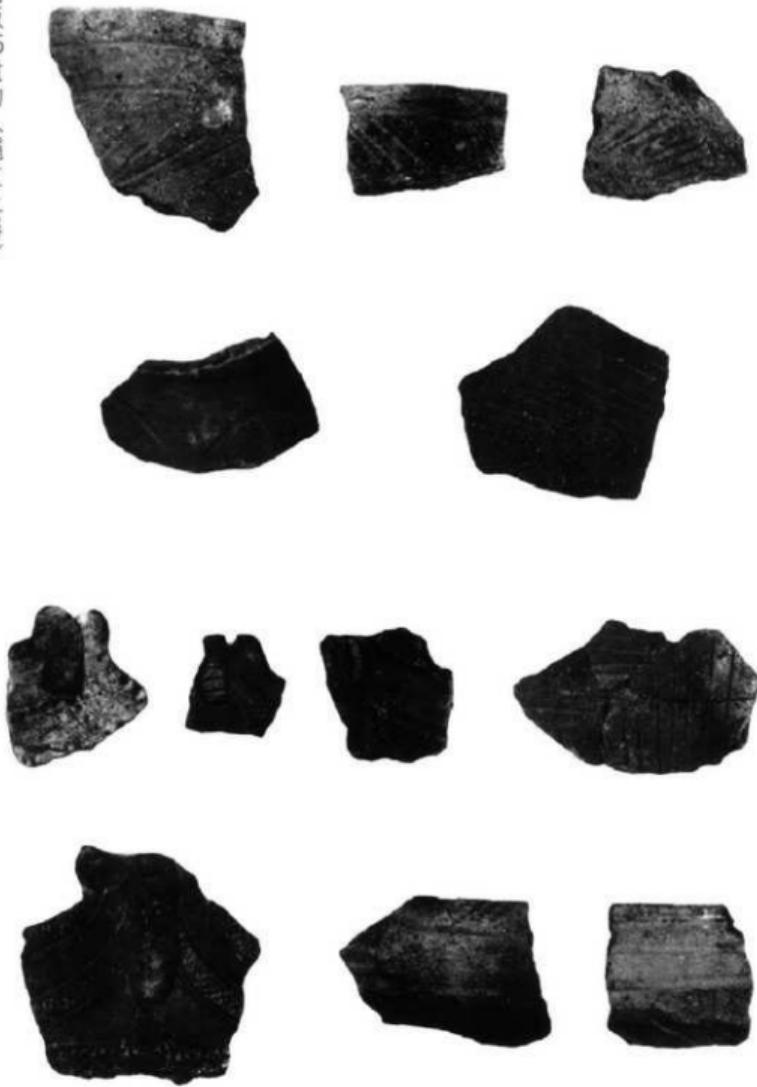
圖版14 遺物（繩文土器）



図版15 遺物（縄文土器）



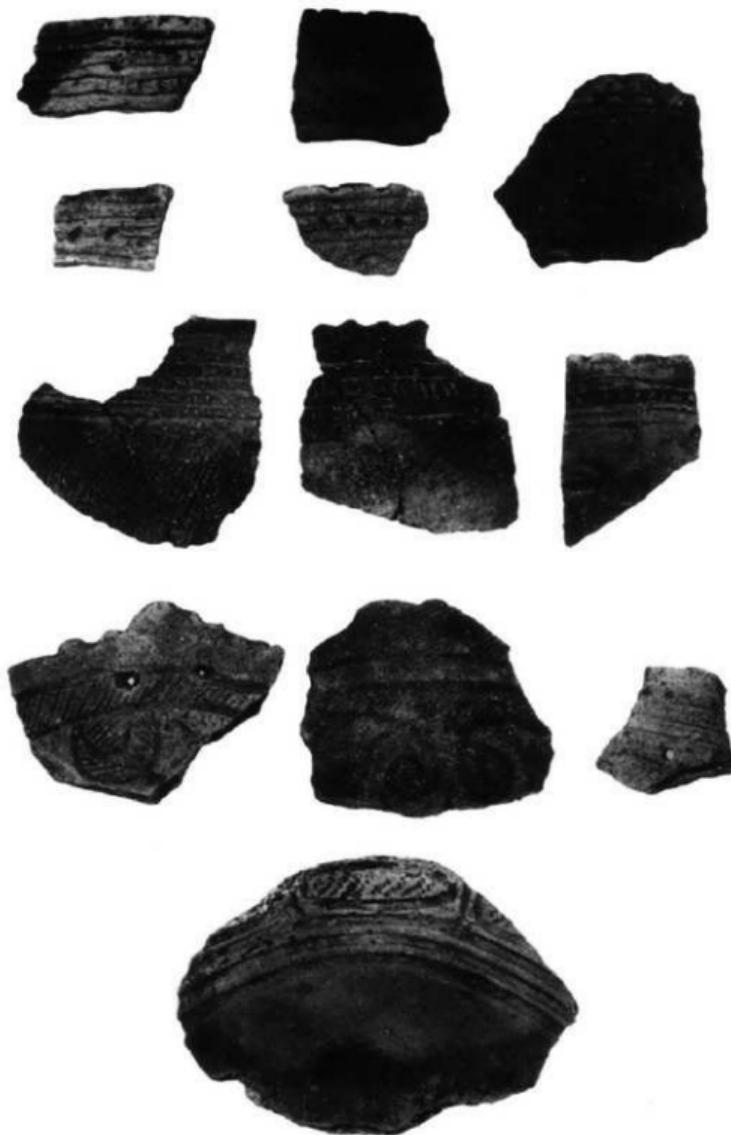
図版16 遺物（縄文土器）



図版17 遺物（縄文土器）



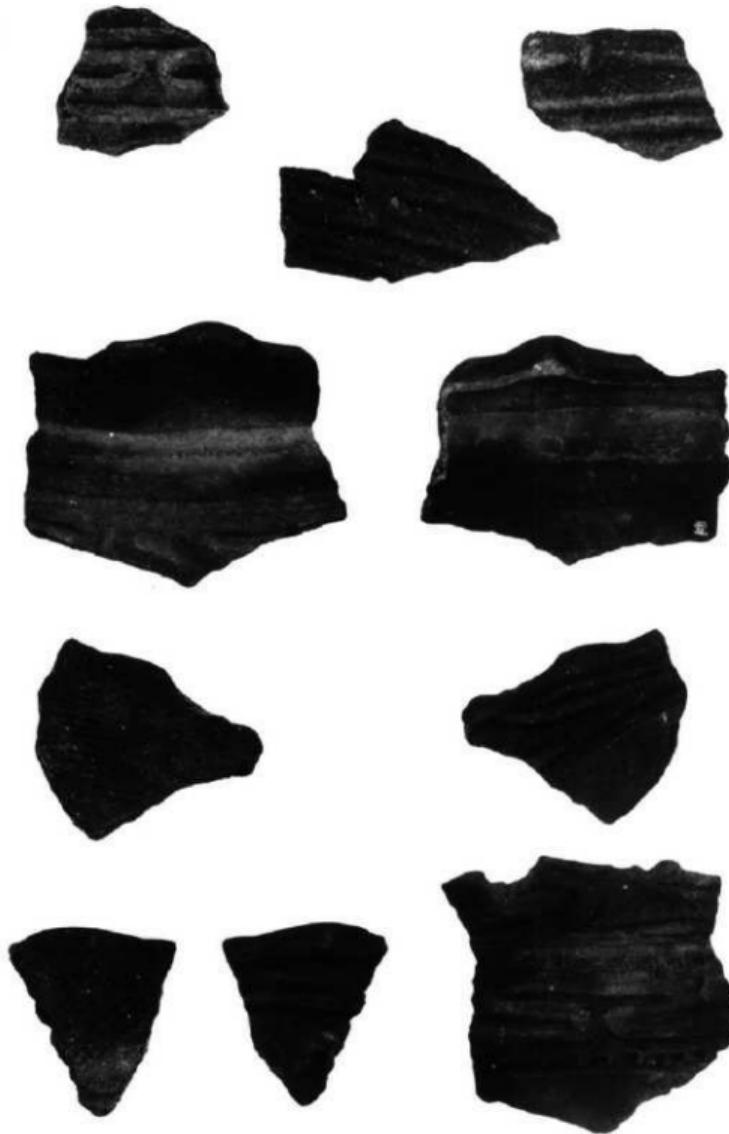
図版18 遺物（縄文土器）



図版19 遺物（縄文土器）



図版20 遺物（縄文土器）



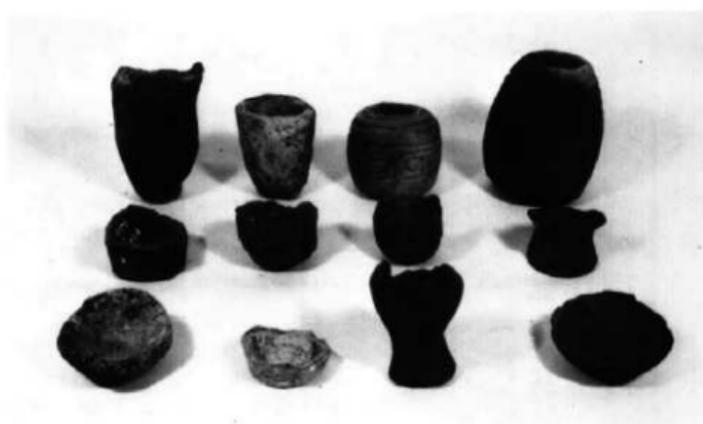
図版21 遺物（縄文土器）



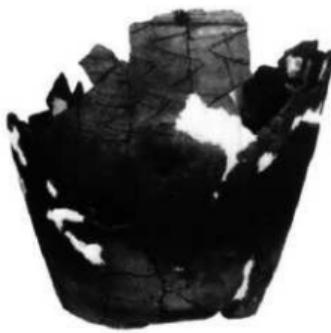
図版22 遺物（縄文土器）



図版23 遺物（縄文土器）



図版24
遺物
(繩文土器)

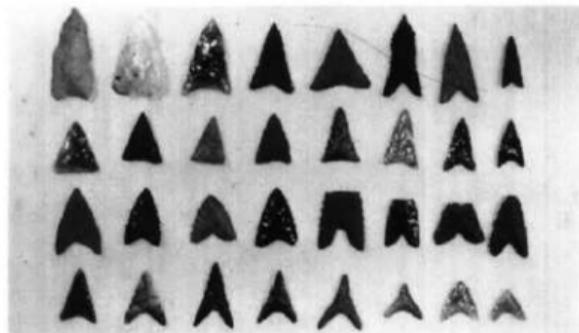


図版25 遺物（石斧）

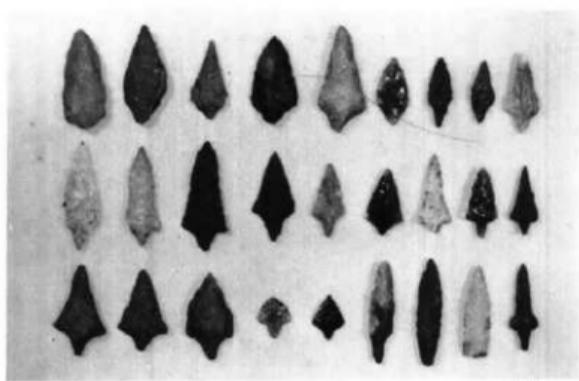


磨製石斧

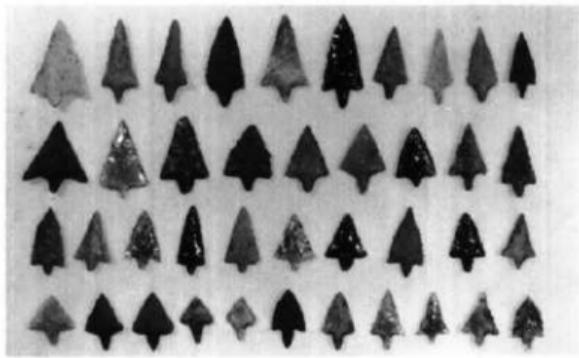
圖版26 遺物（石鎛・石錐）



I型

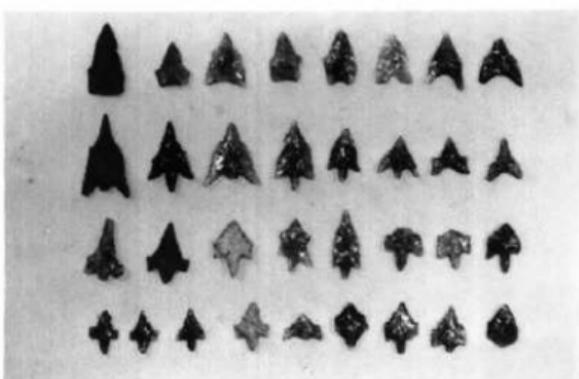


II型

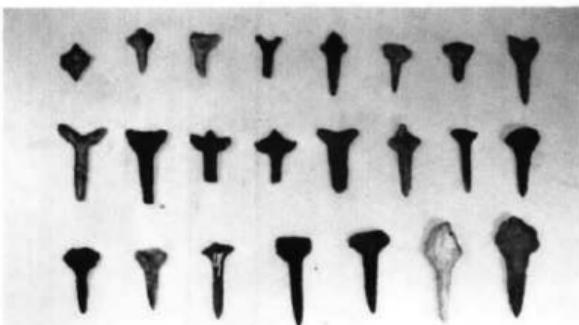


III型

図版27 遺物（石簇・石錐）

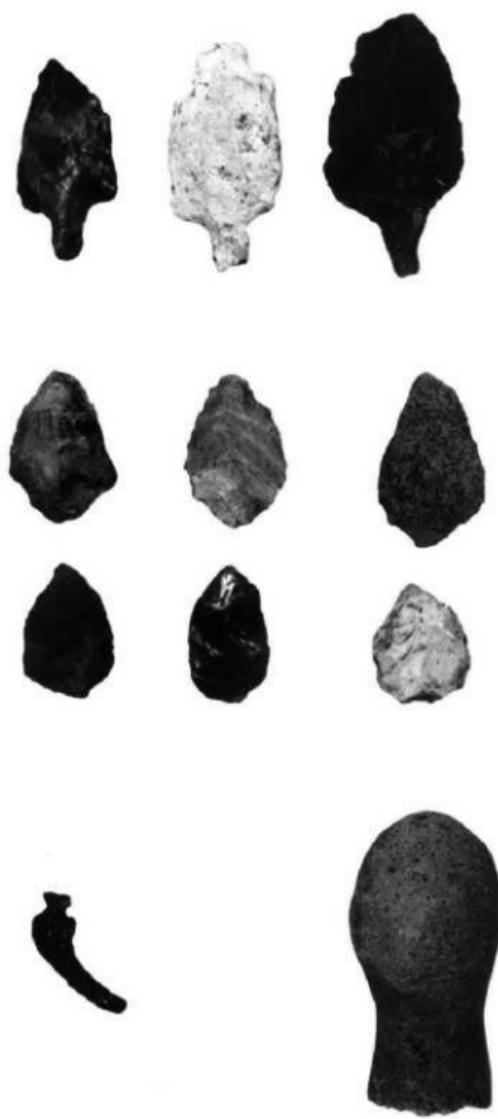


N型



図版28 遺物

(横刃部を有する石器・石棒)



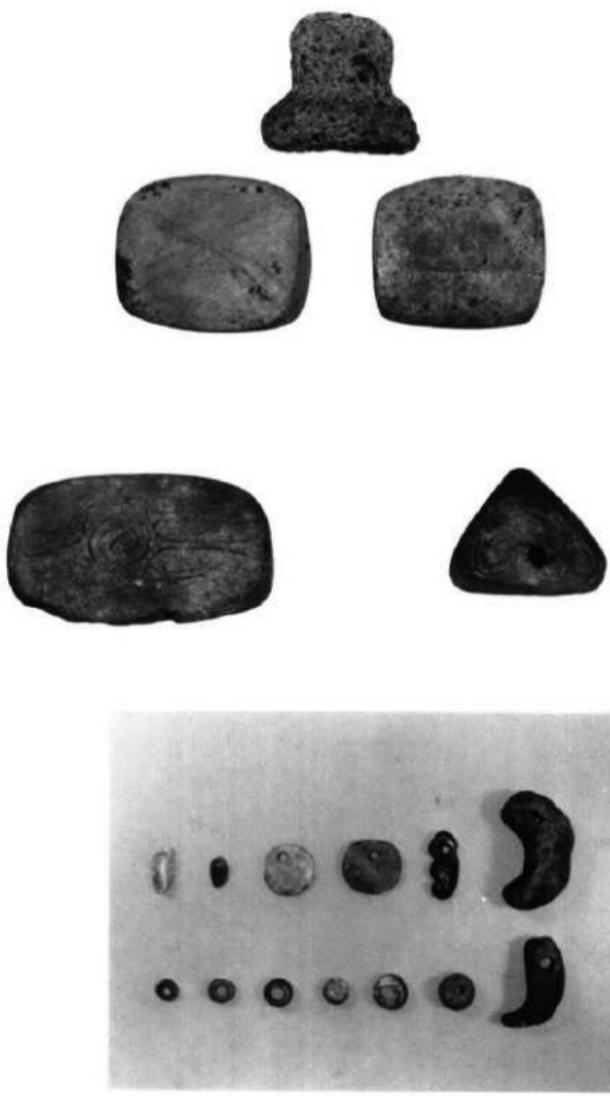
図版29 遺物（石劍・石刀）



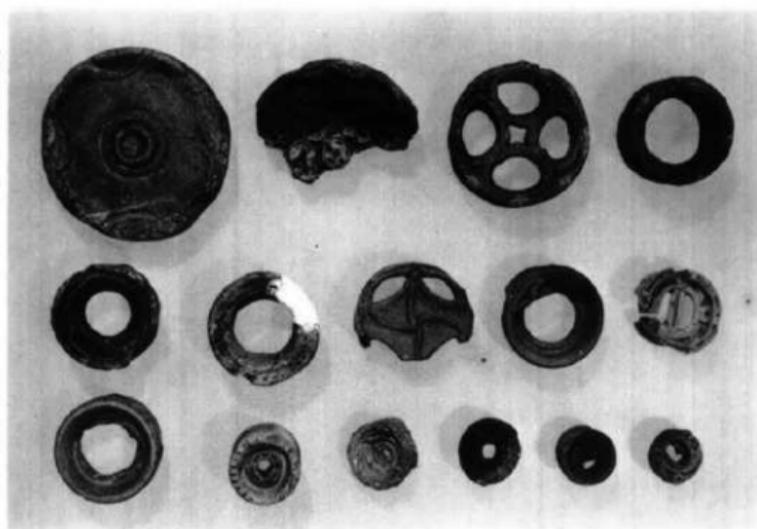
図版30 遺物
(石錘・浮子・土版等)



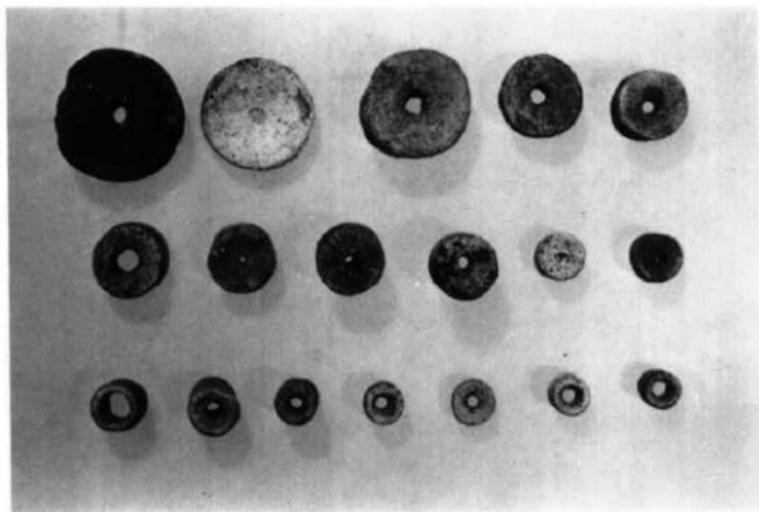
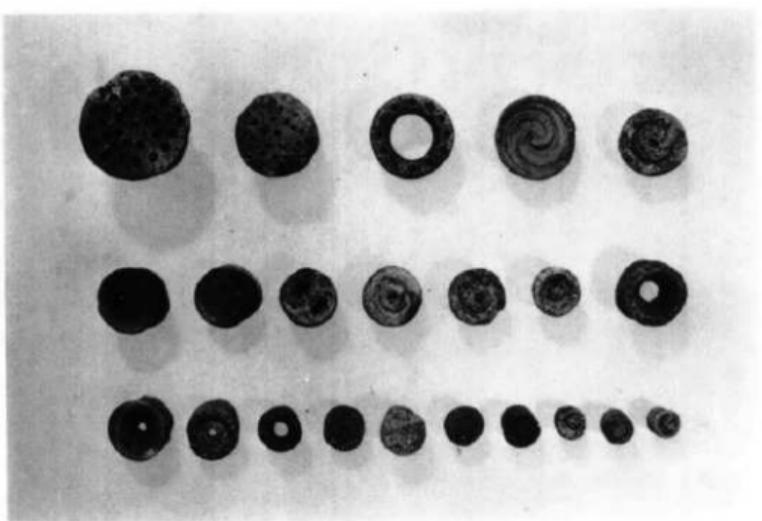
圖版 31 遺物
(石冠・三角墜・裝身具)



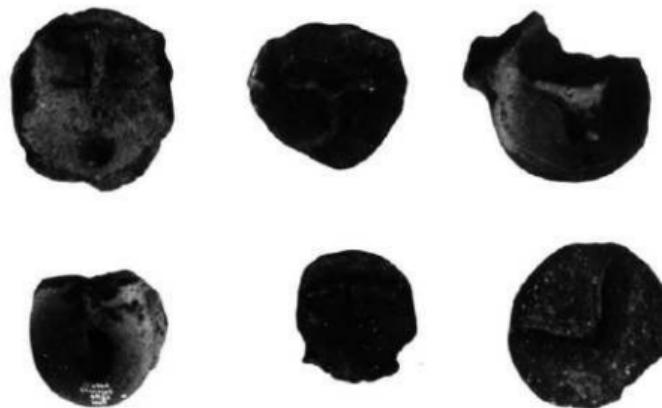
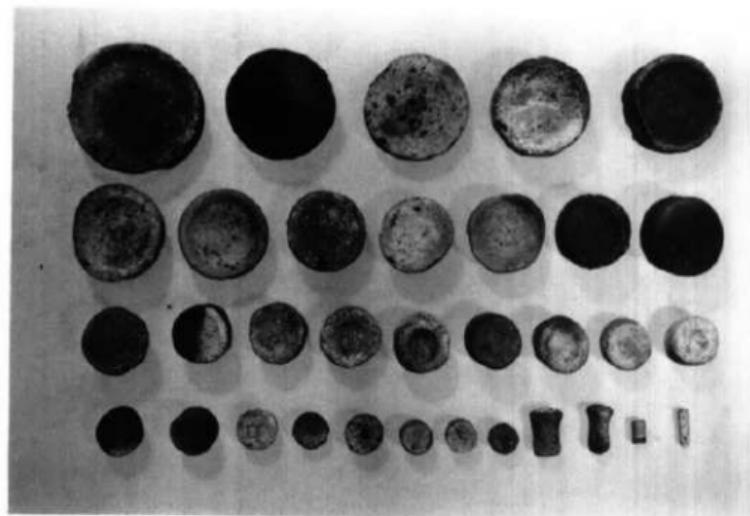
図版32遺物（土製耳飾）



図版33遺物（土製耳飾）



図版34 遺物（土製耳飾・土偶）



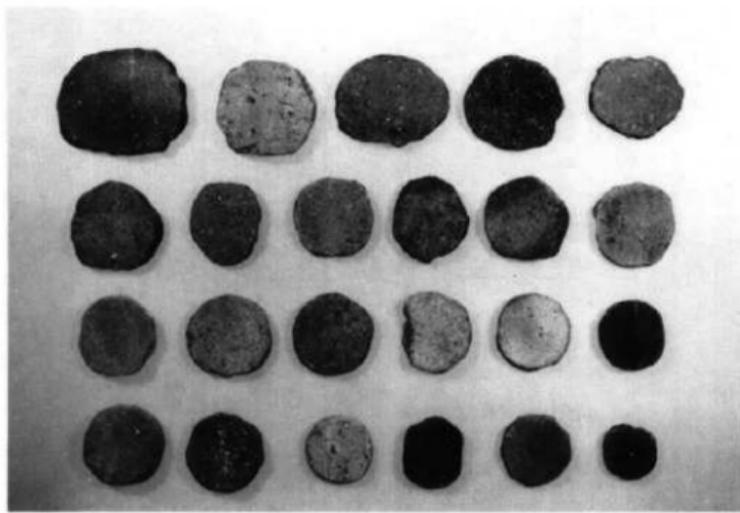
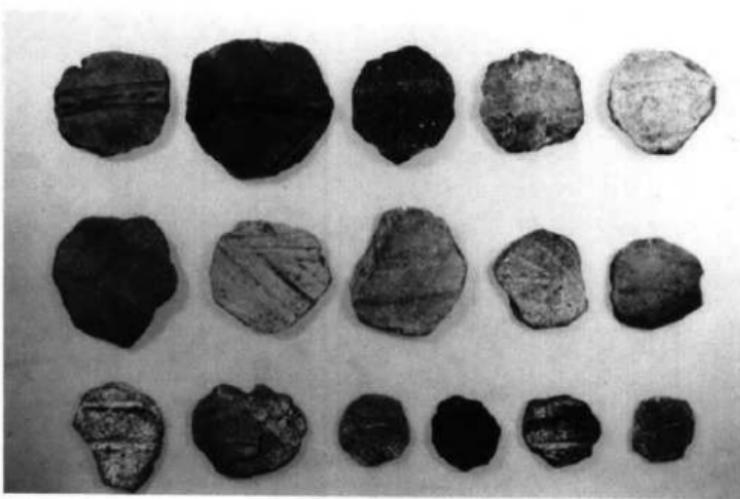
図版35 遺物（土偶）



図版36 遺物（土偶）



図版37 遺物（土製円板）



図版38 遺物



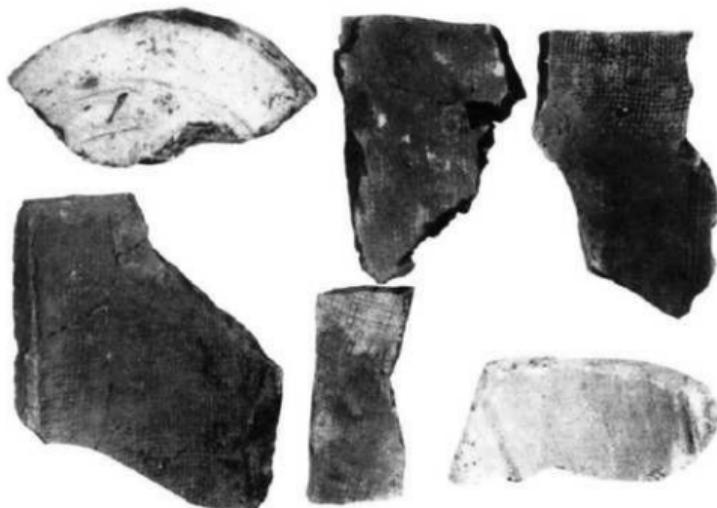
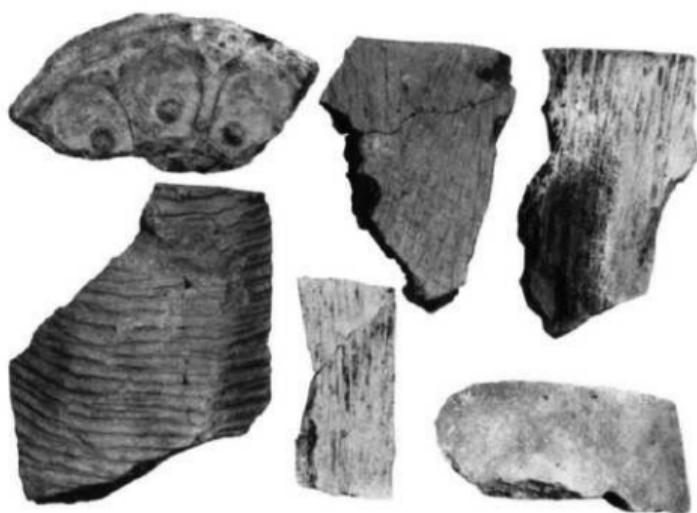
図版39 遺物（土師器）



図版40 遺物（須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・土錘）



図版41 遺物（瓦）



あとがき

深町遺跡の発掘調査は、昭和54年3月に試掘調査が実施されたのを皮切りに、本調査は同年4月1日 нача начало, 8月中旬に現場調査が終了した。焚火を必要とする時期から炎暑の季節まで、半年近くの日数を現場で費した訳であるが、しかし、それでもなお諸種の事情により、10,000 m²を上まわる遺跡を完全に調査することは不可能で、下層に更に古い包含層が存在することがわかつても、は場整備の設計図の上では下層包含層は破壊されないということを理由に、上層の調査に精力を傾注した。それでもなお、完全無欠の調査には程遠いものであることは否めないことである。けれども調査団にとって、また遺跡にとって幸いなことに、遺跡の重要さを理解された東信土地改良事務所と地元工事委員会のご協力と、県教委文化課のご指導により、設計変更して埋設保存されることになった。必ずしも最善の策とは言えないかもしれないが、現状としては最良の方法であり、文化財保護の上でも特記さるべきことであろう。

この間、地味な作業に黙々と精を出された多くの作業員の方々のご努力ご協力には衷心よりの感謝を申し上げたい。概報ではあっても本書が刊行されるに至ったことは、作業員の方々のほかにも、非常に多くの人々のお力添えがあったからである。それらの方々のご芳名は例言に紹介してあるが、文末ながら特に記して感謝の意と敬意を表したい。

(塩入秀敏)

深 町

——長野県小県郡丸子町

深町遺跡群緊急発掘調査概報——

昭和55年3月28日 印刷

昭和55年3月31日 発行

編集 依田地区埋蔵文化財発掘調査団

発行 丸子町教育委員会

長野県小県郡丸子町上丸子

T E L 02684(2) 3147

印刷 信毎書籍印刷株式会社

長野市西和田470

